
ガルディア大陸物語

流離人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガルディア大陸物語

【Nコード】

N82120

【作者名】

流離人

【あらすじ】

ガルディア大陸、ここは数千年前の大災害により人類の8割が死に絶え大地も荒れ、さらには文明が崩壊した。

その後どこからともなく「魔導士」が現れ、人々に「魔法」を伝えた。

多くの国が起き、廃れ、数多の戦争や災害により大きな国が4つと「ギルド」を残すのみとなり早300年の時が経った。

こことは違う世界から来た、と名乗る1人の青年がいた。彼は他の

年代と自分を比べ、次第に高慢になっていった。彼は強いつもりだった。彼は才能があるつもりだった。彼は1番であるはずだった。彼は……。

ガルディア大陸には異様な人物がひっそりと暮らしていた。歴史に名を残すことはないものの、時が経とうとその姿は変わることがない。彼は強かった。彼は才能があった。彼は優しかった。彼は……。

この二人が出会う時、悠久の平和が待っている筈だったこの大陸に新たな時代の風が吹き抜ける。

PVアクセス35000超え！ ユニークアクセス80000人超え！
皆様、いつもご愛読ありがとうございますm(・・)m

#1最強？旅立ち& a m p・出会い（前書き）

作者の性格によりこの小説にラブコメというものはおそらく存在しません。

また、作者は更新速度が亀並みに遅いので未長くお付き合いください。

流離人は大阪人のため、関西弁が交じることがあります。予めご留意ください。

追記：

稚拙すぎる始まりですがいつか改定版でも出したいものです。ですのでミス以外での編集はしない方針です。

#1最強？旅立ち& a m p・出会い

「はぁ・・・」

ある昼下がり、制服姿の青年はため息をついていた。

「何でこの御時世に武術なんてする必要があるんだよ。それに俺はもうだれにも負けないくらい強くなったっていうのに。でもそんなこと言ったらじいちゃんにぶん殴られるしなぁ・・・はぁ・・・どうしよ、寄り道して帰ろっかな。そうだな、そうするか。」

そう言つて青年は角を曲つた。その時だ。まばゆい光が目の前に飛びこんできた。

「うわっ！なんだなんだ!？」

彼が一瞬目を閉じ、ゆつくりと目を開けると・・・・・・・・・・
・・・・森にいた。

- - - - S I D E ? ? ? - - - -

「しっかしこのあたりも物騒になったなあ。この森林にはEクラスの魔物ぐらいいしかなかったのにな〜んでDクラスがいるんだ？ま、どっかからこの森林を侵略しに来たんだろうが俺に会ったのが運のつきだな」

その青年は大きな岩に座っていた。否、それは岩などではなく大きな生き物の頭蓋骨のようだった。そして青年の前には大きなかがり火で焼いたこれまた大きな肉の塊があった。どうやら捕まえた魔物

を食べる気のようにだ。

「さて、そろそろいいかな、つと。お？上出来だな。それじゃ、食べるとするか。……ん？誰だおまえさんは？」

彼の前には見たこともない服を着た一人の青年が無防備に立っていた。

「もう1度聞けど？おまえさんは誰で、何の用だ？」

青年はその問いには答えず、ただ一言言った。

「……おなかすいたあ」

#1 最強？旅立ち& a m p・出会い（後書き）

はい、短いですね。これからだんだんと長くしていきたいですが予定は未定です。しかし、短くともおそらく量は書くと思いますので前書きにも書きましたが末長くお付き合いくださいませm（・・）m

#2

「はあ、食った食ったあ」

「・・・お前、食い過ぎだろう」

ひきつった顔で笑みを浮かべながら続けて言った。

「せつかく10日分ぐらいの食糧にはなると思ってたのに何で1食で無くなきゃならねんだよ」

「まあそう言うなって」

「・・・はあ。で、改めて聞くがお前さんは誰だ？この辺の村の格好じゃあねえし、何より見たところ得物も持つちやいない」

「得物？」

「武器のことだよ。もしかしてお前はあの拳で戦うのか？それとも魔法士か？いや、なら1人でいるわけがねえな・・・」

後半はぼそぼそと言ったために風にまぎれて消えてしまっていた。

「武器？武器なら刀が使えるぞ。それに拳でも結構いけるぜ」

「刀？まあいい。それじゃ、次の質問だ」

目を少し細め、威圧しながら言った。

「お前はどこから来た」

「どっつて・・・ここはどこだ？」

「・・・」

「俺は気がついたらここにいたんだ。さっきまで住宅街にいたのに」

「・・・」

「ほ、本当だつて。だからそんなに睨むなよ」

（眼を見る限り嘘をついてるようには見えないな。記憶喪失か？それとも記憶が混乱してるのか。それにしても言葉ははきはきとしているな）

「名は？」

威圧を消しそう聞いた。

「え？」

「名だよ。名前。何て言うんだ？」

「俺の名前は川崎琢磨^{かわさきたくま}」

聞きなれない名前に少し目をしばたき、

「カワサキ タクマ？」

「ああ。あんたの名前は？」

「驚いてるところ悪いがきちんと説明してくれ」

「え、ええと、俺が異世界から来たと言ったら信じる？」

琢磨はしどろもどろになりながらも説明しだした。

「ふむ、異世界・・・か。ありえん話ではないな。聞きなれぬお前さんの名前」

「琢磨だ」

「そう、タクマ。それと日本とかいう国名。世界を旅してる俺でも見たことがないその格好。全てを総合して考えると、まあ納得できなくはないな」

腕を組み、目を閉じながら思案顔をしながらそう語った。

「そ、そうか。信じてくれるのか」

ガルムは少し笑んだ顔で言った。

「まあな、嘘をついてる目でもないしな」

琢磨は怒った顔で言い返した。

「当たり前だ、俺は嘘なんてつかねえ。弱い証拠だからな」

「弱い証拠、か。まあいい。」

「何か引つかかる言い方だな。で？」

「ふふふ、気にするな。お前は俺の食糧を食っちゃったわけだしな。」

俺の食糧集めを手伝え。その駄賃としてこの世界で不自由のないぐ
らいの常識を教えてやろう」

琢磨は驚いた顔で言った。

「ええ、タダで教えてくれよ。・・・まあいいか。一宿一飯の義
理って言うしな。いいぜ、手伝ってやるよ。ただ、何か武器ないか
？出来れば刀、なければ剣がいいんだが」

「ふむ。なかなか若くして殊勝な言葉を知ってるな。刀とやらは無
いが剣はこれを貸してやろう。それと肉をはぎ取る際にはこのナイ
フを使うといい。その剣ほどではないがそれでも結構な切れ味があ
るからな。気をつけて使えよ。それと絶対なくすなよ」

琢磨はガラムから剣とナイフを受け取り、こう返事した。

「若いつて、お前もそう変わんないじゃねえか。それにさっきも言
っただろ、俺はかなり強いぜ。お前よりもでかくてうまい肉を捕ま
えてきてやるよ。そういえば剣借りちまったけど、ガラムは武器あ
るのか？」

「はっはっは。安心しろ、俺には剣があと2本ある。それにしても
楽しみだな。では私も精進するでしょうか。では、二手に分かれて
1時間後にこの場所で落ち合おう」

琢磨はにやりとこう言った。

「俺が運べないくらい大きな獲物を捕まえた場合は？」

「はっはっは。ならその時のためにこの火の魔精石をやろう。使い
方はわかるか？」

「いや、わかんねえ。どうやって使うんだ？」

「この魔精石を握りしめてこう呟け、＜ファイアー＞と」

琢磨はその言葉を聞き、魔精石を凝視した。

「無論、これが使い方の全てではないが、それも含めてまた後で教えてやるよ」

「そっか、じゃあまた1時間後に」

「ああ、1時間後、また会おう」

二人はそう言いながら握った拳をぶつけ合い、お互いに背を向けて緑鮮やかな葉を宿す木々の間に消えて行った。

#2（後書き）

次回からついに戦闘がはじまります。

名前は語感を中心に選択しておりますので、発音しにくい名前はあまり登場しません。

ちなみに、この1話2話で既に伏線がいくつも仕掛けてあります。

鋭い皆様の目からすれば一目瞭然でしょう。

今回の文章でおわかりかと思いますが流離人は「え」「…」を多用します。

見にくい文章ではあるかと思いますが実際の言葉の感じをイメージしながら書いてありますのでどうかご容赦ください。

感想・誤字・脱字報告 お待ちしております（^^）ノシ

追記：行間1行空けた方が読みやすいですかね？

追追記：行間空けることにしました

#3 初戦闘、そして・・・

————SIDEガルド————

ガルドは木々が生い茂る中で少し開けた場所に立っていた。

ガルドの周りには緑色の液体をまき散らした植物が数多く倒れ伏していた。

「ふう・・・。これで10体目か。さっきはあんなにでかい奴が狩れたのに、今度は植物の魔物が多いな。もしかしてさっきのやつがこの主だったとかいう落ちじゃないだろうな。もしそうなら無駄足どころか散財じゃねえか。木の実や果実だけでも食っていけるがどうせなら肉食いたいしなあ」

そう言いながらガルドは魔物を踏み潰しながら奥へ奥へと歩いてゆく。

次第に周りの景色が葉の生い茂る木々から枯れた木になっていく。

「そもそも最近の肉は高すぎるんだよ。一食分で銅貨10枚なんて誰が買えるんだよ。肉一食で3人家族を2日養えるとか・・・。ん？何でこのあたりの木は枯れてるんだ？夏も近いのに・・・」

ガルドは木の一本一本を丁寧に見て回る。

「病気つてわけじゃない。虫もいない。」

今度はしゃがんで土を手を絡ませる。

「土は・・・悪いところかこんなに養分のある土も珍しいな。なら何でだ？・・・これは？」

何かを手にとめて立ち上がり、腕を組み目を伏せ考える。どうやらこれがガルドの考えるときの癖らしい。

その時、ガルドは勢いよく横に跳躍した。

スタリと着地すると、先程まで立っていた場所には全長3mをも超える巨大な鳥が爪をとがらせて羽ばたいていた。どうやら獲物を捕まえ損ねて怒ったらしい。そのまま再び空に舞い上がり、巨体な羽を大きく広げ襲ってくる。

ガラムはこれを軽々と避け続けながら不思議そうな顔をしてこう呟いた。

「やっぱりこの緋色の羽はロック鳥だったか。・・・この新たな主か？いや、さっきのDクラスのベアフアングが主だとしても倒してから3時間ほどしか経ってないぞ。それにロック鳥はBクラスだ。格が違う。くそつ。いったい何が起こってやがる。仕方ない、食糧集めは中止だ。いますぐタクマと合流して森を出た方が無難だな」

そう言いながら剣を振り、どうやったのかはるか上空にいるロック鳥を叩き落とした。

「剥いでる時間ももったいないな。タクマは・・・無事だといいが・・・」

ロック鳥には目もくれず、ガラムは来た道を猛烈な勢いで引き返し走った。それはもはや跳躍に近かった。

————SIDE 琢磨————

琢磨は先程ガラムから貰った剣を鞘から出し、眺めていた。

その剣はすらりと鞘から抜け、微弱ながらも光を放っているように見える。

「剣についてはあんまり詳しくないけど、素人の俺にもこの剣の凄さはわかるな。それに、他人の剣なのに俺の手によく馴染む。装飾が少ないけどその代わりに実用さを追求した剣なんだろうな。長さ

は1mぐらい。これがロングソードってやつか」
その剣は重すぎることも軽すぎることもなかった。

琢磨はそれを両手で持ち正面に構えて2度3度と振ってみた。

「へへ、早くこの剣を使ってみてえな」

その時、右後ろの草むらが、がさがさと揺れる音を聞いた。

「お、早速獲物か、さあ来い。天才剣士琢磨様がお前を肉塊に変えてやるぜ」

がさがさ、がさがさがさがさ
草を分ける音がだんだんと近づいてくる。

ぴよこん、ばてばてばてばてばて・・・

草むらから現れたのは気持ち悪い怪物でもライオンのような猛獣でもなく、一羽のかわいらしいピンクのウサギのような生物だった。
それは琢磨を警戒し近づかないようにしながら、来た方とは逆の方向へ駆けて行った。

続けて、2mほどの大きな狼のような生き物が三匹、琢磨を囲うように現れた。

「ようし、ウサギが来たときは拍子抜けしたが、お前たちには満足だ、さあ来い。来ないなら行くぞ」

口先だけでなく琢磨は戦いというものを心得ていた。つまり先手必勝である。

琢磨は一番近い狼を袈裟切りをくらわせ、さらにもう一匹も逆袈裟切りを与えた。

「はっはー。やっぱり俺って凄いで。でもこの剣の切れ味は本当に凄いな。剣の特性から脳しんとうでも起こせばいいと思ったが二匹とも真つ二つだ。ま、俺の技術があつてこそだけだな」

そう言っている間に残りの狼は身を低くし襲いかかってきた。

しかし琢磨は冷静であつた。くるりと回るように狼の身体を受け流し、そのまま狼を後ろから横に真つ二つに切り裂いたのだ。

「ようし。楽勝。剣についた血糊を拭き取って・・・よし。貰ったナイフで剥ぐとするか」

最初は意気揚々と狼を剥いでいくが、すぐに顔を青くしていた。無理もない。琢磨は何度もケンカこそしていたが、身を剥ぐことはおろか、動物を殺したこともないのだから。

琢磨は吐き気をこらえながらも、何とか剥ぎ終え、予め教えてもらっていた部分だけを袋に入れて歩きだした。

「はあ・・・俺はこれから生きて行くうちにこんなことを屁にも思わなくなるくらい慣れるんだろうな。凹んでいても仕方ない。ガラムよりも大きい獲物を捕まえて驚かせてやるんだ」

琢磨はそう言つて奥へ奥へと歩き始めた。やる気だけはあつたが疲れもたまっていた。

暫く歩いてても獲物は見つからず、少し開けた場所で疲れをとるために切り株に座つて貰った水を飲んでいた。剣は提げるのをやめ、しかしすぐ取れるように脇へ置いていた。

「ふう。ガラムはどうしてるかな。大きいのとれたかな。そういえ

ば、この世界で大きいってどれぐらいなんだ？しまった、聞き忘れたな。まあいい、2mの狼三匹を狩れたんだ。もっと大きいのだった俺の手にかかれば楽勝だろ。・・・ん？気のせいかな？何か向こうの方で何か聞こえたような。そう、鳴き声のような・・・」

琢磨はこの時点ではいつものように高慢でいた。それもそのはず、先の戦いで勝利を収めていたからだ。しかし、琢磨はここでは引き返すべきだったのだ。

琢磨はまた道なき道を剣を提げながら歩いてゆくと、そこには大きな蜥蜴の様な生物がいた。

「まさか・・・あれはドラゴン？おおお！きたぜ、初ドラゴン。あれを狩ったらガラムに勝ったも当然だ。俺の技術に加えてこの剣もあるんだから楽勝だろ。それでも・・・一応様子を見ておくか」

琢磨は呟くと、草むらに隠れるようにしゃがみ様子を見ていた。実は、それはドラゴンではなく亜種のワイバーンという生物であったが、琢磨がその名を知るわけもなく、また、強さがBクラスで素人が手を出してはいけない魔物だということも知る由もなかった。ワイバーンはどうやら、琢磨も先程戦ったベアウルフを捕食しているようだった。

やがてワイバーンが動きを変えた。

（捕食が終わったんだろうか）

琢磨はよく見ようと、顔を上げた。上げてしまった。

琢磨はワイバーンと目が合ってしまった。

その直後、琢磨は左へ飛んだ。これが功を奏した。ワイバーンは右

回転しながら炎を吐いたのだ。
もし琢磨が右に飛んでいたのなら今頃丸焦げだっただろう。

琢磨は先の戦いと同じように先手必勝と考えて、剣を構えて叫びながら突っ込んでいった。

「あああああああ！」

しかし、琢磨は剣の使い方を知っている訳でもないために剣に無駄な力が入り、ワイバーンの鱗にはじかれてしまった。琢磨はあわてて剣を見ると細かいひびが幾つも入ってしまったている。

「っ」

琢磨は高慢な性格とガルムとの勝負が災いし、逃げるという選択肢を思い浮かばなかった。

その間にもワイバーンからの幾度もの炎を避け続けていた。

しかし琢磨の体力は限界であった。ついに完全に避けきれず左腕に火が付いてしまった。あまりの熱さに琢磨はのたうちまわるしかなかった。

「うわあああああ」

何とか水で火を消したものの、ワイバーンがその隙を見逃すはずもなく噛みつく為に進んできた。

琢磨の体は極度の疲労と緊張で動けなかった。

（俺は・・・死ぬのか？こんなところで？嫌だ！死にたくない！ガルム！助けてくれガルム！）

「タクマ！剣を盾にして目をつぶれ！」

「ガ、ガルムか？でも剣にひびが！」

「かまわん、早くしろ！」

琢磨は何とか剣を盾にするように前へ、そしてギョツと目を閉じた。するとすぐに衝撃が体を突きぬけ剣が碎けるのを感じた。琢磨はそこまで感じて視界が暗転した。

（ガルム！ガルム。ガル・・・ム・・・）

#3 初戦闘、そして・・・（後書き）

流離人の技術じゃこれぐらいしか書けない！
神様、どうか哀れな私に文才を下さい！

というわけで初戦闘シーン

中々長く書いたつもりだけどこんなものなのか・・・
長く書くのってこんなにも難しいんですね。

いや、今話も長く書くこうと思えば書けるんですが、ちよつどいいの
で戦闘シーンで終わっておきます。

#4 新たな出会いと決意

(こ・・・ここは・・・?)

琢磨の意識が戻った時、しっかりしたベッドに寝ていた。

(俺はいつたい。あ痛っ、そうか。俺は異世界へ来て、ガルムに会って、そして・・・そして負けたんだ。俺は負けたんだ・・・)

琢磨の頬に一筋の涙がつたつた。

「・・・あ。ああ。そうだ。だから・・・5人ほど。ん?・・・なら二人寄越してくれ。・・・別に かまわんが、どこまで出来るかわらんぞ」

(ガルムか?誰と話しているんだ?)

ガルムは光る石を手にとって誰かと話していた。

「ああ、なら良い。・・・ん?すまないが切るぞ。連れが起きたみたいだ。・・・さっき言っただろ?迷子の少年だよ。・・・そこら辺は本人に聞くよ。ああ、じゃあな」

ガルムは琢磨の寝ているベッドへ近づきながら、光らなくなった石を懐に入れた。

「よう。やっと目覚めたか。痛いところはあるか?」

琢磨は体中を動かし始めた。そして、ぶすつとした様子で言った。

「体中が痛い」

「はっはっは。そうかそうか。だがな、痛みを感じることは治るという証拠だ。痛いままは辛いだろう。今痛みを抑えられる奴を呼んでこよう。おい！、アシエール！おい！」

「はーい」

コッコッコッコッコッ

元気の良い返事とともに誰かが近づいてくる。

部屋に入ってきたのは中性的な顔をした、自分と同じぐらいの年齢の女の子だ。

髪は後ろでひとくくりにしてある。

「呼びました？ガルム様。・・・あら、お連れの方、お目覚めになったのですね？」

「ああ。だからユウの奴を呼んできてくれないか？」

「はい。わかりました。少々お待ち下さい」

コッコッコッコッコッ

琢磨は何とか体を起こし、

「なあ、ガルム。ここはどこなんだ？」

「ここか？ここは昨日、お前から言わせればさっきだろうが、まあ俺たちがいた森があるだろ？そこから一番近い町。キーリエの町にあるギルド支部だ」

「ギルド？」

「ああ。そこら辺はまた後で教えてやるよ。約束だしな。それよりもタクマ」

ガルムの様子が一変し真剣な様子になった。
自然と琢磨も背筋を伸ばす。

「すまなかった」

ガルムは両手を膝に当て、座ったまま深く頭を下げた。

「え？」

「俺はあの時お前の実力を知らないのに一人で行かせ、そして傷を負わせた。それは明らかに俺のミスだ。謝って済むとは思っていない。だが謝らせてくれ、すまん」

「ちょ、ちよつとまてよ！」

琢磨は謝られるとは思ってなかった。

なぜならあの時自分は強いと思わせるような言動をとっていたし、琢磨自身一人で行けると思っていたからだ。そして、迷惑をかけたのは自分であり謝るべきなのも自分であるはずだ。それにもかかわらずガルムに謝られ、気が動転してしまっていた。

「俺こそ、迷惑をかけてごめん」

お互い、頭を下げあった。

コッコッコッコッコッ
パタパタパタパタパタ

二つの足音が近づいてきた。

（一人はさっきのアシエルって女の子だろ？もう一人はだれだ？）

「呼びましたか？ガルムさん」

ガルムと琢磨が振り向くと、そこには動きやすそうな格好をした豊かな女性が立っていた。先端に白い宝石のついた杖を握りしめている。

「すまんユウ。連れが起きたんでな。白魔法で治療してくれないか？」

「わかりました。どこが痛いんですか？」

「全身だつてさ」

琢磨はガルムとユウの会話が耳に入っていなかった。なぜなら、

（白魔法？魔法が見れるのか？）

・・・わくわくしていた。

「では、服を脱いで下さい。ああ、もちろん全部ですよ」

ユウは笑顔で琢磨に言い放った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

「服を脱いで下さい、全部。アシエルは外に出ていなさい。タクマ君も年頃の男の子なんだから恥ずかしくて脱げないでしょ？」

「はい」

そう言つてアシエルは部屋から出て行くとする。

「じゃあまたね。ガルム様？」

コツコツコツコツコツ

（え？え？ええ？待つて待つて待つて待つて？え？脱ぐつて、下着も？）

「あら？ああ、大丈夫よ。私は何回も男の人の裸を見ているから」

琢磨はそうではないと、首をぶんぶんと横に振り手をばたつかせた。ガルムはそんな二人を見て微笑み、そばの机に置いてあったコートと武器を持ち、

「さて。俺も行くか」

「あら？ガルムさん、どこかへお出かけですか？」

「さつきギルドのお偉いさんにここの森の異常の報告と応援を呼んだんだが、応援が到着するまで俺が適当に片づけることになってな」

「俺も行く」

琢磨は何も考えず条件反射でそう言った。

「ダメだ」「ダメです」

「怪我してるお前を連れて行くわけにはいかねえ」

「でも！」

「ガルムさんの心内も理解してあげて下さい。これ以上琢磨さんが傷ついて欲しくないんですよ」

「・・・」

「それに今あなたが言ったとしてもガルムさんの足を引っ張るだけです？それでも行きますか？」

琢磨は俯きながら小さく首を横に振った。

ガルムは琢磨が背伸びをしていることに気付いていた。

琢磨もまだまだ子供なのだ。そんな琢磨の頭をなでながら

「お前はしっかり傷を癒しなさい」

ガルムは優しく、諭すように言い聞かせた。

そしてコートを羽織り剣を提げ、出て行こうとした。

「・・・いつてらっしゃい」

ぽつりとつぶやくように琢磨は言った。

「・・・いってきます」

ガルムは微笑みながら、優しい声ではつきりとそう返した。

ガルムはギルドを出て自分の体調を確認した。

（タクマを助けた時に少し左腕を痛めたか。それでもタクマの治療が終わる前に帰らなきゃならん。また心配させることになるから。・
・それにあの異常現象も心配だ。）

「鈍らないようにたまには本気を出すとするか」

ぽつりと呟き、その声の余韻が消える頃にはガルムの姿は忽然と消えていた。

—————1時間後—————

「ふう。終わりましたよ。お疲れ様でした、もう服を着てもいいですよ」

タクマの顔は真っ赤に染まっていた。年頃であるのに女性に裸を見られたため当然の反応だった。

そしていそいそと服を着ると、ユウも少し疲れた様子に見えた。

「ありがとうございました」

「いえいえ、白魔法を使えるものとして当然の行為をしたまでです。しかし、あと3日は安静にして置いて下さいね？さもないと今の治

療をもう1回しないといけなくなりますから」

「は・・・はい」

さすがに無理に動いてもう一度同じ治療を受ける勇氣はなかった。

（ガルム、大丈夫かなあ）

「ねえ」

「え？」

気がつくとユウはいなくなり、その代わりにアシエルがいて此方を覗き込んでいた。

「ねえってば！」

「あ。何？」

ガルムのことを考えている間に少女の言葉を無視していたようだった。

「あなた、あのガルム様とどういう関係？」

「どういって。別になんの関係もないよ」

アシエルはその言葉に納得がいかなかったのか声を大きくした。

「そんなの嘘！じゃあなんで一緒にいるの！？」

「あそこの森で会ったんだ」

タクマは顔をしかめながら正直に本当のことを言った。

（声がでかくて耳が痛い）

ようやく納得したのか、落ち着いた声で話し始めた。

「ふうん、やつぱりね。あんたみたいなBランクの魔物すら倒せないやつがあのか、ガルム様と一緒にいるなんておかしいと思ったのよ。」

その言葉を聞いて琢磨は驚いた。

（え？ガルムって本当はとても強いのか？）

「な、なあ。ガルムって何者なんだ？」

「あなたは森で初めてガルム様に会ったんだったわよね。なら知らなくて当然か。ガルム様はS級ランクの冒険者よ。分かる？S級ランクよ？」

ランクについて詳しく知らない琢磨ははつきりと分からなかったが、アシエルの次の言葉で愕然とした。

「知ってると思うけど、S級ランク以上、S級・SS級・SSS級はこの大陸でも30人しかいない。つまりガルム様はこの大陸の最高戦力の一人と言っても過言ではないのよ。・・・ま、私もさつきガルム様が支払いの時に、出したギルドカードがプラチナだったから分かったんだけどね」

（ガルムが・・・最高戦力？それに比べて俺は・・・）

琢磨は体乗り出し、

「な、なあ・・・」

ごんっ

拳がアシエルの頭の上に落とされた。

「つつ痛ううう。誰よ！いったい！」

そこにいたのは呆れ半分に怒り半分のガルムだった。

「お前なあ。確かにギルドカードを見せたのは俺のミスだったかもしれない。だからと言って個人情報漏らす奴があるか！」

アシエルは突然現れたガルムに口をぱくつかせていた。

「~~~~。いつこちらに？」

「今だ！」

「う、ごめんなさいですう」

アシエルは何度も頭を下げる。

「ふう。分かったならもういい。さて、タクマ。今からこの世界の常識について教えようか？それとももう休んで明日にするか？どうせ2、3日かかるんだろ？」

琢磨は体を戻し、

「3日だって。……………ごめん、明日にしてくれないか？少し

考えたいことがあるんだ」

「分かった。考えるなら俺たちは邪魔だな。考え込むのもいいが、お前の体はお前が思ってる以上に疲労してるんだ。しっかりと休めよ。おやすみ」

「わかったよ。ありがと・・・おやすみ」

そういうとガルムとアシエルは部屋を出て行き、部屋には琢磨一人となった。

（俺は最強じゃなかったのか？精神だけでなく実力さえも最強にはほど遠い。俺とガルムの何が違うんだ！俺はこの世界じゃどれくらいの強さなんだろう。俺はこれからこの世界で生き抜くことができるのか？俺は・・・俺は・・・。そうだ。この方法で！なら今日はもう休もう。とても疲れた・・・から）

#4 新たな出会いと決意（後書き）

琢磨苦悩す ですね

井の中の蛙大海を知らず。蛙が大海を知ったら、普通ならばショック死や憤死してもおかしくないと思いますが、こういう点では琢磨は強いですね。

流離人では無理だという自信があります。
皆様はどうでしょうか。

#5 決心。そしてお勉強（前書き）

というわけで世界観についての話となります。

ここでは基本的なことだけを掲載し、

- ・ 詳しいことは本編にて明らかにする
 - ・ 裏設定を番外編として掲載する
 - ・ 物語進行の際に、その都度軽いおさらいをしていく。
- の3通りで掲載いたします。
- では、本編をどうぞ

設定はかなり長いため、理解し辛いと思った方は本編半分を呼んだ後、本編最後の整理したものをご覧ください。

#5 決心。そして勉強

ガルム・琢磨・アシエルは琢磨の病室で朝食を取ると、

「ふう、食った食った。さて、勉強を始めるとするか」

「ガルム、勉強の前に少しいいか？」

琢磨の真剣な様子を感じ取ったのか、ガルムも顔を引き締め、

「何だ？」

「頼みがある。俺をガルムの弟子にしてくれ！」

「・・・理由を言え」

「俺は弱い。前の戦いでそう確信した。俺は強くなりたいんだ」

ガルムはその言葉に目を細め声を低くして尋ねた。

「何のためだ」

「俺はこの世界を生き抜きたいんだ！何のために俺はこの世界に飛ばされて、これから何をすればいいのか、それを知りたいんだ！だから、だから俺を弟子にしてくれ！」

「この世界？あなた何を言っているの？」

事情を知らないアシエルは琢磨が何を言っているのかわからなかつ

た。

仕方なく琢磨はすべてを説明した。

「へえ。そうだったんだ。ってそうじゃない。ガルム様！私も、私も弟子にして下さい。理由は言えませんが私は強くないといけないんです！」

ガルムはアシエルの方を向き、

「その必死さ、復讐か」

アシエルは一瞬言葉に詰まったが

「確かに私は復讐もしたいです。でもそれ以上に小さい頃にガルム様の剣技を見たことがあるんです。私はユウ姉さんの妹ですからいろんな方の剣技を見てきました。しかしガルム様ほど綺麗で、でも見た目だけじゃ無い剣技は見たことがありません。私はどうしても剣を極めたいんです！」

「本気のような、だが却下だ」

「何故！？」「何ですか！？」

ガルムは軽く息を吐き、腕を組み二人の顔を交互に見て言った。

「この際だ、何で俺が弟子をとらないのか教えてやろう。俺はな、今まで数十人の弟子をとってきた。」

アシエルは口に手を当て驚きの声を上げた。

「えっ！」

（そんな話、聞いたことない！）

「どうした？」

「い、いえ。なんでもありません。すみません」

「そうか、だったら続けるぞ。俺は剣士を目指す奴も、槍士を目指す奴も、斧や拳や魔法を極めたい奴も弟子として取った。俺は教え下手だ。だから俺は実践をもって育てるんだが、お前らも知ってる俺はS級冒険者だ。どうしても危険な依頼も出てくる」

「足手纏いなんかにはなりません！」

ガラムは小さく首を横に振った。

「足手纏いを悪いとは思わない。弟子を守るのは師匠の義務だ。だが、そんな環境は人を殺す。肉体的にも、精神的にも」

もう1度二人の顔を見て、

「結果、いままで俺のもとを旅立った弟子は10人もいない」

「それでも！」「それでもお願いします！」

「・・・そうか。そこまでか。良いだろう、俺がお前らを育ててやるよ。どこに出しても恥ずかしくないぐらい、な。弱音を吐こうが腕や足がとれようが鍛え上げてやるぞ。いいな！」

二人は声を合わせて真顔で言った。

「はい！」

「時間を食ったな。勉強は昼飯を食ってからにするか」

外を見ると太陽が真上に来ていた。

意外にも時間は経っていたようだった。

「じゃあ一緒に昼飯をもつてこようか、なあユウ？」

その言葉にアシエルは勢い良く振りむいた。

ユウは部屋に入ってきて肩をすくめた。

「やっぱりばれていましたか。何時から？」

「最初からだよ」

アシエルは辛そうな様子で、

「お、お姉ちゃん。あ、あのね・・・」

「別にかまわないわよ、行って。出来れば姉として復讐はやめて欲しいけど、それはその時のあなたの判断に任せるわ。ただし！」

アシエルは笑顔になったが、あわててすぐに真剣な様子に戻った。

「絶対に無事で帰ってきてね。父さんも母さんも死んで、あなたまでいなくなるなんて私耐えられないから・・・分かった？返事は？」

アシエルはユウに抱きつき泣きながら

「うん。うん。必ず帰ってくるから。必ず・・・」

暫らく経って二人はおいしそうな香りがするのに気づいた。

「邪魔しちゃ悪いと思ってな。厨房に行って取ってきたぜ。ユウも俺らと食うよな？」

ユウは涙を手で拭いて、

「はい、お邪魔します。ガルムさん」

ガルムは机を並べ、4人分の昼食を置きながら

「ん〜？」

「妹を、アシエルをよろしく願いしますね」

ガルムは振りかえり、

「ああ、任せろ」

その後、4人で楽しく昼食をとってユウはギルドの仕事へと戻った。

「よし、勉強始めるぞ」

ガルムは何枚かの紙とペンを用意していた。

「まずはこの大陸と国について簡単に説明するぞ。この大陸はガル

ディア大陸。そしてこのガルディア大陸をでかい長方形だとしてよう」
そう言つてガルムは横長い長方形を書いた。

「次は国だ。まず最初にガルディア大陸には2つの王国と1つの帝国、1つの連合、そして自由自治都市がある。大陸の歴史は戦いの歴史だ。そして今ある5つの領土に分かれたわけだが、各トップは長い時間話し合い、それぞれの国家間に誰の領土でもない部分を作りだした」

そついうと大陸を9等分する線を引いた。

「大陸の北西にはシャルベ王国、北東にはクラリー王国、南東にはギリウス帝国、南西にはハルナ商連、そして中央には自由自治都市を置いた。各国には互いに接する部分はなく、逆に自由自治都市は各頂点の部分に各国が接する。自由自治都市はその4か所と各辺の中央部分4か所、計8か所に関所を造つて人を出入りさせている。そして残る空白の部分はブレイドゾーンと呼ばれ、誰でも行き来することができる」

琢磨はガルムに尋ねる。

「つまり公領つてことか？そこに第3者が新たに街を作ることはできるのか？」

「今までそんな輩が出たことはないから確証は持てんが、おそらく他の4国1都市はそれを許さないだろう。それではブレイドラインを作った意味がなくなるからな。」

一拍置き、

「ここまでで何か質問はあるか？」

琢磨は少し考え、

「大丈夫だ」

「よし、次は各国の特徴を説明するでしょう。まずはシャルベ王国。ここは賢王と謳われるオディアーノ王が治めている。彼は剣術が得意で建国の祖である三英雄の一人、勇者ベルズンクの血を受け継いでいており剣王とも呼ばれている。シャルベ王国は学問が盛んで巨大な教導院を3つ持っている。・・・何か質問は？」

「教導院つてのは？」

「教導院は基本的には魔法を教えている。もちろん魔法だけじゃなくて武術も教えているがな」

「そうか。わかった」

「次はクラリー王国だ。この国を説明するために、まずはこの大陸の宗教について説明しよう。名はナバルディ教。簡単に言えば平和を謳う宗教だな、別に特殊な行動は必要ないから作法を覚える必要もないから安心しろ」

（そうなのか、良かったあ。作法なんて覚えられねえよ）

「ナバルディとは三英雄の一人大賢者ナバルディのことで、クラリー王国の建国の祖でもある。クラリー王国のトップはレオニール教皇だ。彼は温和な性格から陽王とも言われている。クラリー王国は

ほとんどが平地であり、国の歴史は1000年を超える。これは現在の国の中では最も長い」

「そして、ギリウス帝国は武術に秀でた国で、ルンドベルク皇帝が治めている。建国の祖はヒルデグリムで、ルンデベルクは彼とは親族ではあるものの直接血はつながってはいない。しかし、武術に優れているため彼の生まれ変わりであるとすら言われ、別名を健王という。この国は山が多い。また、武術に秀でたものが多く集まるようだ」

「最後に、ハルナ商連は複数の大商団が集まって議会を形成して運営している。現在の議長はアルトという若者だが頭は切れるらしい。彼は軍師とも呼ばれている。ハルナ商連は少しの大陸と数多くの島々が領土で、各島に各商隊があるらしい」

また一拍置いて

「どうだ、分かったか？」

琢磨はいっぱいだった。

「うゝゝゝ。何とか」

ガルムはそんな琢磨をみて微笑み、

「今日はこれぐらいにしよう。あとで自分で整理してみるといい」

「ああ、分かった」

~~~~~  
~~~~~

本編はこれで終わります。
少し整理してみましょう。

国名：位置：トップ：トップの別名：建国の祖

シャルベ王国：北西：オディアーノ王：賢王（剣王）：ベルズング

クラリー王国：北東：レオニール教皇：陽王：ナバルディ

ギリウス帝国：南東：ルンドベルク皇帝：健王：ヒルデグリム

ハルナ商連：南西：アルト議長：軍師：不明

#5 決心。そしてお勉強（後書き）

ブレイドゾーンはイギリス（だった筈）の議会に実際にあるソードラインをモデルにしています。

さて、次回も世界観について掲載します。

6（前書き）

前回同様ラストに整理したものを付けました。

飛ばしても問題ありませんが、可愛い琢磨君が見たい方はどうぞ本編へ。

6

「さて、今日も勉強会するぞ。昨日何教えたっけ？」

アシエルはすぐさま答えた

「4国についてですよ、お師匠様」

「師匠ってお前なあ」

ガルムは呆れ気味に言った。

そんなガルムにアシエルはぶすつとした顔で口を尖らせて言い返した。

「良いじゃないですか、実際に私たちの師匠なんですから。ほら！タクマからもお師匠様に言っちゃってよ！」

タクマは急に話を振られてつい本音を滑らしてしまった。

「師匠・・・良いと思う」

呟くような言い方だったがその言葉は部屋に響き渡った。

すぐに失言だったと気づきタクマは俯いた、耳まで真っ赤にして。

「タクマまでかよ。まあ良さ。好きなように呼ぶといい」

ガルムは諦めた。だがその半面、タクマの精神成長を感じて嬉しく思っていた。

それ故ガルムは満面の笑みである。親バカならぬ師匠馬鹿なガルムだった。

「さて、じゃあ今日は自由自治都市からだな。ここは当初は都市など存在せずに昨日説明したブレイドゾーンの一部であるはずだったんだ。しかし当時からギルドは大陸全土に影響力があつた。それ故、4国はギルド本部を大陸北にある島に移す計画を立てた」

「師匠、ギルド本部は昔はどこにあつたんだ？」

ガルムはそれを聞き、微笑んだ。

「どうやら無意識にガルムのことを師匠と呼んだらしい。」

「本部はシャルベ王国の北西、今の領土なら中央辺りに存在してた。しかしだ。この計画に反対する者がいた。それがギルド総裁イシュリドだ。こいつは4国を相手取り、いろいろな種族と手を結び、大陸中央部を領土とする自由自治都市の建国を認めさせた」

「お師匠様。イシュリド様は具体的にどうやりましたか？」

「知るか。どうせ交渉という聞こえは良いがやったことは相手の弱みでも握って脅してもかけたんだろうよ。奴は腹黒いからな」

「お師匠様はイシュリド様のことを嫌いなんですね。どのような方だったのですか？」

「なに言つてやがる。タクマはともかくお前は奴を知っているだろうが。奴は齢800歳の竜人族で初代総裁にして現総裁だぞ？」

「ええ！？そうだったんですか？」

「そうだったんですか、ってお前。それでも本当にランクC冒険者なのかよ」

ガラムは完全に呆れている。

「だって私はこの町を中心に活動してるんですよ？本部のことなんて全然知りませんよ」

琢磨はギルドについてほとんど知らないために会話に入れなかった。

「ガラム、聞きたいことが・・・」

「師匠って呼べ、弟子よ。さっきも俺のことそう呼んでくれただろ？」

ガラムはついつい琢磨をからかってしまった。
それに対して琢磨は・・・

「師匠、ギルドのランクについて教えてくれ」

余りに素直に呼んだのでガラムは面食らってしまった。
(まさか呼んでくれるとは・・・)

「な、なんだよ。ちゃんと言っただろ」

琢磨は再び耳まで真っ赤にしていた。
ガラムはそれを見て微笑みながら

「すまんすまん。ランクについてだな。まず・・・」

その時ガラムはアシエルまでこつちの話を待っているのに気づいた。
(いや、お前は知ってるだろ……。よし、ここはひとつ)

「まず・・・アシエルから説明してもらおう」

「ええっ！私ですか？」

ガラムは名案とばかりに腕を組み何度もうなずきながら言った。

「そうだ、先輩冒険者として教えてやれ。師匠命令だ」

「うう、わかりました。では失礼して、ランクには下から言うところからSSSまであります。ただ、Hは薬草や木の実・果実などの採取でGは鉱石採取。Fは討伐依頼の練習つてところで危険度の低い魔物の討伐となります。EからAまではあらゆる依頼であり、違いは危険度だけです。例えば未開地や魔物の巣の中にある　を取ってくる、などです。SSSも危険度だけの違いですがAとは難しさの格が違うそうです。魔物のランクはギルドランクが同等の者が時間がかかったとしても一人で討伐できる強さを表します。ランクの昇格はポイント制で、一定以上ためると昇格されます。依頼は自分のランク+1以下の依頼が受けられます。例外はチーム登録をすることでチーム員1人が何か依頼を受けた時、普通なら依頼を受けられない人であっても特別に受けることができ、当然のことながらポイントも加算されます。・・・以上です」

「・・・90点だな。誇つていいぞ」

アシエルの顔に花が咲いた。

「あ、ありがとうございます！残りの10点は何ですか？」

「2階級特進、例えばF級の奴がチーム討伐でA級依頼を達成したとしてもDランクにはならずEランク昇格となる。またAランクがS級依頼を受ける際には、Sランク者が〈援護要請〉を出した場合に限る・・・これが残りの10点分だ。蛇足としてSランクに昇格するにはSランク以上からの推薦が10点以上貯まり、実力検査の結果が良かった場合のみ昇格する。点数というのはSランク者1人につき1点・SSランク者は5点・SSSランク者は10点加算される仕組みだ」

「へえそれは知らなかったです」

（なるほど・・・待てよ？自分のランク＝魔物の強さならアシエルの強さはCランク。なんだ、結局こいつもBランクには勝てないのか）

琢磨はアシエルよりも弱いと思っていたがそれはどうやら勘違いだったと知って安堵した。

そして、

「師匠、新しくギルドに入るとしたらHランクからになるのか？」

「ん？言ってなかったっけ？最初はだれであれFクラスから始まる。ただしBランク以上の者の推薦があるならば上位ランクからのスタートも可能だ。他に何かあるか？」

「いや、質問はもうない」

「では次に移るぞ。次は先程も話に出たがこの大陸にいる種族につ

いてだ。人口が多い順に言うと、人間族・亜人族・ドワーフ族・エルフ族・竜人族だ。琢磨のいた世界にはどんな種族がいたんだ？」

「人間族しかいなかったよ。でも大体分かる。ドワーフは鍛冶が得意でエルフは弓とか装飾とかの繊細なことが得意なんだろ？で、おたがいの種族は仲が悪い。亜人や竜人についてはよくわからないけど・・・」

「人間族しかないのにそこまで知ってるなら十分だ。説明の手間が省けるしな。ただし訂正するなら、仲が悪いのではなくそりが合わないってだけだ。好き嫌いは特にはない。亜人というのは外見はほとんど人間なんだが各所が違う。例えば手が長かったり足が速かったりなんかで、人間よりも寿命の長い長寿族なんかもいる。竜人族は外見は人間だが本質は竜である種族だ。彼らは自由に竜になることができるが、ほとんどの竜人はしない。どうやら人間の姿の方が楽しくてな。寿命の長さは人間とドワーフが1000年ほど、長寿続は2000年ほど、エルフは500年、竜人族に至っては1000年以上生きる者もいる」

琢磨は1000年と聞いて固まっていた。

「1000年も！？」

「そうだ、だからエルフ族や竜人族の知識は深く人間は及びつないが、人間族に有って彼らには無いものがある。何だかわかるか？タクマ」

（俺たちに有ってエルフや竜人にはないもの。全く想像がつかない）
琢磨は首を横に振った。

「アシエル。お前はとうだ？」

「・・・分かりません、お師匠様」

「それはな、創造力だ。人間の寿命は長くない、しかしその分密度が濃いんだ。だから発明のほとんどは人間がする。まあ、実際に作るのは人間だったり彼らだったりするがな」

はっはっは、ガルムは笑いながらそう言った。

「さて、タクマ。種族に関して何か質問は？」

琢磨は少し考え、

「大丈夫」

と短く答えた。

「よし、あとは通貨と魔法に関してだな。魔法は明日に回すとして、今日は最後に通貨を教えておこう」

そう言うところガルムは懐から袋を取り出し、その中から何枚かのコインや直方体の金属の塊を取り出し、並べ始めた。

「これで全部だ。通貨は大陸共通であり安い方から教えるぞ。左から順に、銅貨・銅板・銀貨・銀板・金貨・金板・白金貨・白金板・キーヴル記念硬貨だ」

それから通貨の説明が行われ、2日目の安静日が過ぎていった。

~~~~~

本編はこれで終わりです

通貨は書くとそれだけで理解が追いつけないと思います（流離人も含めて）ので省略しました。

それでは、今話も整理してみましよう。

自由自治都市について

- ・ トップ：イシュリド総裁（竜人族）
- ・ 場所：大陸中央部
- ・ 蛇足：

都市にはギルドだけでなく各国の大使館や商業施設が数多くあります。ただし、都市のトップはイシュリドとなっております。

種族について

- ・ 人間族・亜人族・ドワーフ族・エルフ族・竜人族が存在します。
- ・ 魔物は動物扱いで、種族ではありません。
- ・ 平均寿命：竜人 エルフ 亜人＞ドワーフ 人間
- ・ 特色：人間：寿命は短いので人生の密度が濃い。創造力に長ける。

ドワーフ：

豪快な性格で彼らの半分は戦士、半分は鍛冶師である。矜持を大切にする。

エルフ：

繊細な性格で寿命が長いので気楽に生きる。知識が深く、手先が器用なため、彼らの半分は弓矢を用いて戦い、半分は魔術に生きる。矜持を大切にする。

竜人：

寿命がとてつもなく長いので、何事に対しても寛容に取る。過程や矜持よりも結果を取り、常に先のことを考えて行動する。俗世を厭う傾向が種族を通してある。

亜人：

種類が多いため省略。出てきたその時々説明いたします

・蛇足：各種族の中は悪くないが、エルフとドワーフ、人間と竜人はそりが合わない。

（省略した）通貨について

（覚える必要はないです。ただ一応設定としてこうなっています）

・使用範囲：大陸全土

・貨幣種類：銅貨・銅板・銀貨・銀板・金貨・金板・白金貨・白金板・キーヴル記念硬貨

・価値：白金板1枚⇐白金貨10枚

白金貨1枚⇐金板10枚

金板1枚⇐金貨10枚

金貨1枚⇐銀板10枚

銀板1枚⇐銀貨100枚

銀貨1枚⇐銅板10枚

銅板1枚⇐銅貨100枚

白金1枚⇐金貨1000枚⇐銀貨10万枚⇐銅貨1億枚

蛇足？：3人家族の一食：銅貨5枚

3人家族年収：銀貨12枚

3人家族支出（年）：銀貨8枚

3人家族税金（年）：銀貨2枚

蛇足？：青銅製の武器：銀貨1枚以下

鉄製の武器：銀貨2～3枚

蛇足? : 記念硬貨 : 希少なキーヴル鉱石によって300年前に大陸  
平和記念に作られた

価値 : 白金板5枚 (ただし収集家は最低白金板10枚で買  
い取ってくれる)



## # 6（後書き）

琢磨がついにガルムにデレました。

琢磨は最初、反抗期でしたが次第にガルムに心を開いていきます。  
ガルムはそんな琢磨を愛息子の様に見ています。

## #7

「タクマ、悪いけど勉強会は昼からでいいか？」

ガルムは一緒に朝食を食べているタクマにそう言った。

タクマはEランクの魔物であるコカトリスの卵で作った目玉焼きを飲み込んでから、

「別にいいけど、何かあるのか？」

ガルムは猛烈な勢いで胃に朝食を流し込み、口に食べ物を入れたまま、

「ああ、今思い出したんだが確か今日ギルドから応援が来るんだ。だからその迎えと詳しい情報を教えとかなくちゃならないんだ」

同じく朝食を食べているアシエルは、

「お師匠様、口に物を入れたまま喋るなんて行儀が悪いですよ」

言っていることは正しいがアシエルの食べ方はとても汚く、二人は（お前の食べ方のほうが行儀悪いわ！）

と思っていたが言ったところで直すことはないとわかっていたため、口には出さなかった。

こんこん

「お食事中失礼します。ガルム様、ギルド本部からお客様がいらしてますわ」

ノックとともに部屋へ入って来たのはアシエルの姉であるユウである。

「ああ、今行く」

ガラムは壁にかけてあったコートと壁に立てかけてある2本の剣を腰に提げると、

机においてあった袋をタクマに投げた。

「その袋にはギルドが作成した魔物図鑑が入ってる。イラスト付だからわかりやすいだろう。それを見て勉強しておけ。お前の強さはおそらくDランクからCランクだ。どの敵まで相手に出来てどの敵からは勝てないかを知識として知っておけ。自分の限界を知ることが悪いことじゃない、諦める事は自分を強くする第一歩だ。それを覚えておけ」

ガラムはそういつて部屋から出て行った。

ギルド受付へ行くと真面目そうな青年と、不真面目そうではあるが隙のない壮年の男がいた。青年は装飾こそ多いが実用性の高い剣を腰に下げ、壮年の男は何も持っていない。

（青年はプライドが高く、壮年の方はかなりの実力者だな）

「ガラムⅡグランベルツ殿でいらっしゃいますか？」

壮年の男はそう聞いてきた。

「ああ。そうだ。お前たちは？」

青年は一步前へ出て、

「私はAランク冒険者、アラン＝ルーティンと申します」

アランは一步下がる。今度は壮年の男が一步前へ出て、

「同じくAランク冒険者、オルド＝ランデイスと申すものです。この付近の森にて異常が発生したとお聞きしたのですが詳しい情報を教えていただけますかな？」

「この町の北西にあるキーリエの森は魔物の平均ランクがF、最高ランクEの比較的安全な森だ。その森でランクBのロック鳥及びワイバーン、その他複数のランクBを確認した」

アランとオルドの表情が一気に真剣なものへと変わる。

「それはいつのことですか？」

「前者2匹は3日前、後者の複数匹は2日前だ。その時は森全体を回って全滅させたが一応と思ってな」

「成る程、事態は把握しました。予想以上に事態は深刻なようですね。早速その森へ連れて行って貰ってもよろしいですか？」

ガルムはうなずいて、3人はキーリエの森へと歩いた。

「……………キーリエの森……………」

「ところでガルム殿、腰の剣はなぜ紐で封印されているの

で？」

ガラムは自分の腰にある紐でぐるぐる巻きにされた剣を一瞥すると、  
「この剣は概念武装の剣でな。無意識で抜いて振るうと周りに尋常  
もない被害が出るのでな。それを防ぐためにこうやって抜けないよ  
うにしている」

ほう。二人から思わず感嘆の声が漏れる。

「何の概念が籠められているのかお聞きしても？」

ガラムは別になんともないような様子で、

「別に構わんが知ったら後悔するか消されると思うが、それでもい  
いなら教えるが？」

二人の表情は固まった。消される、誰が誰になんて聞くまでもない  
ことだった。ガラムはギルドに属している。計算高いギルド総裁が  
ギルドランクの高いガラムのことについて知らないはずがない。な  
らば当然この剣の事も知っているのだろう。そうなると、消される  
のは自分たちで、消すのはギルドの<裏>の者たちである。ギルド  
の後ろめたい部分すべて背負う<裏>。その実力はSランクにも劣  
らないらしい。

（ガラムⅡグランベルツ。ランクS以上の者でもほとんど持ってい  
ない概念武装。一体？）

（好奇心は猫を殺す、か。一度戦ってみたいものだ。久々にこの槍  
が疼くわ！）

不審そうな顔をするアランとニヒルな笑顔を浮かべるオルド。

（さすがにプロだな。引き際を心得てる。これは期待できそうだ）

「・・・この場所でBランクとであつた場所は全てだ」

アランとオルドは今日何度目かわからない衝撃を感じていた。

（何でここにはぽっかり穴が開いたように更地なんだ？何かの魔法か？しかしそれにしても回りの木々は何か余波を受けた様子もない。いったいこの男は何をしたというのか・・・）

やつのことでオルドは声を絞りだした。

「・・・ありがとうございます。ここから先は全てギルドが受け継ぎます。ご協力感謝いたします」

ガルムはそんな二人を見てもただ事務的に、

「頼む」

そういつてガルムはタクマとアシエルの待つギルド支部へと帰っていった。

「……………キリーエの町。ギルド支部……………」

「よう。帰ったぞ」

「お帰りなさい、お師匠様」「お帰り、師匠」

ガラムは二人の言葉を聞き、疲れていなかったが疲れが癒された気分だった。

（やっぱり弟子ってかわいいなあ）

「さて。昼飯も食ったことだし、最後の勉強会やるぞ。今日は魔法についてだ！」

ガラムは元気よく言った。

「ま、そういつても教えることなんか殆ど無いがな。魔法の種類と魔法士のランクについて教えるのみだ。まず魔法は＜通常魔法＞＜召喚魔法＞＜空間魔法＞＜古代魔法＞の4種類に分かれる。通常魔法はさらに3種類に分かれる。まずは＜属性魔法＞だ。これは雷・水・炎・樹・地の5属性のことで、雷は水に強く、水は火に強く、炎は樹に強く、樹に地に強く、地は雷に強い。2つ目は＜光魔法＞。3つ目が＜闇魔法＞だ。闇魔法は属性魔法に強く、光魔法は闇魔法に強い」

ガラムはここで一旦タクマを待つ。

「タクマ。理解したか？」

「大丈夫だ」

「次は召喚魔法についてだ。前提として魔法というのは精霊から力を借りるんだが、召喚魔法はその精霊を具現化させることが出来る。空間魔法は空間を捻じ曲げて瞬間移動したり相手の体自体を捻じ曲げることで破裂させることも出来る」

アシエルはそのストレートな言い方に眉をひそめた。

「ずいぶん強い魔法だな。対処方法はあるのか？」

「あることにはある。魔法による空間干渉を察知してすぐに避けることだ。しかしこれは慣れないとまず無理だから会わない事を祈つとけ。最後に古代魔法だが、今では使い手のいなくなった魔法全般を指す。たとえば相手を一瞬で殺したり支配したりする魔法だ。蛇足として<禁忌魔法>というのもある。これは威力が高すぎるために使用が禁止された魔法のことで、属性魔法の格属性にも2〜3種類の禁忌魔法が存在し、古代魔法の8割ほども禁忌魔法だ」

「最後に、魔法士自体にもランクがある。下から順に魔術士見習い、魔術士、魔法士、魔導師、魔極師の5段階だ。魔導師は賢者、魔極師は大賢者とも呼ばれる。上位2つのランクはギルドや各国から下賜される。別に特権は無いから名誉職ってことになるな」

「ユウお姉ちゃんは光魔法の魔導師なんだよ。すごいでしょう」

アシエルは自分のことのように自慢した。

「殆どのものは魔法士であり、魔導師は殆どいないんだ」

タクマは感心したように、

「へえ、それじゃあユウさんはすごいんだ。師匠はどうなんだ？」

ガルムは一瞬迷った顔をし、



「あゝ。まーお前らには言っていゐるか。あんまり他の奴には言つなよ」

アシエルは輝いた顔になつてはしゃぎだした

「お師匠様も、まさか魔導師だったりするんですか？」

「・・・俺は通常魔法・空間魔法の魔極師だ」

二人は目を丸くして

「え？魔極師って・・・魔法使いの一番上の位ですよ？」

「まあな。俺の弟子だから言つたんだ。言いふらさんでくれよ」

ガラムは頭をがりがり掻きながら、弟子たちに釘を刺しておいた。

「すごいじゃないですか！何で黙ってるんですか！？」

「あのなあ。別に俺は望んでその地位を手に入れた訳でもないし、目立ちたくもない」

「師匠つてすごいんだな・・・」

ガラムは困つた風にしながらも微笑んでいた。

（この弟子たちが言いふらさないか心配だが、こいつらの尊敬の眼差しを受けれたから善しとするか）

アシエルの騒がしい声が部屋に響いてガラムはそれに冷静に返し、

琢磨は淡々と話をする。最後の安静日の夜はそうやって更けていった。

~~~~~

本編はこれで終了です。また世界観の話も今話で終了となります。それではまた整理してみましよう

魔法：全ての魔法は精霊から魔力を借り受けて発生させる。

魔法の種類：＜通常魔法＞＜召喚魔法＞＜空間魔法＞＜古代魔法＞

通常魔法：＜属性魔法＞＜光魔法＞＜闇魔法＞

・属性魔法の種類：雷・水・炎・樹・地

・属性魔法の相性：雷＞水＞炎＞樹＞地＞雷

・光魔法：主に治癒魔法が多い

・闇魔法：主に攻撃魔法が多い

・通常魔法の相性：光魔法＞闇魔法＞属性魔法

召還魔法：精霊を具現化できる

・召還対象：小精霊・中精霊・大精霊・精霊王（右に行くほど召還は難しくなる）

空間魔法：空間に魔法を掛けることで空間を意のままに操る

・魔法例：瞬間移動・空間分断による物体破壊

古代魔法：古代人が使用していた魔法。使えるものは殆どいない。

- ・魔法例：呪殺魔法^{デス}・強制支配等^{チャーム}

魔法士：魔法を行使する者の名称。

- ・魔法士の数：

魔法のみを行使する者は殆どが魔法士、

武術＋魔法を行使するものは魔術士が多く、総じて魔術士の方が多い。

しかし魔法を専門に扱う魔法士の方を一般的には総称と呼んでいる。

- ・称号：

ギルドや各国に下賜される称号は魔導師と魔極師のみで、

それ以下の称号は個人で名乗る為嘘をつく者も少なくない。

#7（後書き）

次回から本筋へと戻ります

次回予告：

ガラムと弟子たちのお買い物inキーリエの町

琢磨の服もぼろぼろになってますから異世界の服へモデルチェンジです。

ついでに武器も購入予定、もちろんアシェルも一緒にお買い物します。

#8 お買い物inキーリエの町

「はい。もう動き回っても大丈夫ですよ」

そう光魔導士ユウは琢磨に言った。

「やった。やっと修行が受けられる!」

琢磨はガッツポーズをしながらそう叫んだ。

その様子に微笑をもらしたユウはガルムのほうへ向き直り、

「ガルムさん、治ったといっても暫くはしごき上げないようにしてください。また悪化するかもしれませんから」

ガルムもそんな琢磨を横目で見て微笑みを零しながら、

「了解した。気をつけるとしよう。ほら、タクマ喜んでばかりいないでユウにきちんとお礼を言っておきなさい」

「あ、はい。ありがとうございます。ユウさん」

「いえいえ、完治して私も嬉しいですし、これも仕事ですから」

ユウはそう言うと、一礼して部屋から出て行った。

「さて、タクマの怪我也治ったことだし今日は買い物に行くぞ」

琢磨とアシエルはキヨトンとした顔で、

「買い物？」「何を買うんですか？お師匠様」

「ん？お前らの装備に決まってるだろ。まさかそんな軽装備で旅するとも思ってたのか？」

その通りだと思ってたアシエルはあわてて、

「そ、そんなはず無いじゃないですか？」

二人は呆れ顔で、

（やっぱりか）（凶星かよ・・・旅？）

「師匠！旅って何だ？」

（そんな話聞いてないぞ？）

ガルムは首をかしげ、

「あれ？言ってなかったっけ？これから俺とお前とアシエルで大陸中を回るんだよ。いわば社会勉強だな。そのついでにお前らを強くする。少なくともAランクぐらいには強くしてやるよ。そのためにはお前らに合った武器と長旅をしても大丈夫なくらい丈夫な防具がいる。今日はその買い物だ。わかったらさっさと準備しろ」

「師匠、準備って何をしたら良いんだ？」

今度はタクマが首を傾げて尋ねる。

「着替えろ」

そう一言言つとガラムは部屋の外へ出て行つた。

―――武器屋―――

「まずは、タクマの武器だな。お前は剣でいいのか？ほかに得意な武器はあるか？」

「ない。剣だけしか使えない」

琢磨はフルフルと首を振る。

「わかった。てな訳で剣を見せてくれ。ああ、ショートソードとロングソードだけでいい」

「大量にあるから右の扉の先にある鍛錬場で待つててくれ。すぐに持つて行つてやるよ」

店主は3人の左後ろにある扉を指差し、そして店の奥へと消えていった。

鍛錬場は広がった。おそらく100人が剣を振り回してもまだ余裕があるのではなからうか。

どうやら先客がいたらしく、4〜5グループがそれぞれの得物を振り回し感触を確かめていた。

ガラムたちは彼らから十分距離をとった一角に陣取つて店主を待つことにした。

暫くすると入つてきた扉とは逆の扉から50本以上はある剣を持つ

て店主が向かってきた。

店主はそれら全てを地面に置くと、

「これで全部だ。全部で70本ほどだな」

ガルムはそれらの内の2、3本を手にとり眺める。

「相変わらず仕事がいいな。タクマ、この中から自分に合う剣を2本選び出せ。自分が納得いくまで振り続けて探すんだ。その2本がこれからお前の命を支える大事なものだ。絶対に手を抜くなよ！」

「はい！師匠！」

続けてガルムは持っていた剣を置くとアシエルの方を向く。

「次はお前のダガーとナイフだな。よし親父、案内してくれ」

「ああ、こっちだ。二人ともついて来い」

—————SIDEアシエル—————

廊下は薄暗くひんやりとしていた。

廊下を進み、今度は階段を下っていった。

ようやく着いた所にはいくつもの扉があった。

店主はそのうちの1つの扉の鍵を開け、重苦しい音を響き渡らせながら扉を開いた。

「ここにあるので全部だ。存分に選んでくれ、俺は先に上がってるぞ」

店主はそういつて出て行つた。ガルムは軽く手を上げ、

「ああ、ありがとな」

アシエルは実用さを追求した芸術的なダガーやナイフに顔をほころばせていた。

そんなアシエルに、ガルムは真剣な様子で、

「アシエル、ダガーやナイフにある欠点を言ってみろ」

アシエルは慌ててガルムへ向き直り、顔を引き締める。そして

「はい。射程が短いことです。またそのため力負けをしやすくなります!」

「その通りださらにお前は女というハンデも常に持っている。これはどうやっても覆せないことだ。わかるか?」

アシエルは、それを実感しているのだろう。俯いて歯を食いしばり、

「はい・・・」

そう呟いた。

そんなアシエルにガルムは、

「顔を上げないか!この馬鹿が!」

急な怒声にアシエルはパツと顔を上げる。

「女である事を恥じて一体お前になんの得がある！恥じて悲しみ悔しがる暇があるなら何故そのハンを埋めようとしな！アシエル！力というハンを埋めるにはどうすればいいんだ、お前は何をすればいいんだ。さあ答えてみる！」

「は、はい！力を加えやすく技を掛けやすい武器を使います。更には私に出来る最高の動きを身につけることでハンを埋められます！」

ガラムは小さく頷き、

「その通りだ。どんな時でもその時に出来る最高の動きをとれ。それこそが冒険者としての基礎であり、境地でもある。片時もそれを忘れるな」

「はい！」

「そしてこれからここにある大量の武器の中で、お前の最高の武器を選び出す。心して掛かれ！」

「はい！お師匠様！」

アシエルはこのとき、未熟な自分を嘆き、偉大な師匠を誇っていた。アシエルは流れそうになっていた涙をふき取って、一本一本感触を確かめていった。

————SIDE琢磨————

琢磨はようやく10本まで絞込んでいた。そこへ3人組の男たちがやってきて、

「おいおい、お前みたいな子供がここに来るなんてまだ早いぜ。家に帰って木の枝でも振ってな」

（昔の俺ならすぐ突っかかってただろうな。でも今は師匠の教え通り剣を選ぼう）

琢磨は彼らの言葉を無視して剣を振り続けた。

それが癪に障ったのだろう。彼らは琢磨の周りの剣をあちこちへ投げ始めた。

これには流石に琢磨も怒り、制止しようと口を開きかけたそのとき、

「やめ「貴様らわしの剣に何してやがる！」

店主の怒声が鍛錬場に轟いた。

そのあまりの大きさに、男たちは竦み上がった。しかし人数差があったため、

「うるせえ！これは俺たちの問題だ！年寄りには引っ込んでろ！」

「じゃかましいわ！」

店主は一番近くにいた男の頬を殴り飛ばし、壁に叩きつけた。男は2、3回痙攣した後、ピクリとも動かなくなった。それを見て仲間の男は、

「か、囲め！」「お、おう！」

2人は投げようとしていた剣を鞘から抜いて構えた。
店主は真剣な様子でそれを見ながら、

「坊主、こいつらの持つとる剣はお前の目に適った剣か？」

「あ、ああ。そうだけど」

「そうか、じゃあ折るわけにはいかねえな」

二人の男は琢磨の存在を思い出し、

「そ、そうだ。元はといえばお前が悪いんだ。おい！その剣折っちまえ！」「ああ！」

2人は地面に叩きつけるため剣を振りかぶると、その剣を振り・・・
降ろせなかった。

店主は一瞬で2人の腹に拳と足をめり込ませ、剣を取り戻したのだ。
そのうち1本を琢磨に渡すと、流れるような動作でそれを構えて尋
常ではない殺気を放つ。

「貴様らを殺してやりたいのはやまやまだが、鍛錬場を血で染める
わけにはいかねえ。しかし！このまま貴様らを見ているとつい殺し
ちまう。今すぐそこで伸びてる男を連れて出て行け！」

2人の男は腹を抑えながら伸びた男を引き摺って店から出て行った。
入れ違いにガラムとアシエルが入ってきた。ガラムは哀れみの目で
出て行った3人の男たちを見送ると、

「可哀相に、ランクSの制裁を受けたのか・・・」

この言葉にぎょつとしたのは琢磨とアシエル、それに一部始終を見ていた他の客たちだ。

店主は恥ずかしげに笑っていた。

「元、さ。今じゃただの鍛冶士だ」

「ただの鍛冶士はあんな殺気は放たねえよ」

ガラムはクツクツクと笑いながらそういった。

「わかつているなら入って来いよ」

「状況もわからずに殺気のある状況に飛び込めるかよ。俺は丸腰だし弟子も連れてんだよ」

「お前さんは武器なんてなくてもわしにだって勝てるだろうに」

「はっはっは。さてタクマ、剣は選んだか？」

琢磨は2本を持ち上げガラムに見せた。

「ああ。この二本に決めた」

「親父。じゃあその二本とこのダガー3本とナイフ7本買うつするよ。幾らだ？」

店主はそれらの武器を一通り見ると、

「金板1枚だ」

「え！？」「き、金板1枚！？」

琢磨とアシエルの二人はぎょつとした顔になった。
しかしガラムは平然と、

「ま、そんなもんか。ほら受け取れ」

袋から取り出した金板を店主に投げ渡した。
店主はにこやかな顔で受け取り、

「毎度あり〜」

「おい、お前ら何ぼうつとしてるんだ。さっさと行くぞ。防具も買わなきゃならねえんだから」

「あ、ああ」「はい・・・」

3人は武器を買いそろえ、武器屋を後にした。

#8 お買い物 in キーリエの町（後書き）

名前のない店主、の割にはかなりのつわものですね。そもそも、つわものの方が引退後は静かに暮らす気がします。気がするだけで実際どうなのかは知りませんが。

ダガーとナイフについて

ダガー 大きいナイフ全般のことで力を入れやすい
ナイフ 小さいナイフ全般のことで技をかけやすい

次回：

防具購入

これしか言いようがないです。

9

「よし、次は防具を揃えるぞ」

ガルムは人気防具店を通り越し、ある店の前で止まった。店頭には何も置かれず看板もない。

知らない人が見ればただの民家にしか見えない。

「お師匠様。ここで買うんですか？」

「ああ、ここは俺の知り合いの店でな。腕もよくて信用も出来る。個人経営で客を選ぶ奴は店頭には何も置かずになだ客が来るのを待つんだ。この店はそんな店のひとつだ」

「成る程。勉強になります」

ガルムはアシエルと琢磨を引きつれ店の中へと入る。

「おーい。又ミエール。来てやったぞ」

すると部屋の明かりがパツとついて店の奥から1人の女性が出てきた。

女性はは20代にも40代にも見え、不思議な雰囲気醸し出していた。

「誰かと思えばガルムさんじゃないですか。そちらのお子さん達はどちら様で？あ、もしかしてガルムさんのお子さんですか？」

ガルムはそんな又ミエールの言葉に苦笑し、

「俺は生涯一人身だよ。こいつらは俺の新しい弟子達だ」

「あらあら。そうだったんですか。はじめまして、私は竜人族の又ミエルよ。年齢はヒ・ミ・ツ」

「俺の名前は琢磨です」「私の名前はアシエルです」

「初々しくて可愛いわね。で、今日は何の御用？」

「琢磨の防具を、金の心配抜きで最高の物を見繕って欲しい」

その言葉に又ミエルは目を見開き、そして目を細めた。

「ガルムさん、まさか・・・」

ガルムはまじめな顔で、

「ああ。これから一度ギルド本部へ帰還し、それから俺達3人で大陸を回る」

又ミエルは何かを言おうと口を開き、首を横に振ってため息をついた。

「いろいろ言おうと思ったけどやめたわ。私に出来るのはこの子の防具を見繕うことだけね」

ガルムは苦笑して申し訳なさそうに、

「すまん」

「気にしないで。ガルムさんらしいもの。でもそれならアシエルちゃんはどうするの？こんな装備じゃ旅の途中で死んじゃうわよ？」

アシエルはその言葉に目を見開いた。

「わかってる。だがこの服はこいつの姉が作ったものらしくてな。服から防御力を上げるのは断念した。その代わり、これからノランダルのところへ行って護石を作ってくことにした」

「成る程、ノランダルとあなたが作った護石なら安心ね。じゃああなたたちが帰ってくることは見繕っておくわ」

ガルムは頷くと、

「頼む。タクマ、ヌミエルはさっきも言ったとおり腕もよくて信用も置ける。何か聞かれたら本当のことを教え、正確に答えろ。いいな！」

「わかった」

ガルムは地元民であるアシエルでさえ知らない路地の中にある道具屋に入った。

入ってみるとそこには様々な物が陳列しており、魔物の目玉や希少な植物などもあった。

中は1m先も見渡せないほど真っ暗だったがガルムはその中をどんどん奥へ奥へと進んでいく。

（こ、怖い。何で明かりがないのさ。早く用事済ませて帰りたいよ
う）

アシエルはガルムの服の裾を掴みながら震えていた。

「これはこれはガルム様ではありませんか。この卑しい私めに何の
御用で？」

低くしわがれたその声は右の暗闇から聞こえてきた。
しかしガルムは平然とした様子で、

「そこにいたのか、ノランドル。仕事だ。姿を現せ」

そういうと黒いローブを羽織った男が何故か左の暗闇の中から現れ
た。

ガルムは後ろを振り返り、その男と向き合う。

「どういった内容でございますかな？」

「護石を作ってくれ、最高級のな」

「後ろのお嬢さんのためですね。娘さんですか？」

ガルムは苦笑して、

「お前もそういうのか。こいつは俺の弟子で、アシエルって名だ」

「そうでございましたか。これは失礼を、アシエル嬢。してガルム
様、護石の触媒は一体なんでございましょう？」

ガラムは笑みを消し、アシエルのほうを見ると、

「アシエル、お前の掛けている首飾りを貸してくれ。それを護石の触媒とする」

「え？は、はい」

アシエルは胸元に入れていた白い玉の首飾りを外すとノランドルに渡した。

「ノランドル、それが何かわかるな？」

ノランドルの手はこれでもかというほどに震えていた。そして震えた声で、

「ええ、分かります。分かりますとも。分からないはずがありません。なぜこれがここに？これは、これは光龍の宝玉ですね。光龍の瞳から特殊な技術を持って魔力だけを抽出した物。まさか実在していたとは・・・」

ノランドルは震えを押さえ込み、目が隠れるほどに前に垂れていた髪を後ろで1つに括って背筋を伸ばした。身長は意外と高く、2mはあるだろう。声は依然としてしわがれた低い声だが威厳が籠っていた。

「ガラム様。これほどの物を使った護石作りに、私を使って頂いたことを心から感謝いたします。さて、これに何を加えればよろしいのでしょうか？」

ガラムはどこからか小さな箱を二つ取り出してノランドルに投げ渡した。

「それらの中には閻龍と属龍の宝玉がそれぞれ入ってる。この3つを合成し、2つ分ける」

ノランドルは驚かずに坦々と、

「了解いたしました。作業場へ案内いたします。どうぞこちらへ」

ガラムとノランドルの後を追おうとしたアシエルは、

「お前はここで待ってる。作業場にいたら危険だ」

およそ30分後、珍しく疲れた様子のガラムと今にも倒れそうなノランドルが出てきた。

ガラムは2つになった首飾りの内の1つをアシエルに返した。大きさは変わっていないそれは、付けてみると淡い光と心地よい温かみを放っているのが分かった。

ガラムは倒れているノランドルのそばへ行き、

「代金はここに置いとくぞ。しっかり休めよ」

そう言うとガラムはアシエルをつれて店の外へ出た。

防具屋へ戻ると、

「あら、お帰りなさい。お弟子さんの服は見繕ってあげたわよ」

そう言われたので2人は琢磨の姿を探すと、青を基調とした服に青紫色のマントを羽織っていた。

「どうだ？師匠、アシエル」

「ああ、似合ってるよ」「タクマ、すごく格好いいよ！」

タクマは照れながら、

「ありがとう」

といった。

又ミエルは思い出したように、

「あ、そうそう。一応アシエルちゃんのマントも作っておいたわよ」

そういつて取り出したのは、真紅のマントである。

これはアシエルの服が赤を基調としているからだろう。

「わあ、すごい。ありがとう又ミエルさん」

「うふふ、気にしないでいいわよ」

「すまんな、気を使ってもらって。これは代金だ」

そう言って喜んでいる2人に見えないようにガルムは又ミエルに、

そつと白金板を1枚渡した。
又ミエルはそれを見て、

「多すぎるわよ」

と困ったように小声で言った。
ガルムは苦笑いで、

「俺がああ服やマントに込められた魔法に気付かないとでも思ったか？ そんな訳ないだろ。これは正当な代金だよ。お前もプロなら受け取れ」

又ミエルは苦笑して、

「ガルムさんには勝てないわね。それじゃ、ありがたく貰っておくわ。あの二人のこと、きっと強くしてね。約束よ？」

「俺を誰だと思ってやがる」

「はは、確かにそうね。じゃあこれだけは言わせて、御武運を」

「ああ。ありがとさん。おい！お前たち。そろそろ行くぞ」

「あ、はい」「わかった、今行く」

アシエルと琢磨はすぐにガルムのそばに来て、又ミエルに礼を言った。又ミエルはそれを受け取り、
3人は防具屋を後にして、ギルドに戻った。そして一夜明け、旅立ちの日となった。

#9（後書き）

これで旅の用意は全て終わりました。
次話、3人はキーリエの町を出ます。

ご愛読ありがとうございます><
感想をお待ちしております^^

10 旅立ちの日（前書き）

第1章

終章

#10 旅立ちの日

朝日が昇ってきた。もうすぐで暑い夏がやってくるが、まだキーリエの町の朝は肌寒く感じる程冷え込んでいる。

昼は活気に満ちている町も今は店員が開店準備を始めるのみである。そんな時間帯に、ギルド前にて朝日を見つめる2人の男女がいた。

1人は青い服に青紫色のマントを羽織る琢磨。

腰には2本の剣を提げ、腕を組んで静かにたたずんでいる。

1人は赤い服に深紅のマントを羽織るアシエル。

2本のダガーを腰の後ろで交差させるように提げ、

ニコニコと笑顔を浮かべてたたずんでいる。

ザッザッザッザッ

足音が聞こえる。

2人がギルドの方を振り返ると、

黒の服を身に纏い、漆黒のマントを羽織る1人の男の姿があった。

2本の剣を提げ、その内一本は紐で固く結ばれていて抜けるようには見えなかった。

彼の名はガラム、ひっそりと旅を続ける隠者。

彼の名はガラム、後に大きな災いを降り注ぐ悪魔。

彼の名はガラム、後に暗黒の世界に光を注ぐ天使。

彼の名はガラム、誰の敵でも味方でもない傍観者。

彼の名はガラム、最強を冠しながらも興味のない冒険者。

しかし、

今、それを知る者は誰もいない。
今、それを語れるものはいない。
今、その歩みを止める者は誰もいない

ガルムは2人の顔を眺めると、叫ぶでも呟くでもなく、

「さあ行くぞ。これからお前たちにこの世界を見せてやる。教えはしない、学べ。伝えはしない、感じる。連れて行きはしない、ついて来い。望むのならば、真理を見せてやる」

そう言うとガルムは歩きだし、その後を未熟な二人の弟子たちは必死に追いかけてゆく。

それを見送る者は誰もいない。ただ朝日が彼らを照らすのみである。

#10 旅立ちの日（後書き）

これで第1章が終わり第2章へと移っていきます。
題を付けるならば

第1章：旅立ち

第2章：世界へ

って所でしょう。

第2章は二人の弟子たちの成長物語となることでしょう。
追記：設定資料を別小説枠で追加しました。

ご愛読ありがとうございます><
感想お待ちしております^^

11 世界へ（前書き）

第2章

世界編

#11世界へ

キーリエの町を旅立って2ヶ月。

ガラム・琢磨・アシエルの三人は、

シャルベ王国と自由自治都市を結ぶ関所のあるルードリツヒ侯爵領
にようやく辿り着いた。

行商人や冒険者が多く行き来するため、賑わいはキーリエの町とは
比べ物にならない。

「向こうに見える馬鹿でかい門の様な建物が関所だ。あれの向こう
側が自由自治都市だな」

琢磨とアシエルは初めて見るその建物に口を空けて呆けている。

そんな二人を見てガラムは、

「気になるなら宿を取る前に見に行くか？陽が沈むまでにまだ時間
はあるし。どうする？」

「休みたい、ちゃんとしたベッドで」「私も安心して眠りたいです」

二人は道中の特訓を思い出していた・・・。

（修行と称して朝起きたらBランクの魔物しかない森に手足を縛ら
れた状態で放置され、毒の耐性を付けるためと毒の沼の中で1週間
生活させられ・・・）

（私の苦手な触手を持つ魔物数百体がいる洞窟に閉じ込められて、
脱出したらそのままワイバーンの卵取って来ないならもう一回閉じ
込めるといわれ・・・）

（（そのうえ寝る時は師匠（お師匠様）の作った氷の針の上で寝かされた。これで、これでやっと安心してぐっすりと眠れる！））

「あれ？師匠？師匠じゃないですか！」

三人は振り向くと道を歩く人たちが道を空け、そこを4頭の馬が引く豪華な馬車がこちらに向かって来た。

降りてきたのは身長190cm程で顔立ちの整った30代の男だ。それを見て、前を歩いていた騎士は慌てて、

「こ、侯爵様！如何なさいました。む？誰だ貴様らは！こちらはナルディールードリツヒ侯爵様であらせられるぞ！」

ガラム達三人を曲者と思ったのか、その騎士は槍を向けてきた。それを見たナルディは、

「構わぬ。こちらの御方は私の槍と魔法の師匠だ。今すぐその槍を収めよ」

その言葉に騎士はしばたたかせていた。

「え？あ？・・・え？」

「もう一度言うぞ。この御方は私にとって大切な方だ。騎士キースよ。その槍を収めよ」

「は！そうとは知らず、申し訳ございません！」

騎士キースが頭を深く下げて謝るのを、ガラムは手で制した。

「気にしなさんな。で、お前は何の用だよ」

「こんな人目の多い所で話すのも何なんで私の屋敷に来ていただいけませんか？荷物を持つてるところを見るとまだ宿を取っておられないのでしょうか。ささ、お連れの方もどうぞ馬車へ」

周りを見ると人混みが出来ており、確かに親密に話すことなど出来ない状況だった。

ナルディは三人を馬車に押しこむと、関所から少し離れた所にある立派な屋敷へと向かった。

「師匠。この人、師匠のこと師匠って言ったけど・・・」

ナルディはその言葉を聞いて嬉しそうにガルムに尋ねる。

「まさかガルム師匠。この子達は新しい弟子達ですか？」

ガルムは、

「そうだ。一応お前の弟子ってことになるな」

ふわふわの座席にふんぞり返ってそう答えた。

「おお、僕にも初めての弟子が出来たんですね！初めまして、僕はナルディ＝ルードリッヒ。一応ルードリッヒ家の当主を務めます」

「初めまして、琢磨です」

「初めまして、アシエルです。・・・あのう、一つお聞きしてもよろしいですか？」

ナルディは微笑みながら、

「いいよ。何でも聞いて？」

アシエルは美形のナルディの微笑みを見てつい頬に朱が差す。

「あ、はい。ありがとうございます。ナルディさんはおいくつなんですか？」

「君の目から見ていくつに見えるんだい？」

アシエルは質問を質問で返されるとは思っておらず、

「えっ・・・と。28歳ぐらいですか？」

「はっはっは。そんなに若く見えるかい。これでも38だよ」

「ええっ！そんなに！？あ、すみません」

「はっはっは。気にしなくてもいいよ」

馬車が止まった。どうやら屋敷に着いたようだ。

「着いたようだね。こっちだよ。ついて来てね」

ナルディは一足先に馬車を降りると屋敷の方へ向って行った。

3m程の両開きの扉を開けると、中はホールになっており上にはシ

ヤンデリアも吊つてある。

「凄いな、ここは。広くて温かみがある」

「褒めて下さつてありがとうございます。タクマ様」

そう答えたのは、巨大な階段の横に控えていた老執事である。

（あれ？俺この人に名前を言つたっけ？）

ガルムはこの老執事に軽く手を上げ、

「おう。久しぶりだな。あれから元気でやってたか？」

「これはこれはガルム様。この老骨なんかに気を使って頂きありがとうございます。そちらのアシエル様も長旅お疲れ様でした。湯浴みの準備が出来ておりますが如何なさいますか？」

（え？私名前言つたっけ？それに何で湯浴みしたいって分かるの？もしかして私臭い？）

アシエルは自分の匂いを確かめる。

そんなアシエルを見てガルムは、

「相変わらず情報も早いし、気も利いてるな」

老執事は軽く頭を下げて、

「それが仕事でございますので」

「アシエル。お前は別に臭くねえよ。ただこの執事さんは、少なくともこの町全てのことを把握してるんだ。どうやってかは知らないが。だからきつと外での俺たちの会話も全て耳に入ってるんだろうよ」

「お褒めに預かり光栄でございます」

そこに室内着に着替えたナルディがやってきた。

「コルド、この方たちをこの屋敷に泊めたいんだが・・・」

「既に部屋の準備とベッドメイキングを完了させております。食事をなさるなら10分もあればすべて用意いたします」

どうやらこの老執事の名はコルドというらしい。

「流石だな。ありがとう」

「生まれた時から坊ちゃんを見ております故、行動はすべてお見通しですぞ」

ふおっふおっふお、とコルドは笑った。

「じゃあ、お言葉に甘えるか。アシエルは湯浴みして来い。琢磨はどうする?」

そう言われて、アシエルはメイドとともに湯浴み場所へと向かった。

「ここにいて良いか?」

「別にかまわんぞ」

そう言うと、ガラム・琢磨・ナルディは来賓室の椅子に座った。

「ナルディさん。師匠とは何時出会ったんだ？」

「僕が8歳の時かな。僕は風と水と地の魔導師なんだけど、当時は風を専門に国立図書館に籠もって勉強していたんだ。ある時、本の中で知らない単語があつたんで司書の人に尋ねただけど誰もわからなくてね。偶々近くの席ですらすらと古代語の本を読んでたから、勇気を出して尋ねたんだ。そこからほぼ毎日いろんな単語を教えてもらつてね。風の魔法を実際に見せて教えてくれたこともあつた。でも僕は風の魔法以外何の特技もなかった。でもそれじゃ駄目だつてガラム師匠は僕に槍も教えてくれたんだ。当時は有難迷惑だったけどね。いまじゃ武闘大会でも優勝できるほど強くなったよ」

「やつぱり凄いな、師匠は。ところで師匠。武闘大会ってなんだ？」

ナルディの昔話をガラムは鼻で笑って、

「はん。有難迷惑なもんか。泣きながら、父親を見返すんだ！って俺に教えを請うた癖によく言つぜ。それから武闘大会ってのは一ヶ月に一回各国で開かれる大会のことだ。その大会では武器も魔法も使い放題、殺すのは無しだがな。そして一年を総合してもっとも強かった武人4人が自由自治都市で行われる大陸大会でリーグ戦を行つて大陸最強を決めるんだ。こいつは俺が師事してやった次の年の大会で<最強>の名を冠したはずだ」

「そんな大会があるのか。なあ師匠。今の俺が出たらどれぐらいまで行けるんだ？」

ガルムはしばらく考え込み、

「そうだな。準決勝ぐらいには進めるんじゃないか？だが優勝は絶対無理だな。断言しておいてやる」

「タクマ君はそんなに強いんですか？」

「弱くはない。こいつのセンスは大したものだ。相手の射程を正確に把握する事が出来るから避けるのもうまい。あとは経験を積むだけだな。俺が育て上げたらギルドランクSかそれ以上もあり得るってレベルだな」

「ほう、それは凄いですね。ならアシエルちゃんはどうです？」

「あいつはダガ を使うためかバランス感覚が非常によく、女の身体的特徴をうまく掴んで戦っている。だがあいつの心には復讐心があるからな。今のままではランクSすら微妙だな。ただ、もし復讐心がなくなったら、こいつと同じぐらいの所まで行けるだろう」

「復讐ですか・・・それを思ったことは幸運なことに一度もありませんから俺が言うべき事じゃありませんが、虚しいものですね」

「そうだな。しかし人は変わる。お前が純粹無垢な子供からこんな軽薄な男に変わったように。高慢だったこのタクマがかわいくなっただように」

そういつてガルムは琢磨の頭をポンポンと叩く。
琢磨はそれを恥ずかしく思ってガルムの手を払いのけた。

「はっはっは。落ち着いたって言って欲しいですね。・・・おつとアシエルちゃんが帰ってきたようですね」

「ほらタクマ。お前も湯浴みして来い」

「師匠は行かないのか？」

ガルムはニヤニヤしながら、

「なんだ？一緒に入ってほしいのか？子供だなあタクマは」

その言葉にムツとしてタクマは何か言い返そうとしたがなんの言葉も思い浮かばなかった。

「はっはっは。そうむきになるな。冗談だよ、冗談。俺は毎日水の魔法を使って体洗ってたから入る必要がないんだ。だから一人で入っておいで。もしどうしても一緒に入って欲しいなら、一緒に入ってやるけどどうする？」

琢磨はボンと顔を真っ赤にするとコルドに案内されて湯浴みへと行った。

その後、ガルム・アシエル・ナルディの三人で他愛もない話をして、タクマが帰ってくるのを待った。

琢磨が帰ってくると、四人はコルドがいつの間にか指示して準備してくれた豪華な食事を食べた。その後、ガルムに割与えられた部屋にて、

「ガルム師匠。師匠たちはこれからどうするので？」

「一度ギルド本部へ帰還する。そこでこいつらのギルド登録を済ま

せて大陸を回る」

「お師匠様。『こいつら』って、私は登録済ませてますよ?」

「お前は結構な頻度で上位ランクのやつと組んで依頼をやっていたらしいな。だからお前の真の実力を測るために再登録させる。何、俺がこの2ヶ月育ててやったんだ。Cランクぐらいにはすぐに行くだろ。いかなければ・・・特訓量増加だな」

アシエルは不満そうに、

「ええゝ。理不尽だゝ」

それに対し琢磨は、

「かまいませんよ、俺は。強くなれるなら」

(頑張れ弟子達よ。この人の増加量は2倍とかってレベルじゃないぞ・・・)

ナルディはひそかに二人の安否を祈っていた。

「でもそうになると、アシエルちゃんとはとかく琢磨君は関所を通過できないんじゃない?」

琢磨は首をかしげて尋ねた。

「何でだ?」

ナルディは琢磨の方を向いて説明した。

「関所はきちんとした身分証明を出来る人しか出入りさせてくれないんだよ」

ガラムは懷からプラチナ色のギルドカードを出して机に置いた。

「これがあれば行けるさ」

ナルディは納得した様子で、

「確かにそれがあれば二人ぐらいどうってことありませんね。一応こつちでも裏から手を回しましょうか？」

「別にいらねえよ。もし無理なら困るのはあのジジイだ。そうなればあいつが手を回すだろうよ」

「ああ、そう言えば本部に寄るんでしたね。総裁に呼ばれたんですか？」

「いや、ただ色々報告したいことがあってな。そつちには関係ない話だ、気にすんな」

「そうしますよ。今日はもう遅い。アシエルちゃんやタクマ君もお疲れのようですしもうお休みになさってはいかがですか？」

二人は船を漕いでいた。

そんな二人にガルムは、

「おい！タクマ！アシエル！こんなところで寝るな。自分たちの部屋で寝ろ。ほら、行け！」

二人はふらつきながら部屋に向かった。

ガルムはギルドカードを懐に戻し、真剣な様子でナルディに声をかける。

「ナルディ、最近各国の上の様子がおかしい。一応気を付けとけ」
ナルディも真剣な様子で、

「お気づきでしたか。僕もそれに気付किまして、ガルム師匠がいると聞きましたからこうして話をしようと思って近づきました。今こちらが確認しているのはシャルベ王国の貴族派、クラリー王国の数人の司教のグループ、ギリウス帝国全体、更にはハルナ商連副議長のターナーの一派です。どうか道中お氣をつけて下さい。何かお手伝いできることがあれば遠慮なく言って下さい。必ず力になります」

「お前は俺たちのことよりも自分のこと、自分の民たちのことを気にしとけ。それがお前に課せられた義務だ。何があっても民を守れ、いいな？」

「・・・はい。師匠」

こうしてガルム達三人の夜は更けていった。

#11世界へ（後書き）

長い・・・こんなに長くする予定はなかったww
が、書いてるうちに長くなっただから仕方ないね。

訂正（12/11）：

申し訳ありませんでした！！

ナルディは『風の魔導師』ですが、

そもそも六属性に風が含まれていませんでした。

これは『ナルディは風』と流離人は考えていましたが、
属性に関する設定構想時、風を思い浮かばなかったために
属性に含まれなかった物と思われます。

ですので、『風』魔法は『古代魔法』の一つとし、
正式名称を『天空』魔法といたします。

全ては完全にこちらの不手際でややこしいことになってしまいました。
た。

重ねてお詫び申し上げますm（- -）m

ご愛読ありがとうございます>>
感想お待ちしております^^

12

・・・キイン、キン、キン、キイイン・・・

中庭から金属のぶつかり合う音がする。

（師匠とアシエルがこの2ヶ月間恒例になっている早朝訓練でもやっているのかな）

琢磨はそう思いながら、ふかふかのベッドで寝返りを打つ。

（俺が師匠に叩き起こされないってことは、もう少し寝ててもいいってことなんだろうな）

琢磨はまどろみの中考えていた。

（前まではまどろんだ瞬間に剣の柄で殴られたもんなあ。「まどろんだ時に背後に敵が来たらどうする！」って。寝ないでフラフラな時の方が危ない気もするけど・・・。まあいいや。寝よう）

琢磨は二度寝するために寝やすい態勢になる。

キイン、キン、キン・・・ガキイツ、キン・・・

（長いな。アシエルの奴。俺と同じ十七歳なのに俺はアシエルにも負ける。経験が少ないからかな。でも俺だつて四歳の頃から容赦ないじいちゃんに育て上げられたんだ。強くなりたいって思いなら誰にも負けない。誰にも負けたくないんだ。・・・あんなこと二度と起こらないようにするために！）

琢磨はまだ寝ていたいという気持ちを振り払い起きることにした。手早く着替え、愛用している二本の剣を手に、与えられていた部屋から出て中庭へ向かう。

早朝訓練を見てイメージトレーニングをするためだ。これは琢磨の祖父から習ったことだった。

しかし中庭で訓練をしていたのはアシエルではなくナルディだった。

「ハア！セエイ！」

ナルディはリーチの長い槍を最大限に使ってガルムの剣の射程外から攻撃していた。

しかしガルムはそれを剣で流している。どうやら攻撃をする気はないようだ。

ナルディは大粒の汗を流し肩で息をしているのに対してガルムは息も乱れてない。

「ほらほらどうした？早く攻撃して来いよ。演武はいいからよ」

「タア！つはあ、つはあ。それでも演武じゃなくて攻撃してるつもりですけどね・・・ソコ！」

ナルディは完全に振りはらった槍を体のひねりと腕の力で高速の突きを放った。

しかしこれもガルムは左足を半歩下げて紙一重で見切っていた。

「そうなのか？久しぶりの手合わせだから演武かと思ったぞ。これならタクマやアシエルでもかわせるな。お前最近素振りしてないだろ」

俺には無理だ、タクマは思っていた。ナルディの振るう槍は速さ・軌道とも変幻自在であり、突きは残像まで見えるほどだ。何度かガラムが高速で剣を振って見せてくれたことがあったがここまで速くはなかった。琢磨はその十メートルほど離れて座って見ているアシエルに近付いていく。

アシエルはそれに気付きながらも、勝負を片時も見逃さないようにするために顔はそのままで、

「おはよう」

「おはよう、これいつからやってるんだ？」

「一時間前からよ。そして一時間前から今までずっとこんな調子」

キイン、ガキ、ギイン、ギイン、ギイン・・・
剣と槍がぶつかって出来る音が鈍くなってきた。
どうやら勝負がつきそうだ。

ガキイイイン

両者は大きく距離を取った。
いや、ガラムが体を浮かせてナルディの槍に込めた力を使い、わざと吹っ飛んで下がったのだ。

「タクマも起きてきたしお開きにしようか。お前の最高の攻撃を見せてみる」

その言葉にナルディは一度肩に込めていた力を抜き二回深呼吸した。
すう、はあ。すう、はあ。

「行きます」

ズン！

ナルディが足に込めて地面を蹴った音が響く。

「・・・残像か。それで？」

ガルムの周りに八人の残像が、その全てがガルムに高速の十連突きを放つ。

「八連突き？」

「違う、十連だ！」

（タクマが当たりだな。よく見えてるな）
ガルムはその攻撃を冷静に見つめ、

「上が空いてるぞ！」

ガルムは跳躍した。その瞬間！

八人の残像が元いた八人の上に現れ、さらにガルムの頭上にもう一人が現れた。

頭上の一人の槍が白く輝き、ガルムの頭上から突きを放つ。

「＜奥義・夢幻奏舞＞」

突きがガルムに触れた瞬間、辺りに衝撃が走り、琢磨とアシエルは後ろへ飛び退いた。

「どうなっただんだ!？」

砂埃が晴れた先には、地面に槍を刺すナルディと彼の首筋に剣を当てるガルムの姿があった。

「狙いは良かった。見切られなければ良し。見切られても上への退路を作ることこそこへ誘導。空中では身動きは取れないからそこへ最高の一撃を放つ。お前にしては良い攻撃だ」

ガルムは剣を鞘へ納める。結局最後まで息を乱すことはなかった。そんなガルムにナルディは残念そうに、

「しかし避けられた上に負けました。師匠はいつたい何をしたのですか？」

ガルムはあっけらかに、

「上へ跳躍する残像を残して横から包囲網を出て気配を消し、砂埃にまぎれてお前の首を取りに行っただけのことだ。いつも言っているだろう。最後の攻撃が決まればお前の勝ち。決まらなければお前のピンチになるから対処を考えておけと。その対処はどうした？」

「刺さった瞬間に手応えを感じなかったので一度槍を捨て身だけでも引こうとしました。しかし師匠が私の首を取るのが早かったようで・・・」

「じゃあ次は手応えではなく気配で察するようにしろ」

ナルディはその言葉に苦笑しながら、

「そのための特訓が出来るような相手がいないんですよ」

「お前は軍に所属してるだろう？兵士とやり合えばいいだろう」

「それこそ無理ですよ。私はこれでも師団長です。軽々しく一般兵と勝負することなど出来はしませんし、同クラスの隊長達とすれば他国に不審に思われかねませんしね」

ガラムはナルディのこの言葉にニヤリとして皮肉を言った。

「お前ごときが師団長？家の力でも使ったか？」

ナルディは肩をすくめて言い返す。

「家の力を使ってもよかったですけど、それはいざという時のために置いておくことにしたんです。それに師匠に言わせるならばだれも師団長に着く人はいなくなりますよ。なんせ僕は十二人いる師団長の中では一番強いですし。もちろん武術ではですけどね」

「ふん。昔は真っ赤になって『使ってません！』って言い返してたのに本当に可愛くなくなっただな」

「今の僕がそんなことやったら気持ち悪いだけですよ」

ハハハ、とナルディは乾いた笑いを上げる。

「次はタクマとアシエルの二人でかかってこい。二対一なんだ、ナルディよりかは善戦しろよ」

・・・

結果は散々だった。タクマは開始すぐに剣の腹で側頭部を強打されて気絶した。

タクマが倒れたためにアシエルはガラムから注意を外してしまい、同じく気絶させられた。

二人が目覚めた後、四人で朝食を取った。

その後三人はナルディに別れを告げて関所へと向かった。

ガラムは受け付けにギルドカードを出し、受付嬢と2、3言葉を交わす。

「しばらくお待ちください」

そう言われてガラムはソファに座っている琢磨とアシエルの元へ歩いてきた

関所前は人でごった返していたが、関所の中は十人ほどしか人がいなかった。

それを疑問に思った琢磨はガラムに聞いてみた。

「師匠。何で中はこんなに人が少ないんだ？」

ガラムは二人の前のソファに座ると、

「関所を通るのは冒険者と商人だけなのはわかるな。一般人、今回は俺らのことだがそれは非常に少ない。旅をするメリットがないか

らな。冒険者、それも世界へ出る位の奴らは関所のフリーパスのあるランク以上の奴だ。Dランク以下だといちいち手続きがいるから自分の国で腕を磨く。商人は何十人も集まって移動するんだがそいつら全員が手続きしてたら日が暮れるから代表一人だけが手続きを行うんだ。だから今関所の外に居るのは冒険者の仲間達や商団の他のメンバーだろう」

「手続きって何をやるんだ？」

「商人ならば商人ギルドからの通行許可状の提示と商団の証明書。Cランク以下ならギルドカードとギルドの通行許可状。一般人は身分証明書と目的地、目的の詳細だな。俺は今ギルドカードとギルド本部への一応の連絡を行った。おそらく報告が時間かかるからしばらくはここで待ちだな」

「そうか。わかった、ありがとう」

会話が終わると関所受付のドアが開き一人の女性がこちらに向かって歩いてきた。

「ガラムⅡグランベルツ様でいらっしゃいますか？」

女性は眼鏡をかけ髪は肩まで伸ばしており、優しい笑みを浮かべている。

（早かったな）

ガラムはそう思った。

（すでに連絡が回ってた様だな）

「ギルド本部からの命でガラム様達を案内させていただくパレオと申します。ではこちらへ」

パレオはくりりと踵を返して三人を関所の奥へと案内する。
関所の中の廊下はずっと同じであり陽の光が当たらないため、
どれくらい歩いたのか分からなくなっていた。

「師匠。関所を抜けるのってこんなに長いのか？」

「いや。普通は通行許可証を発行してもらって関所の門を通れば済む。中を通ることはまずない。となるとこれはおそらく……。パレオ、俺らを瞬間移動装置へ？」

「はい。それにしても皆様は何者なんですか？各国の王でさえゲートを使うことは許されないのに、上層部はすぐにゲートの使用を決定しました。これは前代未聞ですよ。皆様はすごいですね。」

その言葉に気を良くしたのかアシエルは、

「えへへー。私達は「それを聞くのは約定違反だぞ。関所の局員は個人情報扱っても個人については触れない。それが絶対の約定だ。もし破ればお前だけじゃなくこの局員全員とおまえの家族全員の首が物理的に胴から離れるぞ」

ガルムは冷たい声でそう言った。

「そ、そうですね。し、失礼しました。ゲートはこの扉の先にあります。ゲートから跳んだ先からは本部ギルドの職員が対応します。では私はこれで」

パレオは顔を真っ青にして口早にそう言つと足早に來た道を引き返していった。

「ふん。教育が足りんな」

ガラムは扉を開けて部屋に入った。
二人も慌てて中に入るとそこには3m程の八面体の青い水晶が宙に
浮かんでいた。

「これが・・・瞬間移動装置？」
ゲート

「そうだ。これに手を当てて眼をつむり無心になれ」

二人は言われた通りにする。

ガラムは二人の手を握り魔術を発する。

「・・・・・・よし。水晶からゆっくりと手を離して眼を開ける」

二人は眼を開けると先程とは異なった場所にいた。
先程は狭く薄暗かったが、ここは広く明るい。

「ここはどこですか？」

「自由自治都市で中心部にある最も重要な場所であり、自由自治都市の別称としても名高い<ギルド本部>だ。この町にはギルド本部・商人ギルド本部・各国大使館・コロセウムの公共の施設がある」

「お待ちしておりました。ここからは私がご案内させていただきます。私の名前はパレナと申します。」

後ろを振り返ると先程と同じ顔の人物がいた。
おそらく双子だろう。

違うのは髪が腰まであり、後ろで一束ねにしている。

「よろしく頼む」

パレナはパレオと全く同じ歩き方で三人を案内する。
先程は下へ下へと案内されたのに対し、
今度は上へ上へと案内される。

「師匠、俺たちはどこへ案内されるんだ？」

「さあな。しかし見当はつく。おそらく総裁室か副総裁室のどちらかだろう」

パレナはガルム達を一つの部屋の前に案内する。

「この部屋です。では、私はこれで」

パレオは事務的にそう言うのと来た道を引き返して行った。
高さ10mはある巨大な扉の上には『総裁室』と書かれていた。

「こつちだったか。まあいい。入るぞ」

ガルムはノックせずに扉を一人入れるほど開ける。
開けた瞬間氷の刃がガルムを襲った。

ガルムはそれを見つめると、氷の刃は一瞬で蒸発した。

「おいおい。危ないじゃねえか」

「身じろぎもしなかった奴に今ほどの攻撃のどこが危ないんじゃ」

「俺の弟子がつい武器を抜いちまうじゃねえか」

執務机に向かって書類仕事をしながら言い放つ老人に

ガルムはアシエルの肩と琢磨の剣の柄を抑えながら言い返す。

「良い反射神経だな。しかしこれ程の攻撃で武器を抜くのはいささか軽率だな」

ガルムは飄々としているが琢磨とアシエルは大量の汗をかいている。20mは離れた所に座っている老人からとてつもない闘気が放たれているためだ。

視界が揺れる。倒れそうになって、老人から闘気が消える。

「ふむ。ここまで長く我が闘気を浴びて立っていられる奴は久しぶりじゃな。ガルムよ。こ奴らはどこまで行ける？もしくは行かす予定じゃ？」

「SランクかSSランクだな。それ以上はきついだらう」

老人は自らの顎を撫でて、

「今の推定ランクはどれ程じゃ？」

「Bランク。大目に見てAランクってとこだらうな」

「ではBランクからのスタートでよいかの？」

「いいや、戦闘能力こそはAランクだろうが経験がない。Cランクが妥当だろう」

「あいわかった」

老人は頷くと後ろの棚から一冊の書類を取り出して手早く何かを書き込んだ。

「これでよい。ほら、ソファに座れ座れ」

老人は書類を棚に戻して自身も向かいのソファに腰を下ろした。

「初めまして、じゃな。二人の弟子達よ。話が名はイシュリド。竜人族でありギルドの総裁をしている。それに君たちのことはよく知っておるよ。光魔導師ユウの妹にして自身も齡17歳にしてランクC」

「お姉ちゃんと私の事ご存じなんですか？」

イシュリドはアシエルの方を向いて頷き、話し始める。

「もちろんじゃ。ユウ殿は光魔導師だが魔極師と呼んでもよいほどの力の使い手じゃ。ガラムよ。魔極師については？」

「存在と種類だけだな」

「魔極師とは最高位魔法に加えて禁忌魔法クラスの魔法を習得した魔法士に与えられる称号での。ユウ殿もそれを覚える途中でこの規定を知ってわざと禁忌クラスを覚えるのを断念した」

「何故ですか？」

「彼女の願いは故郷で治癒魔法士として働くことだな。魔極師になれば他からも大量の患者が来るようになる。だからあえて魔導師に留まることにしたようじゃ。無論それほどの使い手を逃すわけにはいかぬとギルドからも幾度と使者を送って彼女を説得しようとしたが結局折れなかった。

君はそれとは別ルートで知った。12歳にしてギルドランクCに認定。本部へ来て貰い、育て上げることを考えて君について調べた所、ユウ殿の妹であることが分かった時、我々がどれほど絶望したか。調べ上げる時にまずわかったことが故郷のために行動していることだ。この二つが判明した時に我々は君の事を諦めた。説得も無理だと分かったからじゃ。しかしなんという僥倖じゃろ。今君はここにいる」

「そんなことが・・・」

アシエルは輝いた顔で何度も相槌をうつて聞いていた。

続いてイシュリドは琢磨の方へ向き直り、

「そして、同じく初めまして。異世界からの訪問者よ。君はこの世界へ望んできたのか？それとも望まずにきたのかを教えてくださいませんか？」

琢磨は驚いた顔をして何か言おうとしたが、何も言うことは出来なかった。

「タクマ。俺が言った。情報収集は俺よりこっちに頼んだ方が早いからな」

「そ、そうなのか。俺は望んでこっちの世界に来たわけじゃない。でも俺は向こうの世界に帰りたい訳でもない。俺は向こうの世界ではチンピラで、何をしても空虚感しかなかった。でもこっちに来てからは全てが新鮮で楽しい。それに目標も出来た。何で俺がここに来たのかも知りたい。でも、戻る方法がわかったとしてもそれからどうするかは決めてない。そんな身勝手が通るんだろうか？」

「・・・別にかまわんよ。ならば原因と移動手段について調べておこう。向こうの世界には何か未練はないのかの？」

「俺は兄弟も両親もいない。でもじいちゃんにはこの世界に来る時に何も言わずに来た。だからじいちゃんにちゃんと話をしたいとは思ってる」

イシュリドは深く息をついた。

「ふう。そうか。それぐらいならなんとかやるやもしれんな。やってみよう」

イシュリドは机に置いてあるベルを手にとって鳴らした。するとすぐにノックとともに若い女性職員が来た。

「二人をSランクの休息所へ。ガルムは少し残ってくれ」

二人は職員に連れられ部屋を出て行った。部屋の外から気配が消えた後、イシュリドは話を切り出した。

「さて、ここからは大人の話じゃ。まず・・・」

12 (後書き)

次話は本編を、その次に番外編を挟もうと思っています。

ご愛読ありがとうございます><
感想お待ちしております^^

13

朝。眼が覚めた琢磨は伸びをしながら思った。

（毎朝ねどこが違うなあ・・・）

そして琢磨は机の上のロウソクのスタンドの下に何かがあるのに気づいた。

一枚は10円玉と同じ色をしたカード、『タクマ カワサキ』0pt』と書かれている。

もう一枚はメモであった。

『俺はイシュリドと話があるから。お前はアシエルと鍛練場へ行つて特訓しとけ。一緒に置いてあるギルドカードは鍛練場の使用許可証にもなるから持つて行けよ。後、読んだらこの紙はロウソクで燃やしておいてくれ。念のためにな。』

（こっちのカードは『ギルドカード』か。大きさはテレホンカードより少し大きいぐらいかな？ブロンズ色ってことはCクラスで『0pt』は依頼達成の時に貰えるポイントを示してるんだろうな）

琢磨はギルドカードを懐へしまうと、アシエルに与えられた部屋へと向かう。

（確か左隣の部屋だったな）

コンコン

「おい。アシエル。鍛練場行くぞー」

ガチャリ

ドアノブをひねると扉は開いた。どうやら鍵はかかっていないようだ。

琢磨はドアを開け室内へと入っていく。

そこには服を脱ぎ散らし、下着をも脱ごうとしているアシエルが立っていた。

琢磨はアシエルと目が合ったのに気づいた。

・・・・・・・・

数秒の沈黙が部屋を支配する。

琢磨の本能が警鐘を鳴らしていた。

しかし琢磨は動けずにまじまじとアシエルを見つめていた。

（あ・・・れ？アシエ・・・ル？裸？・・・裸！？まずい！）

アシエルはハッと思い出したかのように顔が真っ赤になり、体中が震えている。

琢磨は今までの特訓の中で鍛えた脚力を使って全力で後ろへ飛びのこう・・・とするよりも速く、

アシエルの拳が琢磨の頬を襲った。

琢磨は部屋から文字通り殴り出され、扉が神速のごとく閉まった。

数分後、頬を赤くはらした琢磨の前に、無表情のアシエルが現れた。

「あのさ・・・」

「何！？」

「ごめん・・・」

「はあ、もういいわよ。別に悪気があったわけじゃないんだし、鍵

を掛けてなかった私も悪いしね。でもね！今度からは鍵が掛かってなかったとしても勝手に入らないでよね！」

「ああ、悪かったよ。次からはしない」

琢磨は再度謝り、今の光景を思い浮かべていた。

（確かに鍵が掛かってなくても女の子の部屋に勝手に入った俺が悪いよな。裸も見ちまったし・・・裸・・・）

再び琢磨の顔が熱くなる。

「思い出してんじゃないわよ！」

バキッ！

鍛練場に着いた時、琢磨は両頬を真っ赤に膨らませていた。

「へえ、室内にあるのか」

二人は扉を開け鍛練場に入った。中は武器屋の時に入った鍛練場とは比べ物にならないほど広い。

鍛練場には3グループが鍛練をしていた。しかし遠すぎて何をしているのかまでは見えなかった。

2人に気付いたのか一人のギルド職員が近づき尋ねてきた。

「君達、俺はここの鍛練場の番をしている者だ。ギルドカードを見せてくれ」

2人はギルドカードを男に渡す。

「2人ともクラスCか。Optということは誰かの推薦か」

「え？アシエルってギルド登録してるんじゃないかったのか？」

「私が寝ている間に御丁寧に私のギルドカードと新品のギルドカードが交換されてたの。おそらくお師匠様の仕業よ。あの人も私の部屋に勝手に入り込んできてるのよ。最低だわ！」

「ははは。凄い人だね。クラスCに推薦できるってことはかなりの上位クラスみたいだね。はい、これは返すよ。ここは自由に使っているからね」

男は二人にギルドカードを返してそう言い残すと元いた場所に戻っていった。どうやら端っこの方に椅子を置いてくつろいでいるらしかった。

「じゃあ、素振りと組み手でもするか」

「ええ、いいわよ」

2人は人のいない場所で準備運動・素振り・素手での組み手・武器を使った組み手をして汗を流した。

「おーおー。お前ら強いなあ。ちよつといいか？」

休んで話をしていた2人に男は声をかけてきた。

以前の経験を生かし、男からは見えない位置で二人はいつでも武器を使えるように体を動かす。

そっしながら琢磨は男を観察していた。

炎のように赤い髪で、服装は半袖長ズボン。筋肉は多いが無駄がない。何より隙がない。

（かなり強いな。俺とアシエルで戦っても勝てないな。いざとなれば離脱するか）

「おいおい。武器を構えるなよ。別に何もしやしねえよ」

男は二人の行動を見抜き、けん制した様子の声を上げた。

「怖いおじさんが急に声をかければそりゃ迎撃態勢を取るよ。それに彼らと勝負するなんてダメだからね。僕らには今から仕事で時間がないんだから」

男とは違う方向から緑の髪をした少年が現れた。

全く気がつかなかった二人は驚愕した。

（俺らより幼い。12歳ぐらいか？いや、それよりもなんでこんなに近づくまで気付かなかった！？）

赤い髪の男は不満そうに、

「別にこいつらと試合するぐらいの時間はあるだろ」

どうやらこの男は二人と試合がしたかったらしい。

そんな男に対し少年は唇を釣り上げ、上目づかいに彼を見ながら、

「あれ？もしかしてこの二人を相手に短時間で勝負がつくと思ってるの？」

その言葉に男は首をかしげ、ニヤリとほくそ笑んだ。

「うん？・・・そうか！こいつらはそんなに強いのか！そんなに強いなら俺たちはまた会えるな。試合はその時に持ち越すか。おし！そうだと決まったら仕事だ、ほらさっさと行くぞ！」

男は高笑いを上げながら鍛練場から出ていった。

少年も男と一緒に出ていこうとし、扉の前でこちらを振り返り、

「じゃあね〜」

可愛らしい笑みでそう告げ去っていった。

2人はどつと疲れたように座りこんだ。

「ねえ、もし試合をしてたら勝てたと思う？」

琢磨は首を横に振り、

「二人で戦ったとしても互角どころか一瞬で負ける。それぐらいの実力差だったと思う」

「だよね。私たちもまだまだ弱いね。特訓再開しようか」

「ああ、まだガラムは来ないみたいだしな」

二人はしばらく特訓を続けた。

しばらくするとガラムが鍛練場にやってきた。

「おう、待たせたな。ここでの用は全部終わった。お前ら汗を流し

て来い。そしたら出発するぞ」

その言葉に2人は水を浴びにそれぞれの部屋に戻った。

————SIDE琢磨————

ざああああ

（それにしてもこの世界は本当に異世界なのか？言葉が通用したり文字の読み書きが出来るのは何かの特殊能力かと思ってたけど、シヤワーまである。機械じゃなくて魔石を使ってるらしいけど、誰が発明したのかな。やっぱり文明が発達すると発想は同じになるのかな。アシエルにもいろいろ聞いてみるとするか。そういえばさっきの組み手の時、あいつは近距離から攻撃してたな。なら俺は少し間合いを開けて攻撃すれば勝てるか？いや、それとも逆に近づいてみるのはどうだろうか・・・）

————SIDEアシエル————

ざああああ

（あいつを殺すにはまだまだ修行が必要ね。さっきの男に勝つくらい強くなれば、ようやく、ようやく諦めかけた夢が果たせる！そういえば組み手の時、琢磨は中距離から攻撃してきたわよね。私は攻撃されるより早く懐へ飛び込まないと。でもずっと間合いを維持しすぎるのは無理よね。なら・・・）

————SIDEガラム————

「おせえ・・・」

ガラムは1時間以上ロビーで待っていた。

二人はやつと階段から談笑しながら近づいてきた。

「おせえぞお前ら！汗を流すだけで何で1時間半もかかるんだよ！」

「少し考え事を・・・」

二人は申し訳なさそうに言った。

ガルムはため息をつき、

「はぁ。まあいい。いろいろ事情が変わってな、クラリー王国から旅を始めるんだがそこに行くのに徒歩じゃなくてゲートを使うことになった」

琢磨は首をかしげて尋ねた。

「ゲートでクラリー王国の首都まで行くのか？それと何でだ？」

「いや、クラリー王国側の関所までで、理由は言えねえ。大人の事情ってやつだな。早速行くぞ」

「あれ？今回は案内の人はいないんですか？」

「場所も知ってるしな。いちいち職員を借りるわけにもいかねえんだよ」

「…………ギルド本部　瞬間移動装置の間……………」

「じゃあ前と同じように水晶に手を当てて目をつむって無心になれ」

「わかった」「わかりました」

「さて、次にここに来るのはいつになることやら……よし、やるか。……………」

ガラムはそう呟くと魔術を口にした。

「…………クラリー王国側　関所　瞬間移動装置の間……………」
「……もういいぞ」

二人は眼を開けると前回とは逆に、明るく広い場所から暗く狭い場所へと変化していた。

三人は関所から出ると、そこは日差しが入り込んだ明るい森だった。さまざまな樹が生えているらしく、いくつかの樹には果実もなっている。

琢磨は旅の始まりに興奮していた。

「師匠。ここがクラリー王国なのか？」

「ああ、ここが旅の出発地点だ。ここからギリウス帝国、ハルナ商連、シャルベ王国へと移動する。これからは今まで以上に厳しくしごくから覚悟しとけよ」

「師匠、よろしく頼む」「よろしくお願いします」

三人は森の奥へ奥へと進んでいく。
それぞれの目標を目指して。

これが、ガルム・琢磨・アシエルの旅の始まりだった……

13 (後書き)

2章終了

次回番外編、というよりは他の人視点の話を書きます。

ご愛読ありがとうございます。
感想お待ちしております。

番外編 #14 それぞれの思惑（前書き）

番外編です。

外伝とは別物。

番外編〃本編に関係

外伝編〃本編とは無関係

番外編 #14 それぞれの思惑

————シャルベ王国 とある領土————

夜のとばりが下りた頃、部屋には厳しそうな様子で眼下の街並みを眺める一人の男がいた。

街並みは昼の賑やかさとはまた違った賑わいを見せていた。

「閣下。奴が一昨日ギルド本部へと移動し、今日クラーリ王国へと移りました」

闇の中から声が聞こえる。声からどうやら男のようだ。
部屋の持ち主は何も驚かず、

「そうか、イシュリドと何を話したか分かるか？」

「申し訳ありません。あの建物には古代魔法級の結界が張ってあつた為に、中に入ることすらままなりませんでした」
エンシェントスベル

「そうか。まあいい。他に何かあるか？」

「奴は男女二人の弟子を取ったようです」

男は驚いた様子で振りむき、闇に向かって口早に尋ねた。

「何者だ！」

闇からの声は変わらない口調で、

「女の方はキーリエの町出身の冒険者のようです。名前はアシエル
「グリード。男の方は現在調査中です。キーリエの町者ではない
ようで、おそらく旅人かと」

その返答に男の顔はこわばる。

「グリードだと！？まさかあの男の血縁者か？」

「は。娘でございます」

「娘か。・・・あれには娘が二人いたな。もう一方に見張りを付け
ておけ。何時でも行動を起こせるように。男の方は引き続き調査を
続行しろ」

「御意」

闇の声はそれ以降聞こえなくなり、男は再び街並みを見下ろす。

「さて、これがどう影響するか・・・」

「ーーーークラリー王国 とある教会ーーーー」

一人の老人が椅子に座り、眼を閉じている。

「マクレガー様。あの御方がこの国に入国したとの情報が入りました」

「そうか。彼はどこに向かっておるのだ？」

とある協会にて、教皇の次席である10人の司教の内一人、司教マクレガーの元に一人の司祭が現れる。その男は聖職者よりも賊と言われた方が納得出来るような男だった。

「例年通り、北へ向かっております。おそらくウェルディ司教領へ向かうものかと」

「ならば我が領へはおそらく最後に来るのであるうな」

その言葉に司祭は頭を下げ、

「は、きっとそうでありましょう。しかし、気になる点がございませす」

マクレガーはふっと眼を開けた。

「何だ、申してみよ」

「関所を通ったのは三人とのこと」

マクレガーは眉をひそめ、少し考えた後に、

「その様子を見るに、他の者はあの者達ではなからう?」

「は、あの者達に動きはありません。・・・では、失礼いたします」

司祭が去った後、マクレガーは再び目を閉じる。

(・・・まだ、まだ早いかな)

————ギリウス帝国 王城 王の私室————

コンコン キィ パタン

「陛下、お呼びでございますか」

ギリウス帝国帝王ルンドベルクの部屋に一人の老人が入ってきた。老人は真つ赤なマントを羽織り、杖をつきながらも眼光は鋭い。

「来たかラパーン。お前を呼んだのは他でもない。ガルムⅡグランベルツが弟子をとって再び大陸を回り始めたらしい」

ラパーン。ギリウス帝国宰相の地位に就いている彼は齡70を超えている老人で、ギリウス中の貴族をその人望と財力、頭脳でまとめあげている。ラパーンはルンドベルクの言葉にわななき声を震わせる。

「ま、まさか陛下。計画を早めるつもりですか！？なりません、ありませんぞ。あの計画は帝国の最初の一步となる極めて重要で繊細なものでございます。慎重に進めなければなりません」

「ふ、そういうわけではない。ただな、あ奴は二人の弟子をとったらしくてな。それを利用することにした」

「弟子ですと？何者でございますか？」

ルンドベルクは、その言葉を待ってましたと言わんばかりに唇を釣り上げる。

「一人はまだ分かっておらん。だがもう一人の方はアシエル「グリードだ。確かわが軍に此奴に深い関わりのある者が一人いたはずだ。其奴を差し向ける。もちろん我が国に移動してきた時にだな」

「成程、それは良い手でございますな。では早速それに向けている準備いたしましょう。では、失礼いたします」

コツコツコツコツ・・・

ラパーンが去った後、ルンドベルクは一人笑っていた。

「ふふふふふ、これで俺の目的にまた一步近づいた。・・・ふむ。一応あいつらにも知らせておいてやるとするか。あいつらは俺を利用してゐるつもりだろうが、俺が逆にあいつらを利用してやろう。」

そう言つてルンドベルクは私室を出て城の地下深くへと潜つていった。

番外編 #14 それぞれの思惑（後書き）

ちよいと匂わしてみました。

#15 ノートリオール平原

ガラム・琢磨・アーシェの三人は関所を出発し、右周りに王国を回ることに関路を北に取った。

三人はひたすらに平原を北に歩いている。

「師匠、ここはどこなんだ？」

「……ここはナバルディ領にあるノートリオール平原だ」

ガラムはどこか遠いところを見てそう答える。

「師匠？ここに何かあるのか？」

「ここは、かつて三英雄とそれを支援した大陸中の戦士達が魔王率いる軍勢と戦った場所だ。その戦いはノートリオールの決戦とも言う」

「そうなのか。でもなんでここでなんだ？魔王の城でもあったのか？」

ガラムは首を振り、辺りを見渡す。

「1000年前はこの場所に国があったんだ、その国の名はノートリオール。そう、今のこの平原の名だな。この平原は別名、聖墓ノートリオールとも言う。勇敢な戦士達が眠る為、今でも三国はこの場所を使って合同演習もするんだ」

琢磨はその言葉に納得したが、
（あれ？なら何でその国はなくなっただんだ？）
その疑問をそのままガルムに尋ねると、

「この国はその時の戦いの前に非戦闘民を他の国に移し、国の全てを決戦のために改造した。そして王城を大陸軍総本部とした。そこまでののは大陸軍と魔王軍の戦力差がひどかったからだ。大陸軍の数はおよそ30万程、それに対して魔王軍はおよそ1000万はいたらしい」

「圧倒的じゃないか。でも今の世の中があるってことは勝っただんだろ？どうやってその戦力差を覆したんだ？」

ガルムは無表情に言い放った。

「30万の戦士たちは、三英雄とその従者たちは魔王と戦うために魔王軍に道を作った。そして彼らが魔王の元へ行った後は魔王軍との正面衝突に入った。しかし、それだけの戦力差は簡単には翻るものではない。彼らの8割が戦死した後、彼らは城へと退却した。その周りを魔王軍が取り囲んで一気に殲滅しようとした。そして彼らは城に戦闘前から施してあった古代魔術エンシェントスベルの中でもさらに特殊、原始魔術エネシス『アルパ』。これにより魔王軍の9割が消滅された、王城を含めて」

辺りに沈黙が満ちる。アシエルは信じられないような顔でガルムに尋ねる。

「ちょ、ちょっと待って下さいよお師匠様。魔王軍は戦士達が相打ちで倒したんじゃないんですか！？私はそう習いましたし三国家もそう言って・・・」

「大陸軍はもともとからその魔法を使うつもりでいた。そして大陸軍には三国家の重鎮たちも参加していた。もし勝ったとしても禁忌魔法の使用で大陸が荒れるわけにはいかない。だから魔法の使用を知る者は事実を自分の墓まで持つていくことが暗黙の了解とされた。しかし、それを拒み文書に残す者もいたんだ。」

「じゃあお師匠様はそれを読んで・・・」

琢磨はそれよりも一つの疑問を持っていた。

「師匠、三国家は300年前に出来たんじゃなかったのか？」

琢磨は首をひねってガルムに尋ねた。

ガルムもなぜか首をひねっていた？

「ん？教えてなかったっけ？元々今の三国家は1000年前には存在してたんだ。三英雄達は元々、三国の王家の血筋だ。そして大戦後その三国を中心に諸国を併合していった、いずれ来るであろう魔王の脅威に対抗するために」

「え？魔王は倒したんじゃないのか？」

「魔王は何度倒してもよみがえる。だから英雄たちは魔王を封印することに決めた」

「どつやっただ？」

「勇者ベルズングの剣は神器『神の王剣』^{ファルシオン}って剣なんだが、それにありったけの魔力を込めて『無』の空間に魔王を封印した。しかし

それはいつ解けるかわからない封印だ。なぜなら無の空間はそもそも机上の理論でしかなかった。研究をして、魔王の封印を解除するわけにもいかずに研究は中止となった。だから三国は封印が解けるのをひどく恐れている」

「概念武装？」

「概念武装って言うのはその名の通り武器に『概念』を込めてある武器だ。概念は魔力をもって込められ、込められる魔力が大きい方程効果も高くなる。概念武装の上位にあるのが『神聖武器』そのさらに上位にあるのが『神器』だ」

ガラムはそう答える。

三人はひたすらに北を目指す。街はもう近い。

「師匠・・・あれは・・・なんだ？」

琢磨は遠くの空に光る物体を見つけた。

「何か光ってるんだが・・・鳥か？」

ガラムはその言葉に同じように遠くの空を見る。

「あれは・・・・・・・・馬鹿な！？おい、街はあっちだ。どうやら尋常じゃない事態に陥ってるようだ。今から向かう街は大きな丘がある。街に着いたらお前たちはその丘の頂上で待ってる！」

「お師匠様はどうなさるんですか？」

二人はガルムの様子に危険を感じ取り、顔に緊張が走る。

ガルムは装備を確認すると、金の入った袋を琢磨に投げ渡す。

「これはお前が持ってる。俺は今から全力で街を目指し、必要ならば戦闘を行う。お前らも戦ってもいいが相手の实力を見極めろ！いいな！」

そう言うと、ガルムは風のように街へ向かって行った。

二人はお互いを見て頷きあった。

そして二人も街へ向って走り出す。

#15 ノートリオル平原（後書き）

概念武装についての説明の追加です。

込められる魔力⇨概念の効果力

神器＞神聖武器＞概念武装

神器⇨魔力の塊（特大）＋使い手の意志力

神聖武器⇨魔力の塊（大）＋使い手の意志力

概念武装⇨魔力（中）＋概念（武器ごとに異なる）

概念武装についての基本的な事柄は設定集に掲載いたしましたので、そちらをご覧くださいませ。

次回予告

街を襲う光る鳥（？）とは一体何なのか？

それに対してガラムはどう立ち向かうのか！？

琢磨とアシエルは街で何をするのか！？

次回、『街中にて・・・』

ご愛読ありがとうございます。

感想、お待ちしております。

#16 街中にて

————SIDEガルム————

走り出して数分後、ガルムはとある街に着いた。

その街はいたるところから火の手が上がり、殆どの建物は廃墟と化している。

建物の瓦礫が道を塞いでいるために遠くを見渡すことが出来ない。ガルムはとりあえず一番高い瓦礫の上に登り、街全体を見渡すことにした。

「ひつでえな、こりゃあ。いったい何百人が死んだんだ？」

ガルムはため息をつき、視線は一点を見つめている。

「何でお前さんがここにいて街を襲っているかは知らんが、ここは人間の街だ。もう充分に暴れただろう？いい加減この街から退場してもらっぞ！」

街の空には夕陽の赤色を塗り消すほどの光を放つ一体の龍がいた。

光龍とも呼ばれ、三大龍とも呼ばれるクラスSSの魔物である。

光龍は以前琢磨が相手にしたワイバーンなどとは格が違う魔物である。

龍種は翼竜種ワイバーンや蛇竜種ナーガの上位に位置する魔物であり、

光龍の放つ光弾は一撃で翼竜や蛇竜をミンチに出来る。

ガルムは横から光龍の方へ瓦礫の上を滑るようにして近づく。その間も光龍は街を破壊していく。

（人の姿がないことを考えると、どこかに隠れてるのか。その方が都合がいいな）

光龍はもう目と鼻の先である。ガルムは隠していた殺気を放つと光龍がガルムに気付いて振り向く。

その時には既にガルムは剣を鞘から抜き放ち跳躍していた。

「遅い！」

一閃

ガルムの剣は光龍を両断した。

しかしガルムは着地すると同時に右方向に再び跳躍する。

轟音

衝撃が着地した位置を襲う。

光龍が光弾を放ったためだ。

光龍は泰然と空中に鎮座していた。

ガルムは剣をしまうと鋭い視線を光龍へ向けた。

『何者だ。何ゆえ我にあだなす。我は光龍であるぞ』

「・・・喋れる龍と出会ったのは久しぶりだな。なんでこの街を襲ってるんだ？この街がお前と敵対する行動でもあったのか？いや、そんなことが出来る筈がない。龍の谷はこの国には存在しないからな」

『この街にて我が同胞を感じた。今は感じなくなったが、あれは間

違いなく我が民。龍は人とは生きられぬ。連れ帰ろうとしたが人は知らぬと言う。故に攻撃をした。強く、我が念話を解す人間よ。我が同胞を連れ返せ』

「この街にやあお前以外の龍は感じねえよ。勘違いだろ」

『貴様も奴らと同じか。ならば用はない。貴様を殺し同胞を連れ帰る』

「同胞などいないというのに……。話の通じねえ奴だ」

（銀の剣じゃ実体のない光龍の相手は厳しいか。魔法銀の剣はタクマに貸して折られたつきり買い忘れてたしなあ。仕方ない、この剣を使うとするか）

ガルムは腰から紐で封印された剣を手にとると、紐を外し始める。

『貴様は他の者とは違う。我が全力で相手をしてやろう』

そう言うとき光龍は全身に力を込め、口元に魔力を集め始める。

口元で生成された光弾は先程のふた回り以上もある。

『我が全力を受けよ』

光龍はそう言うとき、魔力を解放した。

放ったそれは一直線にガルムへと向かって行く。

しかしガルムはそれを全く見ずにただひたすらに紐を解いていた。光弾が当たる直前になってようやく紐を解き終わったようだ。

光弾がガルムの顔を明るく照らす。

「……よし」

剣を鞘から抜き光弾へと振りかぶる。

静寂

光弾は音もなく消滅していた。

ガルムは笑みを消し去り、剣先を光龍へと向ける。

「さて、闘いを始めようか」

そう言うと、ガルムは剣を振りかぶりながら跳躍した。

光龍はとつさに体をひねって避ける。

態勢が悪いため反撃は来なかった。

避けられたガルムは着地と同時に剣を地面へと突き刺した。

すると地面から黒い柱が光龍の真下から生えて貫いた。

多少よろめいたもののすぐに立ち直り、光弾を放った。

貫かれて消滅した部分も一瞬で再生した。

『その剣は……人よ。何故その剣を持っている。それは偉大なる我が父が三百年前に封印した物であるぞ。まさか貴様、封印を解いたのかあ！』

「……俺はこの剣を魔物から奪い取っただけだ」

『戯言を。まあ良い。貴様を殺し、今度は我が封印するとしよう』

そう言い放つと、今度は光龍がガラムへ突進する。

————SIDE琢磨・アシエル————

ガラムが街に到着してからさらに十分後。

二人はようやく街へと到着した。

「師匠は龍と戦ってるみたいだな」

街のあまりの悲惨さにアシエルは口を覆う。

「何これ！？ひどい・・・ひどすぎる・・・」

口にこそ出さないものの琢磨も目の前の光景に絶句していた。
琢磨はあたりを見渡すと、一人の男が倒れ伏しているのが目に入った。

「おい、誰か倒れてるぞ！」

二人はそばに駆け寄ると、男を起こし、脈を確認する。

「・・・息がある。アシエル、治癒魔法を！」

「ユウお姉ちゃんはどうまく治癒魔法を使えないけど・・・やってみるわ！」

アシエルは両手を男の胸の前で組み、目を閉じて念じる。

「ああ、神よ。傷を負いし此の者に癒しの加護を・・・<ヒール>」

アシエルの両手が白く輝き、その輝きが男の胸の中へと吸い込まれていった。

「・・・がはっ！ごほっごほ・・・」

男は咳こむと薄く眼を開いた。

「ありがとう、見知らぬ旅人達。でも俺はもう駄目だ」

男は眼を開けたものの手は震えていた。

「諦めないで！」

「自分の状態ぐらいわかるさ。・・・絶望的だってこともな。この街はどういうわけか光龍に襲われた・・・がはっがはっ。お前達もこの裁きに巻き込まれない内に別の街に逃げな。俺たちに関わっちゃ・・・ごふっごふ・・・いけねえ・・・」

男は再び目を閉じ全身から力が抜けた。どうやら息絶えたらしい。

「そんな・・・」

アシエルは涙をこぼし嘆いている。

「私がユウお姉ちゃんと同じぐらい治癒魔法がうまければ・・・」

「馬鹿な事を言うな！それより他の人がいないか探すぞ！二手に分かれて、三十分後に師匠の言っていたあの丘で落ち合おう！・・・俺はこっち側に行く。アシエルはあっち側を頼む」

アシエルは手の甲で涙を拭き取り、頷く。

「わかったわ。じゃあ三十分後にまた会いましょ」

二人は瓦礫によって塞がれた、道なき道をそれぞれ進んでいった。

————SIDE 琢磨————

「おい！誰かいなか！」

琢磨は大きな声で辺りに呼びかけながら、瓦礫のひしめく道を歩いていた。

しばらくすると、中心に噴水のある少し開けた場所に辿り着いた。そこには看板や芝生やベンチもあることからおそらく広場なのだろう。

広場の周りには元から建物は少ないため、瓦礫も少なかった。琢磨は冷たい水の出る噴水に手を浸しながら思った。

「ん……。冷たいな」

（綺麗な場所だな。普段は人が一杯集まって賑やかなんだろうな）

その時、大気が震え上がった。

琢磨はぱつと後ろを振り仰ぎ、空を見上げた。

そこには黒い柱に貫かれた光る龍の姿があった。

（あの黒い柱は何だ？あれを見てると何か・・・ひどく、気持ち悪い。でも、龍が痛がつてるってことは師匠の魔法だよな？師匠っていったい・・・！！）

琢磨は正面に何かを感じて身構える。そこには一体3mはある大きい魔物三体と琢磨の半分ほどの身長小さい魔物十体がいた。どうやらガルムと龍の戦いを見ている間に接近を許していたようだ。

（近くの三体の魔物は一つ目の巨人・・・サイクロプスか。初めて見るけど図鑑の通り随分大きな斧を持ってるな。後ろはゴブリンだな、サイクロプスのおこぼれでも狙ってるのか。ランクCが三体とランクEが十体か。数が多いが驚異的な程でもないな）

琢磨は腰の剣を抜き放つと、サイクロプスの脇をすり抜けてゴブリンの集団へと飛び込んだ。あまりにも速いスピードに魔物たちは驚き、動きを止める。その間にも琢磨はもう五体ものゴブリンをほふっていた。ようやくゴブリン達が琢磨を殺そうと武器を振りかぶるが、ガルムの厳しい特訓を受けていた琢磨は止まっているように見える。

（遅い！）

残る五体のゴブリンもすぐに切り裂くと、三体のサイクロプスと距離を取った。

（サイクロプスは力が強いがその分スピードが遅い。なら対処は・・・）

琢磨はすたすたと一体のサイクロプスの前に無防備に立つ。サイクロプスは好機と片手で持っている自慢の斧を振りかぶる。もし当たれば真つ二つ。剣で受けたとしても剣は折れてしまっただろう。

だが、そんな愚を犯す琢磨ではない。

流れるような動きで斧を持つ腕を斬り落とした。

痛覚が鈍いのだろうか。サイクロプスは大した反応も見せず、残った腕で目の前の敵払い飛ばそうとする。それを読んでいた琢磨は一步身を引き、紙一重で避ける。

残る二体のサイクロプスは何も指をくわえて見ていたわけではない。琢磨の背後に移動すると、それぞれの剣と斧を振りかぶっていた。しかしそれらが琢磨に当たることはなかった。

代わりに腕を斬られたサイクロプスの肩に食い込んでいる。

腕を避けた後、背後に回り込んで態勢を崩していたサイクロプスの背中を思い切り蹴ったのだ。

力の強いサイクロプスであろうとも、自身の力で骨にまで食い込んだ武器を抜きとるのは容易なことではない。

その隙に二体のサイクロプスの首を切り飛ばした後、

地面に転がっているもう一体も同じように首筋を切りはらった。

琢磨は辺りを見渡し、他の魔物がいないことを確認すると小さく息を吐いた。

（ふう。こんなところを師匠とアシエルに見られたら、また二人に笑われるなあ。もっと精進しないと）

「・・・その旅の御方」

「誰だ!!」

「ひつ・・・す、すみません。わたしはこの街の長です」

「そうか、すまない」

琢磨は男に向けていた剣を収めると小さく謝った。

「いえ。急に出てきた私が悪いんです。それより頼みがあるのです。実は三十分程前に、避難場所から街娘が二人出て行ってしまったのです。どうか、どうか探してきてもらえませんか？」

琢磨はそれを聞いて愕然とした。今のこの街はランクCの魔物が出るほど危険なのだ。

そこに子供がいるというのだ。もしも魔物に出会ってしまったては子供の足では逃げることはかなわないだろう。

「何で出ていったんだ！？」

「そ、それが以前から仔犬と遊んでいたらしく、その仔犬を避難所へ連れて行こうとしたらしく・・・」

「周りは！？何で止めなかった！」

「当然止めましたとも！しかし周りの目を盗んで建物から出たんだと思います」

「その子達の特徴、それと向かったと思われる場所を教えてください！」

「はい。一人は長髪、もう一人は短髪の女の子です。場所はおそらく・・・」

琢磨は走っていた。長から教えてもらった場所はアシエルの向かった地域であり、ガラムと龍が戦っている場所とも近いからだ。

（どうか間に合ってくれよ！死体をさっきの人に渡したくなんてないからな！）

—————SIDEアシエル—————

アシエルもまた、瓦礫に埋もれた道を跳ねるように進んでいた。声を上げて探す琢磨とは異なり、アシエルは高い位置から取り残された人を探すことにした。

（さっきはタクマに格好悪いところ見せちゃったな。泣いてるところなんか……。それにこの前は裸も……。っは！）

ぶんぶんと首を振ってその考えを振り払い、真っ赤になった顔の熱を下げる。

その時、ふとガルムが龍と戦っている方向に変わった魔力を感じた。アシエルは、魔力感知だけは負ける、とユウが唸るほど優れていた。

（なんだろう……。属性魔法でもないし、闇……。にしては性質が違うし……。！！！）

「っ！っっ！！？」

純粹な魔力による衝撃がアシエルを貫いた。

アシエルは急いで一番高い瓦礫の上に登ると、魔力の元をたどる。そこはガルムと龍が戦っている場所だった。

「何……。あれ。闇なんて軽いものじゃない。そう、もっと危ない

もの……。お師匠様の魔法？でもあんな魔法見たことも聞いたこともない。……っが！」

アシエルは吹き飛ばされていた。

先程のような、魔力の衝撃ではない。

物理的な衝撃によるものだ。

何かに横から突進され、瓦礫の塊へと背中から突っ込んだのだ。

「っ！……がはっ、ごほっごほっ」

アシエルはひどく堰きこみながらも瓦礫の陰へと身を隠した。

そこから自分を吹き飛ばした正体を見ると、

そこには彫像のような灰色の体をし、一対の翼と一本の無骨ながらも鋭い槍も持った魔物がいた。

その魔物は四体おり、四体ともが両手で槍を構えて宙で羽ばたいている。

（……Bクラスのガーゴイル！）

アシエルは己の不注意を呪っていた。

ガーゴイルの攻撃なら平常時なら避けることもカウンターで倒すことも出来たからである。

しかし、実際には避けることも出来ずにまともに攻撃を喰らい、無様に吹っ飛んだ。

（幸いなのは槍を使った攻撃じゃなくてタックルだった。もし槍の方だったら間違いなく致命傷を負っていたわね。見てなさい！そうしなかったことを後悔させてやるんだから！……とは言っても相手は四体か、負けはしないけど厄介ね。どうやって倒そうかしら？）

アシエルは自分の装備を確かめる。

（ダガー二本とナイフ八本。それとピックが十二本か。・・・よし！）

アシエルは滑るように瓦礫から出ると同時に懷から二本のピックを左右両側のガーゴイルに投げる。ピックはそれぞれの眉間に突き刺さって墜落、絶命した。

アシエルは傍に建っている建物の壁を蹴り、ガーゴイルの背中へ飛び乗るように跳んだ。

しかし実際には飛び乗らずに空中で抜いたダガーで翼を根元から刈り取っていた。

翼を失ったガーゴイルは当然ながら地に墜ち、アシエルは落下の勢いのまま頭にダガーを突き刺した。

残る一体は猛然とアシエルへ突進とともに槍を突き出したが、アシエルは左手のダガーで槍をいなし、右手のダガーで首を斬り飛ばした。

（ふう。結構苦戦したわね。こんなところを御師匠様とタクマに見られたら笑われちゃうわね。もつともつと強くないと・・・）

アシエルはそう思いながら再び取り残された人を探し始めた。

「・・・・・・・・キャンキャン」

（・・・・え？犬かしら？一応助けなきゃ。どこから聞こえるんだろ？・・・・あれはまさか！？）

アシエルは引き攣った顔である方向を見た。そこには仔犬とともに二人の少女が尻もちをついていた。二人は呆然とした顔で空を見上げ、仔犬は威嚇を空に向かってしている。

そう、二人と一匹はガラムと龍の戦うすぐ下にいたのだ。

アシェルは走り出した。いつ彼女らが戦いに巻き込まれるかわからない。

「待っててね、すぐ助けてあげるから！擦り傷一つさせないんじゃないから！」

16 街中にて（後書き）

魔物紹介：

？龍：竜の上位種である魔物で飛行系の中では最も強い

真龍＞三大龍種（属龍種・光龍種・闇龍種）＞五龍種（^{ワイバーン}雷龍種・水龍種・炎龍種・樹龍種・地龍種）＞竜種（^{ナーガ}翼竜種・蛇竜種）

捕捉：

真龍以外の龍種は種族として複数存在し、それぞれ王族が存在する。竜種はB〜Aクラスの魔物であり、龍種はSクラス以上の魔物で個体数はかなり少ない。

？ゴブリン：集団行動をするEクラスの魔物。持つ武器は様々。

？サイクロプス：一つ目の巨人種の魔物。

捕捉：

かつて大陸に存在していた巨人族の血を引いている魔物。クラスはBだが巨人種では最も弱く、上位種にアトラス・オーガ等がいる。

？ガーゴイル：

灰色の体に一對の翼、槍を持つ。空から急襲をしてくる。

武器紹介：

ピック：

簡単に説明するならば殺傷能力の高いダーツ。斬る用ではなく、突く用の武器で特殊な場合を除いて投擲武器として使用する。

次回予告：

ガラムは光龍に勝てるのか！？

二人は少女達の救出に間に合うのか！？

次回、『それぞれの戦い』

#17（前書き）

龍の念話と魔法詠唱が供に『』で表しています。
ストーリー的にややこしくないとは思いますが、
こんがらがったならば申し訳ないです。

ガルムと光龍の戦っているすぐ近く、
少女達は絶望していた。

伝説だと思っていた龍を甘く見ていたのだ。

光龍は神の使いであり、何も悪いことはしていない自分達は大丈夫だと思っていたのだ。

だが実際はどうだろう。狙われてはいないものの周りの建物が被弾して瓦礫がすぐ近くに落ちてくる。当たって傷は負っていないものの、とても怖い目に遭っている。

やつのことで仔犬の所に辿り着いたと思って空を見上げると、そこには件の龍がいたのだ。二人の少女は腰を抜かして動けなくなってしまった。

いつもならガルムは気を利かせて別の場所で戦うのだが相手は光龍。場所を移す余裕などはなかった。その上、ガルム達は二人の少女に気付いていなかった。

それほどまでに一人と一体の戦いは壮絶であった。

あまたの数の光弾を光龍が放つと、それをガルムが消滅させる。

ガルムが不気味な色の斬撃を放つと、光龍は体をねじって避ける。

夕陽は沈み、夜の帳が降りてきていた。

互いの体力は変わらず、闘気にも変化はない。

スピードも、パワーも、集中力も、依然拮抗していた。

（はてさて、どうやって終わらすかねえ・・・）

（決まらぬな。それにしても何という闘気。こやつは本当に人間か

？)

アシエルは走っていた。

少女たちを助けるためである。

少女達との距離が残り100mを切った時、状況に変化が生じた。
生じてしまった。

少女達がようやく立ち直り、逃げようとしたのだ。

少女達の名は、長髪の方がアスホ、短髪の方はリコという名である。
クラリー王国では宗教上の理由で不思議な響きの名を持つものが多く、彼女らも同様であった。

「アスホ。に、逃げよう！」

「う、うん。マロンを早く避難所へ連れて帰る！」

アスホは横で勇敢にも光龍に威嚇している仔犬のマロンを抱えると、
避難所の方へ走りだした。

しかし、これは最もしてはいけない行動であった。

光龍が彼女たちに気が付いてしまったのである。

(む？誰だ？・・・我がプライドが許さんが、この均衡を崩すため
だ。存分に利用するでしょう)

光龍はさらに多くの光弾をガラムに放ち、その場に釘付けにする。

光龍は彼女たちに襲いかかった。

「な、何を・・・あれはっ！くそが！やらせんぞ！」

ガラムはこの時点でようやく気づき、急いで少女達を救おうと動く。しかしすでに数秒の差が出来てしまったために、追いつくのは不可能なほど距離に差があった。

光龍の爪がアスホトリコを襲う。

ガキイン

寸での所で割って入ったのは琢磨であった。抜いていた剣で爪をそらして体当たりを防いだのだ。

相手は巨体、ただの人間である琢磨がそれで無事で済むはずがない。だから吹き飛ばされるのも当然である。が、何とか踏みとどまった。

そこにガラムが降りたち、逆袈裟切りを光龍の顔めがけて放った。それは見事当たって光龍の顔を切り裂いた。

「ぐっ、貴様あ！」

光龍の高速再生も追いつかなくなっていた。傷を癒すため、光龍は大きく空へ飛びあがった。

ちょうどそこにアシエルが到着する。

「よくやったタクマ！タクマ、アシエルと共にその子供達を避難させる！」

「あの、マロンもお願いします！」

アスホはガルムに叫んでいた。

「マロン？・・・ああ、あの仔犬の事か。タクマ、頼めるか・・・む？セイ！」

ガルムは仔犬を一瞥すると琢磨に頼み、同時に剣を抜き放って飛んできた光弾を打ち消した。

ガルムは優しく笑んでアスホの頭を撫でると、真剣な目になって光龍を見つめて二人に言い放つ。

「・・・行け」

ガルムは再び光龍に飛びかかって行った。
時間を稼ぐためだ。

「行くぞ！避難所はこっちだ！」

琢磨はマロンを胸にかかえたアスホをお姫様だっこで持ち、先導する。

同様にアシエルもリコをおんぶして避難所へと走る。

「・・・俺はお前さんが直接人に被害を出しているところを見ていなかった。だから今まで手加減してきたが、今の行動で分かった、お前は敵だ。・・・死ね」

無表情にガルムは言い放つと、魔力を解き放った。

「何だこの魔力量は！貴様、やはり人ではないな！」

「人さ。普通とは少し違う・・・な」

ガルムはそう答え、右手に握る剣に魔力を流す。

すると剣は全長10m以上にまで伸びる・・・どす黒い瘴気を放ちながら。

「やはりその剣は

か！」

「さえずるな」

ガルムは剣を一閃させる。

その斬撃は光龍の8割を消滅させた。

高速再生でみるみる戻っていくものの、光龍の体は揺らめいてみた。光龍の体は魔力で出来ている。光龍とて総魔力量は有限である。しかし、これまでの戦闘で魔力のほとんどが消滅しているために体の形成すらも安定しなくなってきたのだ。その上、光弾も魔力で出来ているため、余計に魔力の消費が激しいのだ。

（くっ・・・このままではまずい。我はこんなところで死ぬわけにはいかぬ！）

光龍は身をひるがえし、街から去っていった。

そこに再び黒い斬撃が襲う。体の2割ほどが消滅する。

しかし仕留め切ることは出来なかった。

「・・・っち。逃がしたか」

魔力を収めて剣の長さを戻して鞘におさめた。魔力で紐を精製すると、再び鞘に巻き始めた。どうやら前回の紐も魔力で出来ていたらしい。

辺りを見回したガルムは頭を掻いた。

戦っていた場所の建物は全て瓦礫をも通り越して、更地になっていた。

「暴れすぎたかね、こりゃあ・・・少しフォローしておくかあ」

ガルムはどこから杖を取り出して地面に魔法陣を描き始めた。魔法陣の中心に立つと呪文を唱え始める。

『ああ・・・地神、緑神、風神、繁栄を司る神々よ。疲れ切った大地を癒す汝等の加護を大地に。光を失い希望をも見失いし哀れな者達に汝らの加護を。・・・<ヴァレイドリアル>』

その瞬間、夜の闇を一筋の光が差し込み、

その光が地面に降り立った瞬間に街中の地面が淡い光で覆われた。

瓦礫が宙に漂い集まって行く。

砂が石に、石が岩に、岩が瓦礫に、瓦礫が家へと戻って行く。

その空間だけ時間が逆行しているのだ。

地面が光るのを見て、何かと街のあちこちから人が現れる。

「家が、俺の家が戻ってる！」「おお・・・神の奇跡じゃ！」

ざわざわと街が賑わい始めた。

ガルムは素早く杖や魔法陣を片付けると適当に歩き始めた。

「さて、と。避難所予想以上に多かったなあ。あいつらはいったいどこにいるんだ？」

タッタッタッタ

「師匠。こっちです」

琢磨が手を挙げて走り寄って来た。

ガルムは琢磨に連れられて避難所へと向かった。

「おお、無事だったのか。で、どうしたんだ？何か急いでるようだが」

「ああ、実は俺達のいる避難所で怪我人が多くて・・・アシエル一人じゃ手が足りなくて」

キィ バタン

「成程、分かった。俺がやろう。アシエル？どこにいるんだ」

建物に入るとアシエルを探す。する遠くからか細い声が聞こえる。

「御師匠様、こっちです」

その声は震えていた。

（そんなにひどい怪我人がいるのか？）

少し小走りでガルムは部屋に入る。
そこでガルムは予想外の者を見る。

「っ！馬鹿！何してやがる！？」

そこにいたのは、顔を真つ青にしながら治癒魔法を唱え続けているアシエルであった。

ガルムはアシエルの肩をつかみ、向き直らせて額に手を当てた。
（魔力がほとんど残ってないな。その上この環境だ。免疫力が低下してる状態で菌でも貰ったか？魔力酔いと風邪を併発してるな。周りよりもこいつが危ねえ！）

「おい、今すぐ横になれ！」

ガルムはアシエルを毛布の上で横にさせると自らの魔力を与える。

『我が魔力を此の者に・・・』

「御師匠様・・・すみません」

「喋るな！」

「・・・はい」

次第にアシエルの顔が青色から赤色へと変わっていく。

（魔力量は戻ったな。風は回復を待つしかないか）

「ここは俺が引き継ぐからお前は寝てろ。風邪をひいてるからしっかりと治せ」

「はい、ごめんなさいです・・・」

すう すう すう

アシエルはすぐに眠ってしまった。余程疲れが溜まっていたのだろう。

ガラムはその後、残りの怪我人を全て治した。

治った怪我人たちはそれぞれガラムと寝ているアシエルにお礼を言
って、それぞれの家に帰って行った。

ガラムはアシエルを街長の妻に任せて、街長と共に執務室へと向か
った。

「・・・どうして光龍がここを襲ったのかわかるか？」

「いいえ。全く分かりませぬ」

「なあ、この街にもしかして光龍の祭具とかないか？」

「何故それを御存じなのですか？たしかにこの街には代々伝わる、
光龍の角で造られた祭剣があります」

「光龍はおそらく、その剣から発せられる魔力を感じ取ったのだろ
う。それを街の者が光龍の子供なんかを捕らえてると思い違いを
して襲いかかってきたのだろうな・・・。もし次があつたなら光龍
に説明することだな」

街長は納得したようにうなずいた。

「成程、承知しました。それをするのは街長である私の役目ですな。
今度はお助けいただき、誠にありがとうございます。少ないです
が、これをどうかお納めください」

そういつて街長の老人は袋を差し出した。
じゃらじゃらと、金属の擦り合う音がする。
袋の中身はお金なのだろう。

「それはこの街の復興に使うといい。その代わり、俺の戦い方や魔法のことは内緒にしておいてくれ。俺たちは旅をしている身だ。目立つようなことは避けたい」

「ありがとうございます。そのようなことでいいのでしたら喜んで」

街長は深く頭を下げた。

ドタドタドタドタ

「師匠！大変だ！この街をかなりの数の兵隊が包囲してる！」

琢磨のこの報告にガルムは首をかしげる。

「包囲？なんで入って来ないんだ？入って来ない理由なんてなかるうに・・・」

『街中にいる賊どもに告げる！この街は完全に包囲している。直ちに武器を捨てて投降せよ！』

街中に男の声が響いた。兵隊たちの指揮官が『拡張』の魔法で街全体に呼びかけているのだ。

「賊だと？光龍を見ていないのか？厄介な・・・」

「わたくしが誤解を解いてきましょう」

街長が出ていこうとするのをガルムは止めた。

「まってくれ。タクマ。兵士たちの装備はどんな感じだった？」

「暗くてよくわからなかったが、多分銀色の鎧で大層な槍を持っていた」

「旗はどんな紋様だった？」

「龍に乗った・・・騎士・・・だったかな？」

「神殿騎士じゃと！？馬鹿な、何で彼等がここに！？」

「確定だな。奴らはここに賊じゃなく光龍がいるのを分かって来たんだろう。しかし今はいないから、追い払った俺たちを探しているな。逃げるとするか・・・それにしても最悪の状況だな。対光龍の装備を持つ神殿騎士が街の周りを囲う程いる上に、こつちには病人がいる。しかし今拘束されるわけにはいかんしなあ・・・」

琢磨は不安そう様子でガルムに尋ねる。

「師匠。どうする？」

ガルムは眼を閉じ深く考え、眼を開いて答えを返した。

「・・・・・・脱出するぞ」

そこからの行動は早かった。

どこからか黒色のロープを出すとアシエルと琢磨に着させた。

アシエルは病人のため、ガルムが背負って建物の屋根へ上って兵士たちを見渡した。

「とてつもない量だな。タクマ。俺たちはここから北にある港街へと向かう。だがそのまま北に向かったら兵士も一緒に街を目指すだろう。だから一度西にある森に入って北へと進路を変える。見失わずに俺について来い……っていつでもこの暗さだ。これを持っておけ」

ガルムは琢磨に腕輪を渡した。琢磨は何も言わずにそれをはめる。

「それは俺の魔力を感知して俺のいる方向を示してくれる。見失ったときはその示す方向を目指せ」

「ああ、分かった」

その頃、まったく姿を現さないガルム達に部隊の指揮官はいらだっていた。

（出て来ぬか……）

「構わぬ、第一から第五部隊は街に入り賊どもを探せ！怪しい者は全員捕らえよ！行け！」

多くの兵士達が動き始める。そこへ伝令が入る。

「閣下、街の屋根に怪しい影が！」

「来たか！どっちの方角だ！」

「西の門へと向かっております」

「各門に最低限の兵を残して残りは西門へ集中させよ」

（・・・動きが早いな。指揮官は出来る男のようだな）

ガラムと琢磨は兵士たちの陣が構成される少し前に西門へとたどり着いた。

二人は颯爽と兵士たちの間をすり抜けて森の中へと入っていった。

「陣が抜けられました」

「ええい！愚か者が！敵は何人だ！顔を見た者は？」

「敵は三人。一人は怪我人の模様で、一人が背負っていました。ロブをかぶっていたのと、あまりの速さに顔を見た者はありません」

「くそ！さすがにこの暗さの中、森の搜索は出来ん。街で目撃者を探せ！」

「は」

報告に来た伝令兵は天幕から出ていった。

指揮官は部下の愚鈍さに、座っていた簡易的な椅子を蹴飛ばした。

（いったい何者なんだ？やつらは・・・）

部隊を振り切ったガラム達は一夜にして森を抜けて港街へとたどり着いていた。

琢磨は何とか付いて来たものの、息も絶え絶えだ。

ガラム達はロープを脱ぎ、街の中心部に近い宿を取ることにした。夜も遅いため店主は不審な目を向けたが、ガラムが金を見せると途端に上機嫌になった。

最も高い部屋だったからだ。ガラムは当初、アシエルだけ別の部屋にしようとしたが、三人部屋にした。

アシエルの容態は悪くなったかと思いきや、ガラムは振動をなるべく抑えて走ったため、特に変化はなかった。

琢磨は装備を外してベッドに横になるとすぐに眠った。

ガラムも窓から外を睨むように見つめると、同じように装備を外して眠ることにした。

何とか三人は神殿騎士の大部隊から逃げきったのだった。

#17（後書き）

短すぎると思ったのに書いてみるとこの長さ・・・
当初はこの5分の一ぐらいだったんだけどなあ（笑

剣の名は物語後半で明らかに！

ところで前回説明し忘れましたのでこっちで捕捉しますね。

魔法詠唱は全て『』で表します。

魔法名は全て<>で表します。

竜種についてなのですが、

ワイバーン

翼竜種：西洋のドラゴンでいわゆる翼の生えたトカゲ

ナーガ

蛇竜種：東洋のドラゴンでいわゆる翼の生えた蛇

RPGの大半が翼竜であり、中国の青龍等は蛇竜に当たります。

次回は、『休息』です。

#18 旅人達の休息

カーテンの隙間から差した光が顔を覆う。

「う、ううん・・・」

額がひんやりとする。

手を当ててみると、濡れたタオルが掛かっている。

ついさつき変えた物なのだろう。

窓の傍には椅子に座って外を眺めているガルムの姿が見える。

逆光の所為でアシエルからは顔が見えない。

体を起こしてベッドから出ようとする。

そこで気付いたが、質の高いベッドのようだ。

自分は毛布の上で寝ていたはずだがいつの間にベッドに寝かされたのだろうか。

それよりも荒れ果てた街にこんな豪華な場所があったのかとアシエルは疑問に思う。

体を起こし、壁に背を預ける。その拍子にぬれタオルが額から落ちてしまった。

ベッドの擦れる音に気がついたのか、ガルムは外を見ながら言う。

「寝てろ。まゝだ顔が赤いぞ」

言われたアシエルはようやく自分が風邪をひいているのを思い出し、いまだに体が火照っていることにも気付いた。

熱のせいで思考がおぼつかない。

「お師匠様。ここは・・・どこですか？」

ガラムはアシエルに近付いて布団を掛け直すと、濡れたタオルを額にのせなおした。

「ほら、寝てろつて。・・・昨日の事は覚えてるか？」

「・・・はい。私、魔力切れで倒れたんですよ？」

「正確には魔力切れによる酔いと風邪の併発で、だな。お前が倒れた後な、街に神殿騎士が来たんだ。一人や二人じゃない。何百人つて数がな。おそらく光龍の討伐に来たんだろうが、俺が追い払ったからな。目的を変えて俺たちを捕まえようとしたんだろ。光龍は危険なのに、それを倒した俺たちは何なんだ？って話なんだろうなあ。旅が始まったばかりなのに捕まるわけにもいかなくてな。北にあるこの港街へと逃げてきたんだ」

ガラムは椅子をベッドのそばへ持つてきて座り、肩をすくめながら答えた。

「そうなんですか・・・。追つてきませんかね？」

「そこら辺は安心しろ。最初に西の森に逃げてから方向転換してきたからな。お前は心配せずに休んでろよ。今タクマに果物やら何やらを買いに行かせてるから」

ガラムはそう言うのと再び立ち上がって机に向かい、何やら作業を始める。

戻ってきたその手にあるのはグラスに入った水と薄緑色の粉末だった。

「ほれ、薬だ。街一番の薬師に調合してもらった薬だ。回復に向か
つてると思うが一応飲んどけ」

アシエルは体を起して薬と水を受け取るとはにかんだ。

「私薬苦手なんですよ、ははは」

サラサラ

ゴクゴクゴクゴク

ゴホッ

ゴホッ

「に、苦いですね、こんなに苦いの初めてですよ」

若干涙目だ。

どうやらむせてしまい、再び口の中に味が広がったようだ。

ゴクゴク

再び水を飲むと、グラスをガルムに返した。

ガルムは薬を乗せてあった紙を捨て、部屋に備え付けの台所でグ
ラスを洗った。

手を拭き、笑いながら戻って来た。

「効能のある薬はどれも苦いもんだ。飲むのが嫌なら健康でいるん
だな」

「はい」

「……ふう。あんな馬鹿な行為をしたんだ。本当な
らお前を殴ってやりたいが、残念ながらと言っべきかお前は病人だ。」

殴るのだけは勘弁しておいてやるよ」

ガラムはため息をつき、ベッドに頬杖をついてアシエルに呟く。

「・・・お師匠様あ」

「ん〜？」

「・・・ごめんなさい」

「そう思ってるんならしっかり休んでしっかり治しなさい」

————SIDE 琢磨————

琢磨はパンや卵や果実等を市場で買い、ホテルへと帰っていた。

（潮の香りがするな、港街だから当たり前だろうけど。海なんて何年振りだろ？海魚食べたいな・・・買って行こうかな？でももう持てないか。仕方ない、そのまま帰ろう）

街全体に漂う潮の薫り。

向こうの世界ならば潮風で電化製品はすぐにダメになるのだろうが、そもそもこの世界には電化製品などは存在しない。

（そういえば、シャワーみたいに向こうに似た物がこっちにもあるのかな？）

ふと琢磨は気付いたことがあった。

辺りの店をきよきよと見て回る。

「おう、兄ちゃん。何かいるか？西海で獲れたこのファレスなんか

はどうだ？脂がのつててうまいぞ。刺身が一番だが、焼いて食べてもよしだ。1尾銅貨50枚でどうだ！」

魚屋の店主が声をかけて来る。

そんな声に隣の店主も声を割り込ませる。

「おいおい、そりやぼったくりすぎだろ！兄ちゃん、こっちは1尾銅貨30枚だ！」

「うーん、どうすつかなあ。そういえば干物売ってないよな？何でだ？」

店主は顔を合わせて互いに首をかしげる。

「何でつてそりやあ・・・。コールド冷凍エンチャントの魔法があるしなあ。確かに冷凍のく付加コールドされた携帯保存具、『魔道具』を買えない奴は干物を買うしかないだろうが、需要も少ないしなあ」

（ああ、そつか。魔法つてそんな日常的なものにまで入り込んでるんだな。確かに食糧を冷凍保存できるなら干物にする必要はないな。ならドライフルーツなんかもないだろうな）

「で、買うのかい？」

琢磨は苦笑して首を横に振る。

「悪いけど遠慮しておくよ」

店主たちは残念そうな顔もせず笑って、

「そうかいそうかい、次来た時は頼むよ」

そう言うと他の客に愛想よく声を掛けて、自分の構える店に引きずり込んでいく。

（プロだなあ）

琢磨は苦笑して泊まっている宿屋に着いた。

キイ バタン

「あれ？アシエル起きたのか？」

ガルムは本を読んでいた。

題名を見たが、見たこともない文字で書かれている。

本を閉じて机に置くと、伸びをしながら琢磨を迎えた。

「おお、帰ったか。アシエルはまた眠っちまったよ。何かいいものあったか？」

タクマは机に買ったものが入った紙袋を置くと頬を掻く。

「うーん、どうだろ？この世界の物ってよくわからないからな。とりあえずパンと卵と甘そうな果物は買ったよ」

ガラムはひとつひとつ物を袋から出してゆく。

「ハルの実と、フツの実、ナルベの実・・・おお！これはレンドの実か！いいもの買ったなあ。かなり珍しい実なんだぜ」

「へえ、そうなんだ。良い買い物したな。・・・なあ師匠、エンチャント＜付加＞って何だ？」

ガラムはハルの実を一つナイフで切り、半分を琢磨に渡す。
一口かじると、

「ん？言っエンチャントてなかったつけ？＜付加＞は人や物に魔法を付加する事だ。付加される物は様々だ。人に付加するならば『強化魔法』、剣に付加すれば『魔法剣』、道具に付加すれば『魔道具』って呼ばれる。ちなみに俺のコートのポケットも魔道具だ。ポケットの中は違う空間と繋がっていてな。かなりの量の物が入るようになってるんだ」

「だから懐からいっぱい物が出てきてたのか。その剣も？」

ガラムは紐で封印された剣を見つめる。
しかしすぐに視線を戻し、果実をかじる。

「・・・そうだな、これも魔法剣だ」

琢磨も果実をかじる。まだ青いリンゴのような酸味が口の中に広が

る。

（あ、おいしい・・・）

「そのポケットって一般的なもののなか？」

「いや、これはギルドのSクラス以上の物が持てる魔道具だ。一般の奴らが持つのは重さ軽減のポケットだけだな。この世界の金は重いから、少しでも楽になるようにギルドが広げたんだ」

「・・・俺のポケットは？」

「・・・普通だな」

「・・・何で？」

「・・・忘れてた。ちよいと待ってろ」

そう言うつとガルムは琢磨のポケットの前で複雑な印を切る。
すると立体的な魔法陣が生まれ、ポケットに吸い込まれていった。

「お前は最近Bクラスになったからな、重さ軽減の<付加>^{エンチャント}だけだ」

琢磨は試しにポケットに金の入った袋を入れてみた。

「全然違うな」

「違わなくちゃ困るけどな、はっはっは」

もぞっ

アシエルが二人の方を向いた。
目をこすり、目をしばたたく。

「タクマ・・・帰ってきてたの？」

「ん？ああ、すまん。起しちまったか。ちょうどいい、晩飯にしよう。アシエル、食べるか？」

「はい。食べられます」

夕食はガルムが作って三人一緒に食べた。
夕食後、ガルムは言った。

「明日も宿は取っておいた。一応明日も休養するでしょう。明後日以降は様子見て」

「ああ、分かった」「はい、すみません」

「謝るなよ、こういう時は『ありがとう』だろ？」

「・・・ありがとうございます」

ガルムは満足そうにうなずいた。

「うむ、それでいい。じゃあお前らいつの間にか夜も遅いし、早く寝ろよ」

そう言うとコートを羽織り、出ていこうとする。

「あれ？どこか行くのか？」

「ちよつと酒を飲みにな。最近飲んでないから飲みたくなつてなあ」

「いつてらっしゃいです」「いつてらっしゃい」

ガルスは片手を上げて答える。

「ん、いつてきます。そしておやすみ」

「おやすみなさいです」「おやすみ」

二人は言われた通り早く寝ることに決め、

ガルスは酒場へと消えていった。

#18 旅人達の休息（後書き）

潮風で電化製品が云々って書きましたけど、電化製品以外にも被害はありそうですが海辺に住んでないのでそこら辺は分かりませんでした（笑）

解説

エンチャント

<付加>について

人＋<付加>＝強化魔法

武器（例：剣）＋<付加>＝魔法剣

物＋<付加>＝魔道具

蛇足：

Q・お酒は何歳から？

A・決まってませんが倫理的に15歳です。それ未満は店主は出しません。が、何となくで飲ませようとする店主もいます。

Q・ガルムの呼んでいた本は？

A・魔法書です。魔法書は魔法について書かれた本全般を指し、読んで発動する物、ただ知識として書いてある物、補助するための物の3つがあります。ちなみに今回読んでいたのは2番目の、所謂ただの本で、古代語で書かれているために琢磨には解読できませんでした。

次回、『氷雪の大地』

山によって物理的に、雪によって精神的に閉じられた島に赴き……。

ミス削除により後日割込み投稿します。
しばらくお待ちください。

番外編 #19 慧光騎士（前篇）

ノートリオール平原の北にある、ウェルディ司教領ハーゲンの街。ウェルディ領の中でも3番目に大きいこの街は今、神殿騎士の大群に囲まれていた。

『神殿騎士』

聖王国指導者である教皇直下の騎士団の成員である彼等は、教皇の鎮座する大神殿の警備を残し、このハーゲンへと向かった。

理由は、「ハーゲンの町にて現れる光龍を討伐せよ」
何故予想の形となっているかは、世界でも教皇のみが持ちうる特殊な能力が関係する。

【預言者】 フレイクシオン

歴代教皇は全てがこの二つ名を持つ。

司教の時は預言できず、教皇になった途端に予言が可能になることから、

聖王国に伝わる何らかの秘儀ではないかと思われる。

今回もまた、教皇が光龍の出現を予言してすぐさま神殿騎士を派遣した。

討伐隊の指揮官の名はレイヴン・アーカリー。

聖王国東部に私領を置く女司教キュレル・アーカリーの三男坊である彼は、

3人いる神殿騎士団の最大幹部、『慧光騎士』けいこうの1人である。
教皇こそ使命制だが、司教や司祭はコネのために長男や長女が継ぐことがある。

しかし彼は三男の為、司教を継ぐことを早々に諦めて体を鍛えてい

た。

それが功を奏して、神殿騎士団長である【真騎士】ゴッズ・ウェルグレーにスカウトされた。

レイヴンに出世欲は無かったものの、卒無く仕事をこなしたことで、気がつけば慧光騎士へと昇格していた。

レイヴンは教皇の勅命を賜ると、

すぐさま神殿騎士500人、聖王国騎士団・歩兵団7500人の計8000人を連れて大神殿を出立した。

ノートリオール平原の中心まで来た時になってハーゲン上空に浮かぶ光龍を確認した。

光龍はガルムとの戦いによって怒り狂っていたが、それを知る者はいない。

騎士たちにはただただ光龍の神々しさに恐れおののいていた。ざわめきは伝染し、神殿騎士団までもがざわつき始めていた。

（これはまずいな。それにこの進軍速度では遅いかもしれぬ）

レイヴンは従者から自信の槍を受け取ると、それを大きく空へ掲げた。

「聞け！聖王国の戦士たちよ！」

流石の精鋭たちである。

各隊の隊長達はすぐさま部下を黙らした。

「これより作戦を開始する。リールウェル大隊長、作戦を言え！」

「はっ！」

長さ3 mを超える槍を携えた1人の男性騎士が出てきた。かなり若い男だ。

大隊長は神殿騎士100人、王国騎士・歩兵1500人を束ねている。

彼はレイヴンに一礼した後、団を向いて声を張り上げる。

「今回の最優先事項は光龍の討伐である！人民の優先は余裕があるのであれば良し、無いならばやるな！邪魔であるなら殺して道の脇に置いて良し！」

最後に言葉に神殿騎士以外がざわめく。当たり前前である。

彼等は光龍を倒して民を助けるために来たのだから。

それにもかかわらず、民を殺してまで光龍を倒すなど本末転倒もいいところである。

これを鎮めたのはレイヴンであった。

「静まれ！忘れるな！今回光龍を逃してしまつたならば、この街の民はもちろん、貴様らの故郷にいる家族全員が危険にさらされるのだ。貴様らは何のために王国に忠誠を誓つた？家族や恋人、友人や近所の者たち、会つたことも無い聖王国全員を守る為だろうが！覚悟無き者は去れ！覚悟を決めた者のみ我について来い！街に到着次第順次光龍討伐作戦に参加せよ！」

そう叫ぶとレイヴンは馬をハーゲンに向けて走らせ出した。

「全軍、俺に続けえー！」

[illegible]

レイヴンの激励が効いたのか、全員が声を上げて走り出した。

（結局、民を殺すのには変わりない。今回の作戦で犠牲になるハーゲンの民たちよ。すまんが俺たちは立ち止まる訳にはいかねえ。怨むなら怨め、しかしそれでも俺は後悔しない、悪く思うな）

レイヴンは眼を伏せ、心の中で呟いた。

そこに一頭の馬が並ぶ、先程の大隊長リールである。

「・・・大丈夫ですか？レイヴン様」

レイヴンは眼を開け、リールウェルの方は向かずに、ただ前を向く。

「ああ、大丈夫だ。心配をかけたな、リール」

「いえ、貴方様に頂いたこの命とこの名。全てはあなた様のために」

時はさかのぼって彼らが初めて出会った時

リールウェルは元々孤児であった。

生きるために中流階級を襲って得た金で過ごしていた彼は、いつものようにある男を襲った。

実はその男は内乱を企てていた組織の密偵であったのだ。

孤児の中ではかなり強かった彼であったが、

当然ただの孤児である彼が敵うはずもなく、殺される寸前であった。そこに割って入ったのが、当時まだ神殿騎士団大隊長であったレイヴンである。

レイヴンは密偵の両腕両足を切断して気絶させて捕まえた。

その男を部下に運ばせて、怪我をした彼に声をかけた。

「君、大丈夫か？」

「ああ、あんたは？」

「俺の名はレイヴン。君の名は？」

「俺に・・・孤児の殆どに名前なんて無いよ」

「そうか。すまない。・・・とりあえず、君を保護しよう」

「なんでだ？」

「さっきの男の仲間が君を見ている可能性がある。このままではいつ襲われるかもわからない」

「孤児なんてそんなもんさ、社会のゴミだから殺されても誰も気にしない」

「そんな事はないさ」

「あんたに何が分かるんだよ！なら俺を拾ってでもくれんのか！」

彼は拳を握りしめて涙を流していた。

しかし、そんな彼にレイヴンは驚くべき言葉を掛けた。

「君が本気で鍛練にのぞんで騎士になるというのなら、喜んで君を育てよう。どうする？来るか？」

「・・・あんたにそんな権限があるのか？そんなに若いのに」

「大丈夫さ。これでも俺はそこそ偉いんだぜ？それに、俺に権限が無くても君が強くなってしまえば騎士になれるだろ？」

「本当について行っているのか？それなら俺は・・・行きたい！」

「ああ、勿論だとも。それなら君の名を付けないとね。そうだな、リールウェルってのはどうだ？」

「リールウェル？」

「そうだ、意味は『雷煌^{らいこう}』。雷のように速く・強く煌めく、って意味だ。さあ、行こう」

レイヴンはこの事件で捕まえた男から組織のアジトの場所を吐き出させて、それを殲滅した。

その功績からレイヴンは慧光騎士に昇格する事になった。

リールウェルは騎士見習いとして正式にレイヴンに弟子入りし、

礼儀作法をレイヴンとレイヴンに仕える執事達に学び、

国立騎士育成学校に入学、さらには史上初めて飛び級・首席卒業した彼は、

同じく史上最年少の若さ、18歳で大隊長に就任した。

ちなみに、レイヴンは他国の貴族に相当する司教家の出であるため学校には通わなかったが、

大隊長には当時の最年少記録である31歳を大幅に下回る21歳で就任していた。

現在レイヴンは34歳、リールウェルは23歳である。

「リール、恩を感じる必要などない。お前はお前の道を進め」

「いいえ、私は一生レイヴン様について行きます、行かせてください」

「お前は……あれは何だ？」

間もなくハーゲンの町に着くという所で、黒い閃光が光龍を襲った。光龍はその攻撃を受けて北の方へと逃げ去って行った。

（何かいるのか？）

それを厳しい目で見たレイヴンは

「伝令兵！」

1人の騎馬がリールウェルとは反対側から近づく。

「はっ！」

「全軍に通達。第二大隊を南門、第三を東門、第四・五を西門で展開し、各隊それぞれ連携して街を完全包囲させよ。俺は第一大隊とともに北門にて本陣を作る。街から誰も出さず、誰も入れるな」

連絡兵は一礼し、役目を果たしに行った。

「リール！お前は一旦自分の隊を率いて北門を塞げ。俺は先に街に入る」

「了解しました。御武運を」

リールは減速して指示を出しに戻った。

レイヴンはさらに速度を上げ、単騎で街を目指す。

だんだんと街に近づくにつれて街の様子が明らかになって行く。

（馬鹿な！これは一体・・・？）

止まることなく街へ入ったレイヴンは、止まらざるを得なくなった。
街には花が咲き乱れ、街は平穏そのものであった。

しかし、そんなはずはないのだ。

つい先程まで光龍が暴れ、何かと戦っていたのだ。
平穏であるはずがない。

レイヴンは危険を感じて急いで街から出る。

そこに到着した第一大隊は副隊長の命令のもと、陣を敷く。
隊長であるリールウェルは引き返して来たレイヴンを見やると、
すぐに彼の元へと訪れた。

「レイヴン様！如何されましたか！？」

「作戦変更だ」

突然のこの言葉に事情の知らないリールウェルは疑問の声を上げる。

「は？」

レイヴンは再び伝令兵にいくつかの指示を出すと、
リールウェルとともに第一大隊へと向かう。

レイヴンは本陣の天幕に中隊長以上の者全員を集めて説明を始める。

「お前たちも見たように、光龍は去った。しかし、悪いことにあの街に賊がいることが分かった。それも、おそらく光龍と同等クラスの者たちだ。だが、安心しろ。おそらく奴らも光龍との戦闘で疲弊している筈だ。よってまずは投降を促す。しかし投降しないならば街へ入り拘束する」

恐れながら閣下、と一人の中隊長がレイヴンに尋ねる。

「どうして賊がいると御思いになったのでしょうか？」

「お前らにもすぐに分かることだろうから先に言っておく。あの街はなぜか壊れていない。わかるか？この異常が。光龍との戦闘があったにもかかわらず、花も散らず、家も壊れていない。おそらく何かの古代魔法の一種なのだろう、それもあり高度な」

「閣下。それならばその者は賊などではなく・・・」

「お前の言いたいことは分かる。だが考えてみる。そのような者たちが我々は何も知らずに国内に入り込んでいるのだ。奴らが聖王国に牙をむけばどうなるか。無論リスクもあるう。しかし、俺はリスクのある方を選んだ。異論は認めぬ、しかし何か意見はあるか？」

ありません、と全員が言う。

レイヴンは陣についても2、3の指示を出し、

「では各隊にて準備せよ。塀の上の監視も怠るな。逃げるとしたらそこからだろうからな」

隊長格全員が去った後、レイヴンは一人思考をめぐらす。

（さて、相手はどう出るのか・・・）

暫らくすると、一人の兵士が天幕に入ってきた。

「閣下。第一から第五、全ての大隊の包囲陣が完成しました」

「魔法部隊に『拡張』の魔法の準備はどうだ」

「それも既に」

「分かった。下がれ」

天幕から出ると、各兵士が敬礼をする。

「敬礼は構わん。魔法兵」

すぐにローブを着た1人の兵士が彼の前でひざまずき、1つの石を差し出す。

「閣下、このヤクシ石をお使い下さい。これに向かって話すことで街中に閣下の御声が響き渡ります」

レイヴンはヤクシ石を掴むと陣の前に出た。

彼の周りには精鋭10人と魔法部隊隊長が周りに目を光らせている。

リールウェルが無理やりつけた護衛である。

レイヴンは街にいるであろう者たちに通告する。

『街中にいる賊どもに告げる！この街は完全に包囲している。直ちに武器を捨てて投降せよ！』

そう言うのと、ヤクシ石を魔法隊隊長に返して悠然と天幕へと戻る。

「リールウェル、何かあったらすぐに伝える」

「は」

レイヴンは再び天幕に用意された椅子に座り、精神統一を始める。

天幕内はもとより、外も静かである。

しばしば兵士の着る鎧が擦れてがしゃがしゃと鳴るだけだ。あまりに動きが無いために彼はいら立っていた。

元々彼は行動派であり、じっと耐えるのは苦痛であるのだ。

（出て来ぬか・・・）

レイヴンは伝令兵を呼んだ。

「構わぬ、第一から第五部隊は街に入り賊どもを探せ！怪しい者は全員捕らえよ！行け！」

多くの兵士達が動き始める。そこへ伝令が入る。

「閣下、街の屋根に怪しい影が！」

「来たか！どっちの方角だ！」

「西の門へと向かっております」

（西門だと！？国外へ逃げるつもりか！となるとシャルベ王国の手
の者か）

「各門に最低限の兵を残して残りは西門へ集中させよ」

「陣が抜けられました！」

（馬鹿な！早すぎる！）

「ええい！愚か者が！敵は何人だ！顔を見た者は？」

「敵は3人。1人は怪我人の模様で、1人が背負っていました。ロ
ーブをかぶっていたのと、あまりの速さに顔を見た者はありません」

（3人か。2人は光龍と戦った者で、怪我しているのは魔法士で魔
力切れだろうな）

頭の中では冷静でも、言葉には冷静さを出せなかった。

「くそ！さすがにこの暗さの中、森の搜索は出来ん。街で目撃者を
探せ！」

「は」

レイヴンは第4・5大隊の失態に思わず椅子を蹴飛ばした。

（いったい何者なんだ？ やつらは・・・）

「リールウエルはいるか！？」

すぐにリールウエルが現れて膝をつく。

「ここに」

「これから街へ入る。おまえはこの場を副隊長に任せてお前も来い」

「は。他には何人入れましょう？」

「街の掌握に100人、俺とともに来るのが後5人。急いで選抜して連れて来い」

「ではこの者達を」

そう言って示したのは先程レイヴンを守っていた者の半分だ。

「誰でもかまわん。行くぞ」

「「「「「はっ！」「」「」「」

その声を張り上げ、レイヴン等7人は街へと入る。

番外編 #19 慧光騎士（前篇）（後書き）

まさかの2分割（笑

長くなつた理由は他でもありません。

リールウエルのせいです。

元々彼はモブキャラ（いわゆる兵士A）ですら無かつた人です。即興で作つたにもかかわらず愛着が半端なくありまして、過去編も作ってしまいました。

慧光騎士

神殿騎士団の最高幹部

クラスは、

真騎士＞慧光騎士＞神聖騎士＞聖騎士＞神殿騎士

騎士見習い

国立騎士育成学校生もしくは各司教・司祭出の見習いの事。

彼等は約1年かけて神殿騎士になるか王国騎士になるかを選ぶ。ちなみに、ほとんどは王国騎士を選ぶ。

理由は神殿騎士は人数が圧倒的に少なく厳しい道のりだから。

騎士の人数

真騎士 1人（人数固定）

慧光騎士 3人（人数固定）

神聖騎士 10人（人数固定）

聖騎士 15人（上限なし）

神殿騎士 多数（上限なし）

二つ名について

世間に言われるもの、国から下賜されるもの、ギルドから下賜され

るものといくつかある。

【】にて表示

人数は各国に数人いるかいないか
ギルドクラスSS以上は全員、しかしクラスAでも二つ名持ちの者はいる

次回、・・・題は今回と同じ

ガルド達が逃げた後のレイヴンの行動について
レイヴンはこの街に何があったのか知ることが出来るのか!?

番外編 #20 慧光騎士（後篇）

リールウェルと掌握兵5人を連れたレイヴンとはある家の前にいた。レイヴンは槍の代わりに装飾の施された剣を持っていた。

慧光騎士に任せられた時に教皇自らが手渡した剣である。

これには『守護』の魔法が付加エンチャントされており、

中級魔法でさえも無効化する。（魔法については後話にて紹介）装飾部分はきらびやかであるが無駄のない造りになっている。

「ここか？」

レイヴンの問いに答えたのはリールウェルである。

「は。ここが街長の屋敷です」

レイヴンは大きな門を開けて屋敷の庭に入る。

中から様子を見ていたのか一人の女性が出てきた。ふくよかな体つきをした家政婦のようだ。

「兵士様方、一体何の御用でしょうか？」

リールウェルは一步前に出て言う。

「我々は先の戦いについて街長に話を聴きに来た。街長はここにいるな？中に入らせてもらうぞ」

そう言つて女性をどけて中に入つて行こうとする。その行動に女性は慌てる。

「ちょ、ちょっと待って下さい!」

レイヴンと護衛たちは止まり、
リールウェルだけは振り向いて背中から愛槍を引き抜き、
女性の首筋に当てる。

あまりの恐怖に女性は身体をこわばらせる。

「ひっ!」

「何か後ろめたいことでもあるのか?」

「ビアンカ!構わぬ!」

一人の男性が屋敷から出てきて声を上げた。

レイヴンが後ろからリールウェルに声をかける。

「リール、槍をしまえ」

「は」

リールは槍をしまったが目つきは鋭いままである。

「神殿騎士の方々、私が街長です。どうぞ中へお入りください。ビアンカ、お茶を用意してくれ」

「は、はい!失礼します」

ビアンカという名の家政婦は一礼して屋敷へ駆けこむ。
レイヴンとリールウェルも屋敷に入ると、街長に来賓室へと案内さ

れた。

掌握兵達は屋敷の外で待たせている。

レイヴンが街長の前に座り、リールウェルがその後ろに立った。

街長は、レイヴンの無表情の威圧に冷や汗を流していた。

「そ、それで・・・何をお話すればいいのでしょうか？」

「光龍が逃げ去った理由。先程この街から逃げた者は何者か。この街は壊れていない理由の3つだ」

実際はレイヴンも大体の予想は付いている。

光龍が逃げ去ったのは誰かが追い払ったから。

追い払い逃げた者はおそらくシャルベ王国の手前者。

（理由は分らんが、王ではなくおそらく反乱分子の類だろうな）
街が壊れていないのは、その者達が何らかの古代魔法を使ったのだらう。

レイヴンは街長が震えているのに気付いた。

（脅されたかもしれんな）

ようやく街長の口が開いた。

「光龍が逃げ去ったのはとあるものが戦って追い払ったからです。しかし、彼が戦っていた場所はここから遠く、顔を見ることは出来ませんでした。そしてこの街は彼らの戦いで、確かに壊れていました。光龍が逃げ去ってすぐに地面が光り、まるで時間がさかのぼったように街の全てが元通りになったのです。・・・これが私の知る全てです」

ちょうどビアンカがお茶を持ってきた。

街長とレイヴンの前にお茶を置き、リールウェルにも渡そうとする

が、彼は断った。

「光龍と戦ったのは1人といったな。その者について分かる情報を、分かる限りでいい。話してくれ」

「は、はい。髪はおそらく暗い感じの色で、武器は剣、そして、闇魔法を使っていたと思います」

「何で闇魔法だと思った？」

「光龍が何回か黒い衝撃波のようなものを喰らっていたのです。それで闇魔法かと・・・」

レイヴンはソファアーに身を預けてしばし考える。

（嘘は言っていないだろうが、予想以上に大事な情報が少なかったな。その代わり分かったことと言えば魔法剣士であることか。街を直したのはおそらく古代魔法の一種である時魔法だろう。さらには黒い衝撃波、これもおそらく闇魔法じゃなく古代魔法の一種だろう。古代魔法を使う魔法剣士・・・絞り込めればいいが、おそらくこのクラスの者は情報を消しているだろうが厳しそうだな）

「分かった。もういい、ここにしばらく光龍の復讐を防ぐためにいくらかの兵を駐屯させてもらう」

そう一言言うと、部屋から出ていこうとする。だが、レイヴンの背中に声が掛かった。

「お待ちください。ここから交渉とさせていただきますか？」

レイヴンはため息をつく

（そう言うことが、脅されていたのか、はたまた意図して隠していたのか）

「・・・いいだろう。まずはそちらのカードを見せてもらおうか」

「光龍と戦った者の身体の特徴と弟子2人の名前です」

「交換したいカードは何だ？」

「私の娘と姪を国立修道教導院へ推薦してもらいたいです。おそらく今回の事件で私の立場では入れてやる事が出来ませんから・・・」

「それぐらいはどういうことは無い。それ以外は？」

「2人の学費の免除をお願いしたい」

「良からう。俺が教導院長に口添えをしてやる」

「ありがとうございます。それではまず・・・」

数十分後、レイヴンとリールウェルは屋敷から出て来た。

「中々良い情報を手に入れましたね」

「ああ、これで大分絞り込むことが出来る。教皇様もお喜びになるだろう」

そう話す彼等は2人の少女達とすれ違つた。

「アスホ、早くお父様の所へ行こう!」

「待つてよ、リコ」

リールウェルは振り返り少女達が街長の屋敷に入つて行くのが見える。

「あれが例の娘と姪ですかね?入学していじめられなきゃいいですけど」

「教導院はそんなにきついのか」

「レイヴン様は入つてなかったんでしたよね。普通はいじめなんかはありませんけど、おそらく修道院も大商家や貴族達が殆どです。上下意識の強い貴族たちや、商業的価値を望む商家の子供達は異質を嫌います。この街は、この国でもそここの大きさの街ですが、異質なことには変わりありません。はたして無事に卒業できるのか・・・それ以前に使える子になるんでしょうかね?」

「知るか。この国に役立つなら出自は何でもいい。乞食こじきだろうが貴族だろうがな」

「もしならなければ?」

「お前の言つたようにその教導院の奴らか国によつて死ぬだけだ」

そう言い捨てるレイヴンは足早に本陣へと歸つて行く。

本陣へ歸り、ある程度の駐屯の指示を出した後には大神殿へと歸還す

るためだ。

リールウェルは追いかけて考える。

（せめてレイヴン様に殺されることのないよう祈ってるよ。頑張れ、少女達！）

番外編 #21 赤の男と緑の少年

「…………ハルナ商連 とある孤島……………」

大陸から船に乗ること丸二日。

その孤島はジャングルのように緑があふれ、
そのまん中にはなだらかな丘を有している。

「なあおい、本当にこんな辺鄙なところにいるのか？」

「うん。ギルドからの情報じゃあ、この島の中央丘にいるらしいよ」

「情報はどこからなんだ？」

「情報班だと思うよ。民間人はこの島に近寄らないらしいし」

2人の見た目は真逆であった。

1人は燃え盛るような赤髪を持つ男。

ポケットに手を突っ込んで悠然と歩く。

それとは対照に

もう1人は映える緑髪を持つ少年。

スキップしながら進んでいく。

しかし2人にも共通する部分はあった。

まずはお互い丸腰だということ。水すら持っていなかった。

そして、異様な島の進み方である。

赤髪の男は行く道をさえぎる植物を全て燃やしつくす。

緑髪の少年は逆に植物がまるで生き物のように少年をさけていく。

そう、2人は船を下りてから目的の丘まで文字通りまっすぐ……

・進んできたのであった。

2人はこの島について初めて立ち止まっていた。

「丘はこの先だね」

少年は地図を見ながら男に続けて言った。

「で、どうするの？」

眼の前には巨大すぎる大樹が丘までの道をふさいでいた。

回り込もうにも大樹の周りは、これまた見事なほど大きな荊いばらが張り廻らされている。

「触ったら痛そうだねえ」

のほほんと少年は言った。

「関係ねえ。燃やすぞ」

ギロリ ボウッ

男は今だポケットに手を突っこんだまま、

睨んだだけで大樹とその周りの荊を燃やした。

術式・魔法名破棄という最上位の高等魔法である。

それを見て少年は御機嫌になる。

「あははっ。聞いた？聞いた？『ボウツ』だつて。おもしろ〜い」

大樹や荊が完全に燃え尽きたことで火が消えた。

「行くぞ」

「うん」

森を抜けて丘に着いた2人はとりあえず頂上に登ることにした。

「はてさて、目標の魔物はどこにいるんだろうね？」

「あれじゃないのか？」

男が顎で示した先にあるものは、黒い不気味な物体だった。

「あー、それっぽいね。近付こうか」

2人は先程と変わらない速さでゆっくりと近付く。
だんだんと魔物の姿かたちが明らかになってきた。

大きさは50m程と魔物の中でも大きい部類に入る。

形はスライム、ただし黒と紫がぐちゃぐちゃに掻き混ぜた感じ。
それに何か変な模様や異物が突き刺さっている。

魔物との距離が200mを切った所で少年が男を呼び止める。

「気持ち悪い魔物だね〜。それじゃあ貰った資料を読むね。え〜と
ねえ・・・」

『体表はスライム状。色は黒と紫色である。体は定まっておらず、

触手を伸ばして攻撃してくる。魔法攻撃は確認されていない。元の質量と触手の量の質量が一致しないために何らかの特殊能力を有している模様。確認されている中では触手の攻撃範囲は最大で50m。突き出ている人間のような頭や手足は何かは不明。体の形からスライム系統と思われるが、文献の中でも確認されていない。名称不明。クラスは被害の大きさから暫定的にクラスSとする」
・・・だつて」

「わからねえことばっかだな」

「文献にも出てないってことは完全な新種なんだね。・・・あ！」

「どうした？」

「副総裁からのメモが挟まってた」

「何て書いてあるんだ？」

『必ず滅殺して下さい。P・S・名前の案があれば命名して貰ってもかまいませんよ』

2人の目つきが変わる。

男は唇ががりあがり、
少年は眼を輝かせる。

「すごいすごい。これってぼくが命名すれば未来に名前が載るんだよね？ね？僕が決めて良い？」

「いいぜ。その代わり、パル、俺にあいつを倒させろ。お前は手を出すな」

「別にいいよ。じゃあ僕はガイルの戦いを観戦しておくね」

「それで、何かいい案があるのか？」

「うん 『ヘカトンケイル』 っていうのはどう？」

「どういう意味だ？」

「『百頭百足』 って書いて『ヘカトンケイル』 って読むの。分かりやすくいいでしょ？」

「確かにな。誰にでもわかる名前だな。・・・さて、行ってくる」

ガイルは勢いよく丘から走り降りて百頭百足ヘカトンケイルに肉薄する。
ポケットから手を出して拳に炎を纏わせ、頭の一つに殴りかかる。

パキッ ズルリ

ガイルは側にあつた他の頭を蹴って距離を取る。

笑みは崩れず、大層嬉しそうだ。

（頭はパーツの一部で痛覚は無し。スライム状の体表は衝撃を吸収するけど炎は効く）

いつの間にか背後に回り込んでいた触手がガイルを掴もうとするが、死角はない。

半回転して後ろ回し蹴りを触手の中ほどに叩きつける。

触手は弾かれて地面をバウンドした。

（触手は液状じゃなく、滑ることもない。ジパングで戦った『大王イカ』の劣化版か）

ガイルは眉をひそめる。

「弱えな。期待はずれだ」

触手は2本3本10本と増えていくが全てが体術だけで防ぐ。

「^{ずったい}図体がでかくて動けねえんだろ？身軽にしてやるよ」

殺気がガイルからほとばしり、攻撃が止む。

ガイルは50mほどまで距離を取ってポケットに手を突っ込んで、地面にかかと落としをする。

「^{イラプション}
<噴火>」

大地が震える。

^{ヘカトンケイル}百頭百足の背後の大地から溶岩が噴出し、

^{ヘカトンケイル}1000度を超える溶岩は百頭百足を溶かし尽くそうと包み込んだ。ガイルは一瞥もくれずに踵を返してパルの所へと帰る。

パルは何かに気付き、ガイルに叫ぶ。

「ガイル。まだ終わってないよ」

その言葉にガイルは振り向いて^{ヘカトンケイル}百頭百足を見る。

溶岩がおさまり煙も風で流れていく。

よく見ると、固まった溶岩がうごめいている。

パキッ　パキパキパキ

固まった溶岩にひびが入り、中から^{ヘカトンケイル}百頭百足が出てきた。大きさは先程の約半分、色や形に変化はない。

ガイルは自分の感情が高揚しているのに気付いた。
（まさか能力はそれだけじゃあないだろう？ いや、待てよ。小さくなるって事は核があるのか）

フレイムアックス
「＜炎斧・蒼＞」

魔法を唱えるとガイルの手に蒼い斧が握られていた。
柄から刃まで、全て炎で出来た斧である。

ガイルはそれを器用に使い、触手を切りながらも本体を少しずつ削っていった。

本体が5mを切った時、激しかった触手の攻撃がピタリと止まる。

これにはガイルの動きも止まる。

ブルブルと小刻みに百頭百足は震える。

（・・・何だ？）

百頭百足は動きを再開した、と思ったら触手全てが本体に戻って行った。

ガイルは変則的なその動きに本能が警鐘を鳴らす。

炎斧を霧散させて大きく距離を取る。

そこにパルも走ってやってきた。パルも何か感じたのだ。

「なにがあつたの？」

「分からん。だが何か起こることは確かだ」

震えていた百頭百足の体が急にはじけ飛んだ。
出てきたのはスライム状の身体では無かった。

そこにあつたのは、漆黒の色をした球体で、それは宙に浮いていた。

「何だあ、ありゃ？」

「さあ？」

「何でもいいか。戦ってれば・・・」

そこまで言ったガイルとパルは絶句した。

謎の球体の中からBクラスのロック鳥・ワイバーン・トロル達が現れた。

「なあ、あれって・・・」

「うん、間違いないよ。あれは空間転移の時に起きる現象だよ。つまり・・・」

一拍置いてパルは続ける。

「あの魔物はどこから転送されて来た。多分これを副総裁は知ってたんだよ。だから僕達に完全なる滅殺を依頼してきたんだ」

ガイルの表情が厳しくなる。

「・・・遊びは終わりだ。パル、手伝え。Bクラス達を殲滅、ヘカトンケイル百頭百足を滅殺する」

「わかった。いつものやつだね」

パルはその場でしゃがみ、両手を地面につける。

「『植物たちよ。あの魔物たちを束縛して』<バインド束縛・樹>」

ポコポコポコポコ

地面から荊が生えて魔物たちが捕まっ
て行く。
飛行種は高度を上げるが、それよりも速く荊は伸びる。

荊は魔物を捕まえるだけでなく、特殊な紋様を作り出す。
百頭百足ヘカトンケイル
を中心とした魔法陣だ。

「魔法陣完成 『母なる大地より生まれ出でよく幻惑花』
ダズリニアン」

魔法陣が緑色に輝き、出現したのは1つのピンク色の蕾つぼみ。
その蕾は、花開くと大量の胞子が飛び出した。
胞子を吸い込んだ魔物は同志討ちを始める。
さらに胞子は地面に着くと同時に蕾が生まれ、また胞子が飛び出す。
たったの10秒で花の数は50を超えていた。

「そろそろいいよー」

パルが振り向くと、腕を空に掲げ、その腕に小さな太陽を宿すガイルの姿があつた。

「『炎にて現れし光の柱よ。彼の者を滅せくコロナ』」

ガイルは小さな太陽を空へ放つと、2人は全速力で場を離脱する。
数秒後、空がチカリと光った。

光はだんだんと光量と大きさを増す。
空より飛来した光の柱は寸分違わず百頭百足ヘカトンケイルに当たった。

その時、世界が震えた。

数分後、その島に立つのはガイルとパルの2人だけであった。
光の柱は『コロナ』

温度は100万度近くであらゆる物を熔かし尽くす。

そんな代物がしまに直撃した結果、百頭百足は消滅し、
島は8つに別れた。^{ヘカトンケイル}

その衝撃波で幻惑花の胞子が飛び散り、島中に花が広がったのだ。
さらにコロナの炎が胞子に誘爆し、粉塵爆発を引き起こした。
今炎が出ていないのはこの島にはもう燃えるものが存在していない
からに他ならない。

フツと、2人の前に黒装束を着て黒いフードで目以外を隠した一人
の男が現れる。

男はすぐにひざまづき、

「御二方、依頼完了お疲れ様です」

「情報班か」

「あはは、今回は本当に疲れたよ。で、どうしたの？」

「新たな依頼です」

「誰からか教えてくれる？」

「副総裁からです」

ガイルはため息を吐く。

「はあ、人使いの荒い奴だぜ。場所は何？」

「クラリー―聖王国です」

#22 氷雪の大地（前書き）

旧19話。誤って削除してしまったため、
内容が結構変わってます。
申し訳ありません。

#22 氷雪の大地

クラリー聖王国の最北東、
つまりはガルディア大陸の最北東には1年中雪の降り続く場所がある。

ケーラボラス山脈

内地と外地を2つに分けるこの山脈は、
雲よりかなり高い位置に頂上があるらしい。

しかしそんなところを通らずとも外地へと抜ける道は存在する。

エマニユエル洞窟

数百年前に、世界を股に掛けた冒険家であるエマニユエルが発見した洞窟である。

3人はその洞窟で焚き火を囲んでいた。
琢磨とアシエルはなれない寒さに体を震わしていたため、
今はガルムに渡された毛布に身をくるんでいた。

ガルムは壁にもたれかかり、焚き火を調節しながらため息を吐く。

「まさか土砂崩れで洞窟が埋まってるとはなあ・・・」

ガルムのこの声に2人とも何も反応はない。
寒すぎる吹雪の中で、膝まで積もっている雪を一步一步強行してきたのだ。

もはや疲れのあまり声が出ない、いや出せないのだろう。

「耳だけ傾けてな。この世界の歴史の話をしてやろう」

ガラムは最も太い木に火が移ると、スープを作り始める。

「創世記、偉大なる者、人の言う【神】がこの世界を創造した。神は初めに空間を作り、大地・空・海を作った。そこに木々を植え、動物を生み出した。神は天使を使って人を導いてきた。約3000年前、『科学』の世界に限界を感じた神は一度世界をリセットした。その後に再び天使を使って人々に『魔法』を授けて世界の成長を見守った」

そこまで言ってアシエルがピクリと反応する。

「お前の言いたいことは分かる。今現在の通説では、突然『科学』世界が崩壊した後、【天使】と呼ばれる謎の者が人に魔法を教えて回った、って言われてる。しかし、だ。一部の古代遺跡ではそのときの記録が確かに残ってる。人智を超えた何かが襲っている、とな。それにその少し前に頭の中で神の御声を聞いたとも書かれている。これが真実なのはナバルディ教が必死になって遺跡を破壊していることから窺うことが出来る」

ガラムはグツグツと煮えてきた野菜のスープをコップにすくったところで、

2人が舟を漕いでいるのに気付いた。

「スープは明日に飲むか。もう寝な。明日は山を越えるから結構歩くからな」

2人が横になり寝息を立て始めるのを聞くと、
更に取り出した毛布を掛けた。
鍋に蓋をしたガルムは再びため息を吐く。

「神は世界で、世界は神。神より上位に神が、逆もまた然り。変わる筈のなかった世界の摂理」

ガルムは吹雪が止んだのを感じ、洞窟から出る。外は一面の銀世界。
春のないこの大地もまた、変わる事のないだろう節理。

ガルムはキツつと空を睨み付けて言い放つ。

「なあ、お前はきつと今もあんな事を続けてるんだろうな」

踵を返してガルムは洞窟内へと戻っていく。

「・・・・・・・・もう少しの辛抱だ。もう少し」

#22 氷雪の大地（後書き）

さて、新22話を執筆したわけですが、旧19話で語った内容は忘れました。

なんてこった・・・。

それでもずっとずっと、

これからもどうぞよろしくお願いします。

#23 名も無き村

「さ〜む〜い〜」

「やかましいわ！村も見えてんだから少しぐらい我慢しろ！」

「だって〜、もうすぐって思ったら寒さが余計に感じちゃって〜」

「タクマは何も思っていないんだから我慢しろ！」

（うつ・・・今「寒い」って言おうとしたのに・・・）

ガルム達3人は朝になると山を降りて村へと向かった。

目指す村は山の麓にある為、

吹雪が止んで遠くを見通せる状態になると村が見える。

現在は雪はやんでおり、朝日が雪山を照らしている。

とはいっても、今だ吹く強い風が積っている雪を巻き上げている。

その10分後、ようやく村が見えてきた。

村は家屋が10程しかなく各家の男たちが屋根から雪を落としている。

村に入ってきたガルム達3人の方へ近づいてきたのは人の良さそうな老婆だった。

「旅の御方様達、よくこのような名も無き町までいらつしやいました。お疲れでしょう？私の宿屋までお越しください。大したものを出せませんが、この村で採れた豆を使ったスープをお出ししましょう。お口に合わないかも知れませんが、それでも温まると思います」

するとガルムは一步進みで、

「それはそれはご丁寧に。ではお言葉に甘えて御邪魔させていただきましょう」

ガルムはにつこりとほほ笑むと、
3人は老婆の後について行った。

老婆の家は宿屋らしく、ついでに2、3日の宿をここで取ることにした。

利用者がいないからということで、
一人一部屋を与えられてそれぞれの荷物を自分の部屋に置く。
1階におりるといいかおりが漂っていた。

3人は囲炉裏を囲んで席に着くと、
3人の前に豆のスープの入ったカップが置かれた。

「あ、おいしい」「うまいな」「噂通りうまいなあ」

「たくさんありますから、いくらでもおかわりを言って下さいね？」

老婆はスープの入った鍋をかきまぜながら笑顔で3人に言った。
しかしガルムは1人立ち上がって老婆に言う。

「おいしいスープを1杯で済ますのは悪いですが、すみませんが頼みがあるのですが」

「はて、なんでしょう？この老いばれに出来ることならなんでもいたしますよ」

「実は私はこの村の村長に御挨拶したいのですが、案内してもらえませんか？」

不思議そうな顔で、ガルムの頼みを聞いた老婆は頷くと

「そんなことなら私の孫に行かせましょう。おい、ミア、来なさいな！」

老婆が台所の方へ自らの孫を呼ぶ。

すると店の奥から元気な声とともに10歳ぐらいの1人の少女が出てきた。

「なーに？おばあちゃん」

老婆は孫娘の肩を抱いてガルムに向き直る。

「この娘は孫娘のミアです。ミア、この旅人さんを長老様の所へ案内して差し上げて」

「はい。じゃあ防寒具とってくるね。少し待っててね、旅人さん」

とてととミアは店の裏へと戻って行った。

「お前らは温まるまでスープを飲ませてもらいなさい。その後は部屋で休むなり村を見て回るなり好きにきなさい」

「ああ、分かった」「はい、わかりました・・・あちっ！」

ガルムは呆れた様子でアシエルを見る。

「おいおい、気を付けて飲めよ。うまい物はうまく飲まなきゃ失礼だぞ」

「わかってますよ」

「すみませ〜ん、遅くなりました」

再び3人の前に現れたミアはふつくらとしていた、着こみ過ぎて。

（（何枚来てるんだろ？）（））

「別にかまわないよ。じゃあ案内してくれるかな？」

「はい。おばあちゃん、いってきま〜す」

「はいはい、気を付けて行ってらっしゃい」

—————SIDEガルド—————

「ここですよー」

ミアに連れられたガルドが着いたのは、大昔の大樹の幹を使ったのだろうか。

先のない大樹にドアや窓が埋め込まれている。

「長老様ー。お客様ですよー」

ミアはきちんとノックをして中に呼びかける。

「ミアかい？どうぞ中へお連れしなさい」

ミアの呼びかけに応じたのは男の声だ。

中は緑色の糸で編んだ絨毯で敷き詰められた部屋で、壁には所狭しと本棚が並んでいた。

それらの本は全て古文書であり、現代語で書かれた本はガルムがざっと見た限りはなかった。

部屋の真ん中に座布団を敷き、豆のスープを飲んでいるのは一人の老人であった。

頭の髪は雪のように真っ白で、あごに蓄えた立派なひげもまた真っ白である。

老人はガルムの眼光に気付いたのか、ミアに言う。

「ミア、旅人殿の案内をありがとう。その机にお菓子があるから持って帰りなさい」

ミアは顔を輝かせてお菓子を取った。

「長老様、ありがとう！さようなら」

「さようなら」

ミアは嬉しそうに宿へと帰って行った。

それを長老は笑顔で見送ると、真面目な顔でガルムの方を向いた。

「さて、旅人殿。この老骨に何用ですかの？」

ガルムもまた、真面目な顔で長老に言った。

「この村の地下倉庫にある禁書を閲覧、持ち出しをさせて頂きたい」
この言葉に長老は眼を見開いて立ち上がった。

「何を馬鹿なことを！貴殿は本気でそのようなことを言っておるのか！」

それに対してガルムも立ち上がり、冷静に言い返す。

「もちろん本気です」

「禁書と言うのはそ」そもそも・・・」

怒り狂う長老の言葉にガルムは言葉を重ねる。

「そもそも禁書とは、世に出すと国1つが滅びる程の知識や魔法が書かれた本。現在では存在すら明らかにしてはいけない本の事だな。それを昔の世界の上層部たちは殆どの本を焼却。焼却できない物や、未来に必要な物は焼却せずにあまたもの封印を施して信用できる場所に隠し置いた。・・・それが可能ならば2度と使われないことを祈りながら」

長老は落ち着きため息をついて尋ねる。

「そこまで知っておってなぜそんなことを言う。我ら守護の長寿族は何代も前から地下書庫の本を守り通してきた。そしてただ1人も書庫に入れたことはない。それはこれからも、だ」

「それは俺もよく知ってるさ。だが、その開かずの扉を開いてもらいたい。俺が求める本はただ一冊」

ガラムは一拍置いてから言った。

「『ドレア・ナクス・ラタイ』」

再び長老は眼を見開く。

「何故その本の名を知っておる！？その本は我しか存在を知らない本。いや、それよりもそれをどうする気じゃ？それを使える者なんぞおらんわ！」

ガラムは首を横に振る。

「いいや、俺は1人知ってる。あなたも知っているだろう人物だろう」

「いったい誰じゃ？」

「『ルマチア』ハイダス』」

「ルマチア・・・村はずれにいるエルフの事か。いったい何者なんじゃ、奴は」

「あいつはエルフはエルフでも特別な種だ。古代種『エルフィオス』本の守護族であるこの村の長のお前なら知ってるだろう？」

「ま、まさか・・・あの！？あの『エルフィオス』なのか！？」

「ああ、間違いない」

「そ、そうだったのか。あやつが……。いや、あの方が……。それならば確かにあの魔法を成功させることも可能かもしれん。じやがなぜあの本を必要とする。あれは確かに禁書の1つだが、そなたが手にしても何の得にもなるまい。そなたの様子を見るに、どこかの国の者でもなさそうだし」

ガルムは窓から外を見る。つられて長老も見る。

そこには村の子供たちの面倒を見ている琢磨とアシエルの姿があった。

そこには先程ガルムを案内していたミアの姿も見える。

突然アシエルの背中に子供が飛び乗り、アシエルは背中から雪に倒れた。

そして怒ったアシエルはその子供を追い掛け回す。

その様子を見たガルムは笑みをこぼすが、すぐに顔を引き締める。

「俺がその本を欲する理由は……」

ガルムと長老は長い長い階段を下りていた。
地下書庫へと降りるための階段で、部屋全体に転移魔法陣が描かれていた。

それを使った先には暗く長い階段があつたのである。
結局長老はガルムの書庫入りを許したのであつた。

かなり長く下り続けた後、2人は書庫へとたどり着いた。
ガルムはあたりを見渡し呟いた。

「意外と少ないんだな。何冊ぐらいあるんだ？」

「およそ200冊だ。・・・御主の望む書物はこの先だ」

ガルムは首をかしげる。

「ここにはないのか？」

「あの本を含めた5冊の存在を知るのは世界中探しても我1人のみだ」

「伝説級の魔導書か・・・」
レジェンド

「やはり知っていたか。その通りだ」

長老はとある壁の前で、
ガルムでさえも見えない程の素早さで印を切り、呪文スベルを唱える。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

目の前の壁が横にスライドし、空間に張つてあつた防御用の魔法陣がすべて消えた。

（結界の解除をするには魔極師が数人は必要だな。これが今まで魔

導書を守護出来ていた秘密か)

ガルムは納得したように考えていた。

封印の先にはガラスケースに入った、5つの魔導書が丁寧に置かれてあった。

そして長老はあるケースの傍で再び印を切って封印を解き始める。それを見たガルムは目を丸くした。

(おいおい、まだ封印があるのかよ。それに今回の魔法はさっきよりも格段に難解な封印だし)

長老が印を切り終わると、

ケースを中心に展開していた立体魔法陣が霧散した。

長老はケースを外し、丁寧に魔導書を手に取る。

そしてガルムに手渡す。

「これこそが『ドレア・ナクス・ラタイ』じゃ。おそらくアレ(・・・)を発動したらこの魔導書に内包されている魔力は全て解放されるじゃろうから、其方で処分しておいてくれ」

ガルムは神妙な顔で魔導書を亜空間に転移させて言葉を返す。

「ああ、俺が責任を持って処分しよう。もちろん、破片すら残さずに」

2人は長老の部屋へと帰って来た。

「じゃあ俺はこれで失礼するよ」

ガルムは扉を開け、体の半分を外に出したところで止まった。
長老が声をかけたからだ。

「大事なことを忘れておった。御主は何者なのだ？」

ガルムの口がニヤリとつりあがる。
そしてガルムは一言つぶやいた。

「『エルバ・リル・ウーゼ』」

そう言うときガルムは長老の家を出ていった。

ガルムの去った後、俯いていた長老が震える。

「ふ、ふふ、ふふふふふ、ははははははは、はーはっはっはっは」

突然長老は笑い声を上げる。

「成程。『エルバ・リル・ウーゼ』か。それでか！それでなのか！
ようやく納得がいった！祝福されし者にして呪われし者。光り輝く
者にして闇に沈みし者。しかし、それを逃れる術すべを手に入れてなお、
逃れはしないか！絶対の強者、ガルムⅡグランベルツ。その名を我
が一族の歴史に刻もう！」

長老はそれからもずっと笑い続けていた・・・。

#23 名も無き村（後書き）

『ドレア・ナクス・ラタイ』

『エルフィオス』

『エルバ・リル・ウーゼ』

の3つは全て古代語です。

一つ目はすぐに明らかにする予定です。

#24 隠者

村に着いて2日目

ガラム達3人は、ガラムの古い知り合いのもとを訪ねていた。

琢磨とアシエルは、村で買ったフード付きの防寒具を着ている。それでも豪雪の中の寒さは完全には防げずに震えている。

それに対してガラムは「……………村に来るまでと同じ装備だった。」

それでも全く振るえずに雪の振り積もる中を軽々と歩いて行く。

知り合いの名は『ルマチア』

村の古代魔法書を何とか閲覧するために、

村近くの洞窟で20年を過ごしてきた隠者。

村から歩き続けること1時間、

3人はようやくルマチアの住む洞窟へとたどり着いた。

「……………本当にここに師匠の昔の知り合いが住んでるのか？」

琢磨がそう尋ねるのも無理はない。

一目見ただけではただの洞穴にしか見えず、

その上、一步入るとクラスCの氷吸血蝙蝠アイシクルスバット（地域特定変異種）が襲いかかってきたからだ。

吸血蝙蝠は一体一体はゴブリンにも劣る。

何故そうにもかかわらずクラスCなのかというと、集団で襲いかかってくるからである。

しかし、集団行動する魔物は普通、クラスが上がるとしても1ランクだけだ。

これにも理由があり、吸血蝙蝠はその集団というのがとてつもない量なのだ。

一集団でおよそ500匹、ひどい場合では1500匹をも超える。

「たかだか氷吸血蝙蝠ぐらいなんともなるさ。ほら行くぞ」

ガルムはそう言い切ると、洞窟の奥へと進んでいく。
しばらくすると、行き止まりになった。

いや、そこには1つのドアと1つの窓が壁に埋め込まれていた。

ガルムは躊躇なくドアをノックする。

コンコン

「おーい、ルマチア〜。来てやったぞ〜、開ける〜」

・・・・・・・・・・・・・・・・

ガルムは静かに拳を握る。

ゴンゴンゴンゴン

「お、おーい。ルマチマー。開ける」

だんだんと声が大きくなる。

・・・・・・・・・・・・・・・・

カチャリ シャー

拳を開くとそのまま腰の剣に手を掛け、問答無用で剣を抜き、上段に構えた。

「はい！どちら様ですかー・・・つとお！！??」

出て来た青年は正面から振り降ろされるのを見て驚きの声を上げた。それでもこんな地に住んでいるだけあって、何とか避けることに成功した。

しかしガルムの放った一閃はそれだけでは終わらなかった。

斬撃が家の中にまで飛び、ルマチアの家（もとい洞窟）を真つ二つにしていた。あまりの威力に琢磨とアシエルはポカンと口を大きく空けて立ち尽くしている

ルマチアは家を背にしているために気付いていない。

「ガルムさん！あなた何をしていたらっしやるんですか!？」

「斬った」

「『斬った』じゃないでしょ！別にそんなことは聞いていません！殺そうとしたことに対して何かありませんか？あるでしょう？ありますよね？」

「あるな。さつさと出るよ、馬鹿が。おかげで罪もないお前の家を真つ二つにしちまったじゃねえか」

「は？何を言って・・・な、なんですかこれはあ!？」

ガルムの言葉に後ろを見たルマチアは呆然とした。数秒間灰になっていたものの、突然はつと我に帰ると急いで家の中に走って行く。

悠然とガルムも家の中へと足を踏み入れる。

それに琢磨とアシエルは付いて中に入って行った。

家の中は予想以上に広がった。

しかしそれ以上に・・・本が多かった。

部屋のいたるところに天井まで本が積み上げられている。

足場は何かあるものの、家具の上のほとんどは本で埋め尽くされていた。

ガルムはソファーの上の本を床に放り投げると、どっかりと座った。ルマチアは諦めたのか無言で拾って部屋の隅へと本を固めていく。

片付け終わると、慚然とした様子で向かいのソファーへと座る。

琢磨はルマチアを改めて見てみる。

ルマチアは家の中だというのにすっぱりとフードをかぶっている。

顔は普通に見えるものの違和感はぬぐえない。

街中ですれ違えば10人中10人は振り向くであろう顔立ちであった。

格好いい、が、それだけではない。何か他とは違う雰囲気を出していた。

「そうふてくされるな。ほら、これは土産だ」

そう言っただけでガルムが投げ渡したのは一冊の本である。

「お、おおおおおお。こ、これは328年前にクラーリ―聖王

国の第3代魔法院長の書いた『ラグ・アリエ』じゃないですか！！
いいんですか！？」

「土産だつただろ。好きにしるよ」

ルマチアはその本を慎重に机に置くと、ぱつと立ち上がった。

「飲み物持ってきますね。どうぞくつろいでて下さい！」

そのあらかさまな態度の変化にガルムは失笑、琢磨とアシエルは茫然である。

「気にすんな。本の事で一喜一憂するのはあいつの特徴だ。気にしてたら疲れんぞぉ」

「なあ師匠。この間に教えてほしいことがあるんだけど・・・」

「ん？なんだ？言ってみな」

「魔精石について教えてほしいんだけど」

「いいぞ。魔精石は・・・あ・・・何だ？簡単に言ったら魔力の籠った石の事で、通称は魔石だ。普通にある石が大気中や地面にしみ込んでる魔力を少しずつ吸収して出来る。魔石で問われるのは大きさよりも純度でな。この家程のよりも小指ほどの大きさの方が大量の魔力を含んでることだってままあるんだ。魔力が多すぎると触媒である石は融解して魔力の塊になる。それを『純石』って呼ぶ。・・・ここまででは良いか？」

「量より質で、見掛けに騙されるなっということか。で、特別魔力量が

多いのが『純石』？」

「大丈夫みたいだな・・・後は・・・何かあるかな？」

「宝玉の事を話せばいいんじゃないですか？」

ルマチアが盆を手に戻ってきて、提案をした。

二つのコップを琢磨とアシエルの前に置いて、ガルムの前には1本の大きな瓶とグラスを置いた。

「体の温まる飲み物です。ジパングの知り合いから貰った植物で作ったもので・・・ええと、なんだったかな。そうだ、『シヨウガ湯』だ。熱いのでやけどしないよう気を付けて下さいね。で、ガルムさんは村で作られているお酒です。何でも豆で作ったお酒だとか」

ガルムはグラスには注がずに瓶でそのまま飲んだ。

ゴクゴクゴクゴク ぷはあっ

「豆かぁ。シャルベ王国の南東の町でも似たようなのを飲んだな。でもこっちの方は何か言い表せないうまさがある。何が違うんだ？」

「それは多分、この村のお酒は豆をブレンドしているそうですよ」

「混ぜるのか。出来た物を混ぜるのは時々あるが・・・。成程、その発想はなかったな」

「しょうが湯の御味はどうですか？」

「不思議な味がします。おいしくなくはないですけど、私はちょっ

と……。すみません」

「いえいえ、かまいませんよ。私も最初はそうでしたから。タクマさんはどうですか？」

「すごくおいしいです。熱さもちょうどよくて……」

「それは良かった。さて、講義の続きと行きますか」

ガラムはグビグビと酒をあおるように飲んでいたが、ようやくその手を止めて

「あ？……ああ。『宝玉』についてだったな。宝玉は8種類あつてな……

まず、

『ペリドット』が『雷』を、

『アクアマリン』が『水』を、

『ルビー』が『炎』を、

『エメラルド』が『樹』を、

『ジルコン』が『土』を宿す

次に、

『ダイヤモンド』が『光』を、

『オブシディアン』が『闇』を宿す

最後に……。これは例外だが、

『オリハルコン』が『天空（風）』を宿す

オリハルコンを除くこれら7つの宝石は、

蓄積した魔力を自然にそれぞれの魔法属性へと変化させる。

どれぐらいかつーと、

普通の魔石は魔法のランクを1段階上げるんだが、

宝玉はランクを2段階上げるんだ」

「そうですねえ。一番低い魔法、炎にしますか。直径30cmにしましょう。それを魔石を使って同じ魔法を発動させると、直径が1mぐらいになります。これと同じことを宝玉、この場合は炎なので・・・なんですか？タクマさん」

ガルの説明に補足と例を付けくわえたルマチアが、琢磨に尋ねる。

「ええっと、ルビー・・・だっけ？」

その言葉にルマチアは軽くうなずき、

「正解です。ルビーを使って発動すると、何と直径が5mをも超えます」

「そんなに！？」

「ああ、そんなにだ。ちなみにオリハルコンが例外なのは、基本的にオリハルコンはどんな属性でも変換する。しかし、『天空』属性の変換だけがずば抜けて高いんだ・・・こんなもんか？」

「こんなものですねえ」

「だそうだ、分かったか。タクマ」

「ああ、分かった。ありがとう」

「ふう、久々に講義なんてしましたね。では次の話へと移りましょう」

自らも飲んでいたシヨウガ湯をコトりと机に置くと、

「私のもとへ何の御用ですか？こんな本も持って・・・」

ガラムはルマチアの言葉を軽く流して、

「別にこの本は本当にただの土産だ。ただ、な」

言ったん言葉を切り、姿勢はそのままにルマチアと真剣な眼差しを交わして、

「『ルマチア』アル『エルフィオス』の力を俺に貸せ」

そう言ってガラムは空間魔法を使って空中から一冊の本を取り出した。

それは、昨日ガラムが村の守護族の長老を説得して譲り受けたものであった。

すつ。ガラムは机でその本を滑らせてルマチアへと渡す。

手に取ったルマチアは先程のような喜びをも出さず、淡々と本のページをめくり始める。

パラパラ　パチパチパチッ　カシャ

部屋には本をめくる音、暖炉の火がはじける音、薪が崩れる音しかなかった。

パタン

パラパラ

パラパラ

パラ

ルマチアは本を読み終わると机に置いて、息を吐いた。

「ふう。一応軽く読み流しましたが・・・ガルムさん」

「・・・」

「・・・正気ですか？」

「・・・お前は今の俺をどう見る？」

「・・・分かりました。お手伝いをさせていただきましょ。う。そうすると、やはり彼は・・・」

「気付いていたのか？」

「名前を聞いてもしや、と思いましたが」

そう言つてルマチアは琢磨を見る。

琢磨は2人の言っている意味が分からず、

ガルムとルマチアの顔をきよきよと見ている。

ルマチアは依然厳しい顔をしたまま、

「彼には・・・タクマさんにはもうお話になったの？」

ガルムは小さく首を横に振る。

「まずはお前の了承を、と思つてな。・・・なあタクマ」

ガルムは落着きのなくなった琢磨の顔を、頭をつかんで無理やり自分の方へ向けさせる。

「お前は以前言っただよな？向こうの世界に戻るつもりはないと。戻る気は無いけれども、何も言わずに出てきたから自分の覚悟を唯一の親族である祖父に伝えたいと。おまえはそう言ったな？今もその思いは変わらないか？」

「あ、ああ。じいちゃんはずっと心配してると思う。だけど俺は戻るつもりはないから、じいちゃんにちゃんと、ちゃんと言っておきたいんだ。俺は元気でやるって！俺は自分でこっちにいることに決めたんだ！って。だから……」

「……ふう。だそうだ、ルマチア」

「そこまでなのですか」

ガルムは机の上に置いてある本を手に取り、琢磨に手渡す。琢磨はパラパラと眺めて見るが、眉をひそめるばかりだ。全て古代語で書かれているために何も分からないからである。ガルムは琢磨に対してゆっくりと言葉を紡いでいく。

「その本の名は『ドレア・ナクス・ラタイ』魔法がこの大陸に伝わるはるか前から存在する、機工時代よりもまだ昔、超魔法時代の本だ。それを現代語に訳すと……」

ガルムは一拍置き、言い放つ。

「『異世界の門』」

琢磨は何を言っているのか理解できないのか、
理解しても信じられないのか曖昧に繰り返す。

「いせかいの・・・もん」

「そうだ。その『門』はこの世界とお前の住んでいた世界をつなぐ
ものだ。その門を俺とルマチアが作りだしてやる。その門を開き、
じいさんとの再会を果たすために！！」

#24 隠者（後書き）

『宝玉』について

調べるだけで1時間以上かかりました・・・

色々考えて設定しましたが、もはや全然覚えていなかったので選定法だけを書くことにいたします。

例1：色

青やら赤やらの色に輝く物を選びました。

例2：洋名

その名の通り、カタカナ語で表記されている物の名で選びました。

例3：和名

漢字で表現され、属性をイメージできるものを選びました。

もちろん覚える必要はないです。

私自身『オブディシアン』とか初めて聞きましたしね（笑

『シヨウガ湯』について。

シヨウガ湯好きの方々すいません。

私は生姜は苦手のためシヨウガ湯のおいしさが表現できませんでした。

全く飲まないんです。シヨウガ湯。

体にいいのは知っているんですが、どうも体が受け付けません（笑

『超魔法時代』について

機工時代よりもはるか昔の時代。

『大陸時代』（今の時代）を平成とするならば、
『機工時代』は・・・昭和〜縄文ぐらい
『超魔法時代』は・・・紀元前うん十世紀以前、のようなものです。
簡単に言うなら、存在すら明らかになっていない全く未知の時代の
事です。

#25（前書き）

最後の方にちょっと下ネタが入ってます（R12程度ですが）

閲覧には気を付けて下さい。

意味がわからないんですが、って方。

世の中には知らなくてもいいことだってあるんですよ、特に大人の
世界には。

25

「で、『門』を開けるわけだが・・・なあルマチア、一体何がいるんだ？」

「あれ？ガルムさん本読んで無いんですか？」

「読んだんだが、訛^{なま}りがひどくてな。まともに読めなかった」

ガルムは眉をひそめてそう答える。

「ふむ、そう言えば南部訛^{なま}りがひどかったですね。私はもともと南部出身なので普通に読めました・・・成程、盲点でした。ガルムさんは出身は中央でしたっけ？」

「・・・ああ」

「それで『門』の開放魔法陣に必要なものですが・・・」

ルマチアは言葉を濁す。

「ん？どうした？何がいるんだ？」

「必要な素材は・・・五大龍の角と五属の宝玉です・・・」

ルマチアは申し訳なさそうに言った。
ガルムの顔はその言葉に引き攣^つった。

「そりゃあ、また・・・何か代用できないのか？」

「五大龍の角は、五大竜の角でも代用できます」

「じゃあそれでいいじゃん」

「しかし、成功率は三割を切ります」

ガルムは額に手をあててため息を吐く。

「はあ……。それで、龍の角を使った場合の成功率はどの位だ？」

「九割は難^{かた}いです」

「じゃあそれでやるしかないかあ」

「『ストック』はまだ有りますか？」

「あー……。探してみなきゃ分かんねえな。ちょっと待ってくれ」

そう言うつとガルムは小さく何かを呟き始める。

「~~~~~」

するとガルムの胸の前の空間がゆがむ。

そこにガルムは手をつっ込んで何かを探し始める。

「お……。1個目発見。……。2個目、3個目、4個目……。
……。5個目、つと。よし！全部あつたぞ！」

ガルムがポンポンと空間から取り出したのは色とりどりの龍の角だ

った。

龍の角は、1つで1等地に城が建つ、と言われるほどの代物である。龍の角の粉を煎じて飲めば不老不死になる、ともよく言ったものだが実際にはそんな効果はない。

（ま、ほとんどの病気は治るけどな）

「はあ。ストックもこれで最後だな。路銀なくなったらどうしょ・・」

ルマチアは不思議そうに、

「どうしよって、ガルムさんならすぐに稼げるでしょ」

「あ？何で働かなくちゃいけないんだよ。これがあれば1個で10年は旅を続けられるんだぜ？」

その言葉にルマチアは呆れる。

「仮にもガルムさんはプラチナクラスの冒険者なんですから、危険度の高い依頼をこなして下さいよ」

「仮じゃねえよ。実力だよ」

苦笑してガルムは返す。

そしてその間にもガルムは異空間から宝玉を取り出していた。ペリドットにジルコン、エメラルドにルビーが机に転がっている。

「ここの机にあるもの全部売ったら10世代ぐらいは遊んで暮らせますねー」

「物価が変わらなきゃな。……うゝむ、やっぱりアクアマリンだ
けないな。ルマチア持つてるか？」

ルマチアは首を横に振る。

「残念ながら。最近使ってしまいました」

「へえ。お前が魔法を使うのは珍しいな。何に使ったんだ？」

「実はかなり大規模の雪崩が起きかけまして……。更に悪いこと
に村の方角だったのでアクアマリンを使って止めたんです」

「それを村の奴らに言わないところがお前らしいよな。言ったら村
の地下書庫に入れて貰えたかもしれんに……」

「地下書庫に入るのには、そう言うのは無しで、交渉だけで入ると
決めたんです」

その時、蚊帳の外だった琢磨が横から尋ねる。

「師匠、地下書庫って何だ？」

ガルムは全てを伝えるかを悩んだが、
すぐに面倒くさくなったのか。

「あゝ……何だ？……えゝ……お前には知る必要のないこと
だな」

（面倒になりましたね。教えるのが）

ガルムは堂々と話題を元に戻すことに決めた。

「それはそうと困ったな。アクアマリンがとれるのはシャルベ王国だし、今から取りに行くのもなあ……。かといってここにはないだろうし……。どうすつかねえ」

「本当にここにないか、この主に聞いたらどうですか？」

「主？あの村の長老の事か？」

「いえ。もつと上の方です」

「教皇か？」

「いえいえいえ。もつともつと上の方です」

「誰だ？全く分からん」

「氷の精霊王です」

「精霊王？氷のか？そんなのいるのか？初めて聞いたぞ」

「もともとここから動かない方ですからねえ。私はこの山脈の地下にアクアマリンがあると思うんですよ。それを聞いたらいいいじゃないかと思ひまして」

「良い案だと思ひが……。居場所はわかるのか？」

「はい。ガルムさんたちはどこを通過つてこの村へやってきましたか？」

ガラムは懷から地図を取り出して広げて山脈の左端、クラーリ―聖王国の北側の海と山脈が触れ合う所を指差した。

「ここのファーニイ海岸沿いからだな」

「このルートの頂は標高2000mぐらいでしたね。この山脈の最上部、つまり標高8000mの山頂には、氷の精霊王を祀る祭壇があるんです。そこに行けば会えるかと」

「場所はわかるか？」

「はい、ですから私が案内しましょう」

「頼む」

「いえいえ、では準備してきますね。・・・これらはどうしましうう？」

ルマチアは机に散らばった角と宝玉を見る。

「また異空間になおしとくさ、一ヶ所に固めてな」

お願いします、とガラムに一言言つと、ルマチアは装備を取りに行った。

「おいタクマ、アシエル。お前らは装備の確認をしとけよ。氷吸血蝙蝠切つてたる？武器が欠けてないかとか丁寧に見ておけ」

その言葉にタクマは剣を、アシエルはダガ とナイフを丁寧に見る。そして刃こぼれしている所は砥ぐか入念に場所を確認しておく。

使う際に力の加え方を変えるためである。

しばらくして、ルマチアは戻ってきた。

ルマチアは若草色の法衣を身にまとい、

同じく若草色の帽子をかぶっていた。

そんなルマチアを、何故か琢磨は見入っていた。

視線を感じたルマチアは、

「あれ？どこかおかしいですか？」

「いんや、俺が見るにどこもおかしくないぜ？」

「み・・・」

「「み？」」

ガルムとルマチアは口をそろえて頭の上に『？』を浮かべる。

「耳が・・・長い・・・」

そう。ルマチアの耳は長かった。

たまに耳の長い人はいるが、それとは比べ物にならなかった。

その言葉に納得したのか、ルマチアは何度もうなずいていた。

「ああ、タクマさんは『エルフ』を見るのは初めてですか？」

ようやくガルムも納得したのか、

「そう言えばこの半年、エルフを見かけなかったな。だからルマチアの耳を見て驚いたのか」

「あ、ああ。そうか、この世界には『エルフ』がいるんだったな、忘れてた」

琢磨は心を落ち着けて、再びルマチアを見つめる。

（耳が長いだけで、別に普通の人と何も変わらないな・・・）

ニヤニヤしながらガルムは茶々を入れる。

「おいおい、タクマ。そんなに熱い視線をくれてやるなよ。ルマチアもお年頃なんだからよ」

「え？あ？ち、違っ！・・・す、すみません」

タクマは顔を真っ赤にして反論しようとし、ルマチアに謝った。アシエルはそんな琢磨を射殺さんとはかりに睨みつけている。

（ん？何でアシエルはタクマに殺気放ってた？喧嘩でもしてんのかな？）

ガルムは今の状況よりもそっちのほうに気がいていた。

しかしアシエルはすぐに殺気を収め、

「え！？ルマチアさんって女の方だったんですか？？」

と、何事もなかったかのようにルマチアに尋ねた。
当のルマチアはその茶々に、肩を揺らして震えている。

どうやらツボに入っただけらしい。

「ふふふふふふ。い、いえ。私は真正銘『男』ですよ。それにエルフ族は長命なんです。見掛けと実年齢は合いませんよ。実際私も見掛けは若いですが、もう200年は生きてます。で、ですから、気にする必要はありませんよ・・・ふ、ふふふふふふ」

どうやら説明してる最中にまた笑いが込み上げて来たようだ。

タクマはバツと顔を上げて恨めしそうにガルムを睨みつける。
睨みつけられたガルムはやれやれといった感じで肩をすくめる。

「おいおい、そんなに睨むなよ」。軽い冗談じゃねえか。おい、ルマチア。そろそろ出発しようぜ」

「は、はい。では行きましょうか」

ルマチアは砂を掛けて暖炉の火を消し、扉に鍵を掛けた。

「こんな場所に来る人はいないんですけどね。この家には結構危ない本も多いので念のためです」

ルマチアはそっぴいながらボタンのついたポケットに鍵を入れ、洞窟を抜けて頂上へ向けて歩き始める。

「危ない本って何なんですか？」

琢磨はルマチアに尋ねた。

「1冊で街が吹っ飛ぶような魔法の載っている本とか、開けたら即

死性の呪いが掛けられているような本ですよ」

ルマチアはなぜか嬉しそうにそう言った。

「な、何でそんなに嬉しそうなんですか」

今度はアシエルは顔を引き攣らせてそう尋ねる。

「ただの変態なんだよ、こいつは」

ガルムは無表情にそう言い放った。
その言葉にムツとしたルマチアは、

「別に変態じゃないですよ。ただ危険な本を手にとっても
それを解除したくなるんです」

「へえ、ルマチアさんってすごいんですね」

琢磨もうなずく。

「でしょう？ほら、アシエルさん達は分かって下さいましたよ、ガ
ルムさん」

「だからって本を手に入れるために図書館の司書を口説き落として、
自分の家に連れ込んで行為に及んでまで手に入れるか？普通」

琢磨とアシエルの笑みが固まった。

ガルムはさらに言葉を重ねる。

「その上、下の人間から順番に手を出すとは馬鹿かと。しまいには

館長クラスにまで・・・」

「本のためなら何でもしますよ、私は。それが例え魔物であつても」

「ああ、そう言えば人語理解する石蛇姫メデューサともやっただけ」

「ええ。彼女の中は最悪でしたが、彼女の持つ石蛇姫族の歴史書は最高でした」

ルマチアは嬉しそうにそう語る。

琢磨とアシエルは顔を真っ赤にしている。

（（最低で変態だ、この人））

琢磨とアシエルは同じことを考えていた。

「全く、節操のねえ奴だ」

「そう言わないでくださいよ。私のおかげで対石蛇姫用の防御結界が完成したんですから」

それをガルムは鼻で笑う。

「はっ。何を言いやがる。お前は公開する気がなかったから、俺が術式を完成させてやっただろうが」

「それは・・・」

「ほらっ。この話は終わりだ。さっさと祭壇に行くぞ」

「は……。わかりましたよ」

4人はひたすら山を登って行く。

#25（後書き）

前話にも書きましたが、

設定資料集で、メインテーマ（ネタバレなし）を掲載しました。

切る所が分からなくてグダグダになったので、
若干の小ネタを挟んだら下ネタになってしまいました。
全く下ネタにする予定はなかったんですけどねえ。

ちよつと蛇足：

ペーパークラス：F・E・Dクラス

ブロンズクラス：Cクラス

シルバークラス：Bクラス

ゴールドクラス：Aクラス

プラチナクラス：Sクラス

要はギルドカードの材質です。

魔物紹介

メデューサ

石蛇姫：

人型。眼球に魔力が内包されており、それを放出することにより前方の物（者）を全て石化させる。石化は時間とともに徐々に進行する。石蛇姫が死ぬと、眼球は石化する。ただし、生きたまま眼球をくりぬくことにより、生のまま手に入れることが出来る。かつてでは石蛇姫の被害によって村一つが壊滅するということも多々あったが、現在では、ギルドから発表された防御魔法陣（設置型・付加型・

結界型）により、被害は半数近く減ったものの、依然魔法陣の使えない村などでは被害は多い。

次回、『氷の祭壇』

ケーラボラス山脈の頂上にある質素な祭壇

誰が作ったのかも、いつ作ったのかもわからない
時代に置いて行かれ、忘れ去られた祭壇

尋ねるものは誰もいなかった・・・この時までには

山の天気は変わりやすい。

よく言われることだが、ケーラボラス山脈に限って言えばそれはない。

1年中雪に覆われ、上部に行けば行く程、吹雪の確率は高まる。

ガラム・ルマチア・琢磨・アシエルの4人は、ひたすらに頂上を目指していた。
いただき

頂をはるか前に通り過ぎていたため、今は白一色の急斜面を登っている。

ルマチアは道を選んでいるためにロククライミングのようなことはないものの、

それでもやはり危険なことには変わりない。

吹雪が吹き始めれば、10歩先すら見えなくなってしまうからである。

「タクマさん、アシエルさん。大丈夫ですか？」

ルマチアは数分毎に2人に呼びかける。

「大丈夫です」「大丈夫だ」

「そうですね、あと少しですのでがんばってくださいね」

その時、ルマチアの胸元がキラリと光ったのに琢磨は気付いた。

（何だ・・・？）

「なあ、ルマチアさん」

「はい、どうしました？」

「胸元の、その赤いのなんだ？」

ルマチアは、首から提げていた赤い石を手取る。

「これは『炎の護石』ですよ。先ほどお教えした純石を加工したものです。これを付けることで寒さが軽減されるんです」

「だからそんな軽装でも寒くないのか。・・・あれ？じゃあもしかして師匠も？」

ルマチアはチラリとガルムを見やると、頷いて答える。

「ええ。でもガルムさんは炎の護石を身に付けている訳じゃありません。ガルムさんは天空魔法を使って体の周りの空気を暖めているんです」

その言葉に反応したのは、琢磨ではなくアシエルだった。

「ええっー！師匠、私が寒いのは鍛錬してないからだ！って言うたのに。自分だけ魔法を使って楽をして。私たちにもしてくださいよ！」

「やかましい！お前らにも一応今魔法使ってたからそれで我慢しろ！」

「何の魔法を使ってるんだ？」

琢磨のこの問いに答えたのは、ガルムではなくルマチアだった。

「空気量の増加です。高いところほど空気は少なくなるので、慣れない人がそんな所に行くとは高山病にかかってしまふんです。だからそうならないようにガルムさんは空気量を調節してるんですよ」

「なら仕方ないか」

「ほら！タクマも我慢してるんだからお前も我慢しろ！」

「ううゝ」

納得したくないがするしかないアシエルだった。

「さ、早く登りましょう。詳しいことは登りながら説明しますよ」
（まあ、空気量を調節するついでに暖かくも出来るんですがね、嫌がらせだろうな、きつと）

「基本的に、護石は魔石でありさえすれば作れます。魔石に特別な魔法を付加することエンチャントでその効果を得ます。炎の護石は暖かく、逆に水の魔石は涼しくなります。もちろんそれだけではなく、同属性の魔法を軽減させます」

タクマはゴソゴソと胸元から石を取り出す。

旅立つ前にガルムが2人に送ったものだ。

「これは何の護石なんだ？」

「ああ、渡す必要はありませんよ。私は魔力は視えます（……）から。……ガルムさん」

1人先を進んでいたガルムは、ルマチアの呼びかけに戻ってきた。

「なんだ？」

「この護石はガルムさんが」

「・・・タクマ、それにアシエルもだ。それはあまり人に見せるな。そして肌身離さず持つてろ。いいな？」

「あ、ああ」「はあ、分かりました」

「そいつは俺と俺の知り合いとの合作だ」

「ほう、これを造れるほどの人があなたの他にも？どこにお住まいなんですか？」

「シャルベ王国のキーリエの町だ」

「キーリエ？・・・ああ、天魔師の町ですか。あやかってるんですかね？」

「最初はそうだったらしいが、雰囲気が入ったらしくてな」

「お師匠様、『天魔師』ってノートリアル決戦の・・・」

2人の会話に申し訳なさそうに入ってきたアシエルはそう尋ねた。

「ああ、その『天魔師』だ。タクマにも教えておいてやろう。ノートリアル決戦後、勇者とともに魔王と戦った者に『英雄』、連合

軍の師団を率いた者たちに『天』の称号を与えた。今話している『天魔師』もその1人だ。こいつは禁呪魔法を含めた全魔法を習得した歴史上最高の魔法使いだ。ちなみに英雄と天の実力は同じだと言われている」

「しかし、彼等の詳しい情報は一切伏せられた」

「え？何でだ？」

「考えてもみる。人は魔物を恐れていた。強くもあれば数も圧倒的。しかしそれをも倒す奴ら。戦争が終われば人は彼らを喜んで迎え入れる。しかし平和になればどうなる？」

「・・・英雄たちを、利用する？」

「それだけならまだいい。問題は別だ。平和に慣れれば人は英雄たちを迫害する。自分たちは殺されるのではないか？支配されるのではないか？強すぎる力は疑問を呼ぶ。事実、1人の天は民衆によって殺されている」

「『天魔師』の生まれ育った町は魔法に聡^{さと}い者ならば知っている人も多いのです。ですからあの町には実力者も多いのですよ」

「自分の町なのに、知らなかった」

アシエルのこの呟きに、
ルマチアは苦笑する。

「知らなくて当然なんですよ。それにしても、そんなにいい町なら私も住んでみましょうかねえ」

「やめとけやめとけ。お前には似合わねえよ」

「ふふふ、冗談ですよ。私は今の家も結構気に入ってますから」

「あんな家をか？」

「ええ、ガルムさんも住んでみますか？」

ルマチアのこの提案をガルムは一蹴する。

「俺は今の家を払う気はないよ」

「そうですか、残念です」

さして残念層には見えないルマチアが笑う。
タクマはそんな会話を聴き、疑問を口にした。

「師匠ってどこに家を持つてるんだ？」

「ギルド本部だよ」

「あんな所に家なんてあるのか？」

「あゝ。言い方が悪かったな。プラチナクラスの冒険者はな、ギルド本部内に自室が与えられるんだ。自室といっても宿屋の最高級の部屋よりも広いけどな」

「えゝ、いいなゝ。私も欲しいなゝ」

「精進することだな」

「ふふふ、あ！」

少し先を歩いていたルマチアは振り向いた拍子に声を上げた。

「ん？どうしたルマチア」

「2つお知らせがあります。まず、頂上が目に見えてきました」

「ほうほう、それでもう1個は？」

「下からクラスBの魔物『バーサクエイブ狂剛猿』の群れに分かりました」

「・・・走るぞ！頂上までは奴らは来ない！」

4人は頂上までに何度か交戦しながらもバーサクエイブ狂剛猿を振り切った。

#26 (後書き)

魔物紹介

バーサク
エイブ

狂剛猿：クラスB (単体)

ゴリラ

体長2 m以上はある猿。普通は単体で行動する。群れで出会ったら逃げるしかない。名前とは裏腹に冷静に考えて行動する猿で知能は高め。

#27

山頂に着くと、太陽は真上にあつた。

出る時も真昼だったため、

どうやら山を登っている間に、一日が過ぎていたらしい。

眼下には雲が広がっており、見渡す限りでは地上は見えない。

ガラムは異空間からひょうたん型の容器を取り出した。

それを見てルマチアが尋ねる。

「なんです？それ」

「中の底に空間魔法を付加しててな？エンチャント異空間のストックにある酒をこの入れ物に空間転移させられるんだ」

「なるほど、つまりは尽きることの無い水筒ですね」

「ま、そんなところだ」

「それにしても、雲海を見ながら飲む酒は最高だな！ほら、ルマチア。お前も飲め飲め！」

「ありがたく貰いましょうか。・・・ふむ、これは確かにおいしいですね」

ガラムとルマチアは手ごろな大きさの石に座って酒を飲み始めた。

一方、琢磨とアシエルはというと、息を切らして仰向けに倒れていた。

慣れていない雪の中で、戦い、また走って登って来たからだった。そんな2人にもガルムは声をかける。

「おうおう、お前らも見ろよ。最高の景色だぜ？これは」

2人は立ち上がろうとするがふらつき膝をつく。

「はあ、はあ・・・ちよつと・・・待ってくれ・・・」

「む・・・無理ですよ・・・視界が・・・回ってるんです」

ルマチアはガルムから受け取った水を、2人のそばに置いた。

「あ・・・ありがとう」「ありがとう・・・ございます」

「ゆつくりと、少しずつ飲んでくださいね」

「うゝむ、こりゃあ少しばかり休憩が必要か？」

「必要でしょ。このまま無理に行進したら死んでしまいますよ、冗談抜きで」

「なら多めに今日は1日、ずっと休むか」

ガルムとルマチアは2つのテントを張った。

そこにそれぞれ琢磨とアシエルを寝かせた。

2人は疲れがたまっているのか、泥のように眠っている。

更に二つを新たに張り、自分たちの荷物を置いて戻ってきた。

二人は再び石に座り、雲海を見下ろしながら酒を飲み始める。話を切り出したのはルマチアの方であった。

「あの子達は最近弟子にしたのですか？」

「分かるか？」

「ええ。あなたの弟子にしては、いささか体力が無さ過ぎます。それに……」

「それに？」

「それに、先ほどの無理な登山の原因にもなった狂剛猿バーサクエイブとの戦闘の際でもそうでした。雪上とはいえあまりにも遅く、切れが無い。避け方も逃げ方もなっていなかった。それよりも何よりも……『覚悟』が欠如していました」

「……」

ガラムは何も言わずにルマチアの言葉に耳を傾ける。

「私にはあの子達が死にたがっているようにしか見えませんでした。今生きているのでさえ私には疑問に思います」

「確かに、なあ。今の奴らじゃあいつ死んでもおかしくない」

「っ！ならば！」

「今のあいつらの心境は微妙だ。方や昔の世界への郷愁、方や親を殺した者への復讐。何のために修行するかは固まっているようだが、どれほどの強さを自らが求めているかは分かっていない」

「・・・」

今度黙ったのはルマチアの方だった。

「それを何とかして修正していくのが俺の務めだとは思ってる。それじゃ駄目だと思うか？」

「・・・身勝手な言い方をしてすみませんでした」

ルマチアは立ち上がってガラムに頭を下げる。
しかしガラムはそれを見ずに、ただ雲海を見下ろしている。

「・・・座れよ。お前がそういうのも正しいんだ。だから謝る必要は無いよ」

ルマチアは口を開け、何かを言おうとするが首を振り、諦めた様子で座る。

「それに、今俺らが話し合うことはまた別なところにあるだろう？」

ルマチアは気持ちを改めて顔を引き締める。

「確かにそうですね」

「で、そっちの件だが、やっぱり無いか？」

「はい、詳しく読んでも見つかりませんでした」

「やはりそうなのか。俺の見落としたと、そう思っていたが・・・」

ルマチアは軽く頷き、

「『門』を開く方法は全くの不明です」

「そう、か。俺はどうするべきなんだろうな？ルマチア、お前の意見を知りたい」

「私はあなたと同じ考えですよ。方法すら分かっていないにもかかわらず、一度しかないチャンスの無いことをやるのは愚の骨頂。当然やめるべきです」

「・・・」

「ですが、『思い立ったが吉日、それ以外は全て凶日』私からあなたから学んだことの1つです。あなたの考えどおり、実行しましょう。儀式を」

「そうだな、愚か者は愚か者のやり方で行くとするか」

ルマチアは立ち上がってテントへと歩き出した。数歩歩き出して止まり、肩越しにガラムを見る。

「それに、何か策がありなのでしょう？」

そう言う、ルマチアはテントの中へと入っていった。

いつの間にか太陽はオレンジ色に光り、雲海の中へ沈んでいこうとしている。

ガルムは再び、オレンジ色に染まった雲海を眺めながら酒を飲み始める。

「ああ、酒がうめえ」

ぼつり、とガルムは呟いた。

「夕陽が沈んでも星々が瞬いては朝日が昇る。例え何千回、何万回と繰り返しても変わらない仕組み。いつかに世界が定めた。それが狂ってしまったも、世界はそれを元に戻してきた。ならば……・。いや、これは考えてはいけないことが」

ガルムは言葉を更に紡ぐ。

「なぜなら俺は……」

紡いだ言葉も虚空へと吸い込まれるのみで、聞くものは誰もいない。

ガルムは口へと酒を滑らせる。

「ああ、酒がうめえ」

#28 氷の精霊王

「でも、……………ですか？」

「べ……………やし……………」

「しかし、……………すよ」

「ほつ……………とけ。それ……………ていく」

朝、アシエルは自身の意識が覚醒していくのに気付いた。

昨日の戦闘からか、寝違えたのかは分からないが、背中が痛い。

（この声は、お師匠様とルマチアさん？何か口論してるみたいだけど、珍しいわね。今まで1度も口論してる所なんて……………あ、最初に家壊したときに見たわね。今度は師匠は何したんだろ？）

（それにしても背中が痛いわね。この感触はまるで……………）

アシエルはゆっくりと目を開けると朝特有の白い空が広がっていた。そして視界の端ではガルムとルマチアがこちらを見ていた。

（あれ？私、昨日テントで寝てて……………）

「あれ？お師匠様……………おはようございます」

ガルムは軽く手を上げて返事を返す。

「おう、おはよう。とりあえず、乱れたその格好を直したらどうだ？」

「・・・え？」

アシエルは起き上がり、自分の置かれている状況を確認してみる。
自分が寝ていたのはテントの中じゃなくて外。
下には毛布ではなくゴツゴツとした岩やら石。
服は乱れに乱れ、肌の多くが露出している。
周りにはガルムとルマチアと琢磨。

「キ・・・」

「「「き？」」「」」

「キヤー！見るなー！！」

猛烈な咆哮とともに平手が飛んできた。
平手は琢磨の頬を強打して、
ルマチアには避けられ、
ガルムには受け止められた。

「落ち着け」

「キヤー！は、離してくださいよ！」

「分かったからさっさと着替えろ」

そう言うとガルムは平手打ちを食らって吹っ飛んだ琢磨の首根っこを掴んで、

巨大な岩の反対側へと引き摺^ずっていった。

「おーい！まだかー？」

「まだですよ！」

「早くしないと、お前の着替えを覗くぞー、タクマが」

「来たらナイフで眉間を突き刺しますよ、タクマを」

「行かねえよ！」

そう言う琢磨の顔は真っ赤だ。

そしてその様子をガルムとルマチアはニヤニヤと眺めている。

数分後、ようやく着替え終わったアシエルが現れた。

「遅えよ」

「女の子の着替えは時間が掛かるんです！」

アシエルはぷりぷりと怒りながら言った。

「はいはい、じゃあ行くぞ」

出発した4人は30分ほど歩くと立ち止まった。
氷の精霊王を祀る祠^{ほい}に着いたのだ。

「さて、どうやって精霊王様を呼び出しましょうか？」

ルマチアのこの言葉に反応したのはガルムだった。

「ん？呼び出し方わからねえのか？」

「ええ。ここには何回か来た事はあるのですがね」

「なあ。祠壊せば出てこないかな？」

「・・・やめてくださいね」

ガルムは肩をすくめて苦笑する。

「冗談だよ、じょーだん」

「やめてくださいね」

「しねえよ、冗談だよ」

「やめてくださいね」

流石にこれにはガルムも怒った。

「しねえって言うてるだろうが！」

「ふっ、冗談ですよ」

してやったり、といった様子でルマチアはガルムに言った。

「・・・はあ、もういい。疲れた。で、どうするよ?」

「どうしましょうねえ」

『我に何用か、人間たちにエルフよ』

突然、4人の頭の中に声が響いた。念話である。

しかし驚いたのは琢磨とアシエルだけで、ガラムとルマチアは全く驚かなかった。

ルマチアは祠の前に恭しく膝を折り、

「お初にお目にかかります。氷の精霊王様。私の名は、ルマチア」
アル「エルフィオス、と申します。この度は精霊王様に2つの願いがあつて参りました」

『うむ。なんじゃ、申してみよ』

「は。1つ目は、この山脈のどこかにアクアマリンがございませんでしょうか?その使用目的ですが、それは2つ目の願いとなりますので先に説明させていただきます。2つ目は、麓の村はずれの小屋にて『異世界の門』を具現・開門いたします。そのため、ご迷惑をお掛けすることを断りに来しました」

『ふむう。成る程のう。・・・あい分かった。二つの願いを聞き入れよう。まず、1つ目の願いだが、アクアマリンはこの山脈の地下に眠つておる。そこへ至る道を示そう。しかし、我がするのはそこまでじゃ。実際に取ってくるのはお主らじゃ』

「わかりました。ならばわ「俺が行こう」

ルマチアの言葉をさえぎり、ガルムが言った。

「お前よりも俺の方が早いからな」

『我はどちらでも構わぬ。して2つ目の願いじゃが、これも認めよう。小屋の外の被害は全て我が何とかしてやる。好きに儀式を行うが良い』

「ありがとうございます」

ルマチアが礼を言った直後、地面が揺れた。祠の前に、直径3 m程の穴が現れたのだ。

『氣にする必要など無い。アクアマリンを採りに行く男よ。この穴に飛び込むが良い。この中は光りが無く、また暗い。氣をつけて行け』

「ああ、問題ない。俺からも1つ頼みがあるんだが・・・」

『精霊の王たる我に臆さぬその物言い。氣に入った。なんじゃ？申してみよ』

「俺の弟子2人・・・その人間族2人だ。そいつらに『試練』を受けさせてやって欲しい」

『いいだろう。本来はこの地に住む者にしか受ける資格は無いが、特例だ。認めよう』

その言葉を聞いたガルムは、

「ルマチア、2人のことを頼む」

「ええ、お任せを」

ガルムは、フと微笑み、アクアマリンの眠る洞窟へと続く穴へと飛び込んだ。

『お主らは『試練』が何なのかを知っておるのか?』

二人は首を横に振る。

『『試練』とは、加護を受けるにふさわしいかを見極める試験の事じゃ。試験に受ければ氷の加護を与える。この加護があれば、寒さを感じることも無くなれば、ある程度の暑さをかんじることもしなくなる。そして、氷の魔術を無効化させる。そのような加護だ。さてお主らの師はお前らを推薦したが、受けるのはお主らじゃ。どうする? 受けるのか?』

「ああ、受けさせてくれ」「勿論受けるわ」

『いいだろう。暫し待て』

再び地面が揺れる。先ほどよりもかなり長い。すると、山が動いていた。

岩や石が全て地面に吸い込まれ、斜面が無くなる。僅か1分足らずでそこは平地へと変わった。

『出ですよ！わが僕！』^{しもへ}『穿氷の大牙』^{フエンリル}』

その言葉と同時に、新たに出来た平地の真ん中に一匹の狼が現れる。その狼の大きさは、全長10m程、体毛は全て白色で、金の瞳と大きな牙が特徴的である。

『その狼の名は『穿氷の大牙』^{フエンリル} 氷の守護獣じゃ。これをお主ら2人に倒してもらう。別に殺してもらっても構わんど。そ奴は死んでも蘇るからの。じゃが安心しろそ奴の強さは通常時の10分の1にも満たぬ。これでお主らが死ぬことは無いじゃろう。さあ、お主らもあそこへ行け』

琢磨とアシエルは穿氷の大牙^{フエンリル}と向かい合うように立ち、それぞれの武器を構えた。

『ふむ、では少しヒントをやろう。そ奴の強さは、お主らがギルドと呼ぶものの強さであらわすとすれば、せいぜいクラスS程の強さじゃ』

氷の精霊王は一拍置き、

『では始めよ！』

氷の『試練』は今始まった。

#28 氷の精霊王（後書き）

魔物紹介

フェンリル

穿氷の大牙：クラスS（試練時）・クラスSS（通常時）

詳細不明

次回：氷の『試練』

琢磨とアシエル、2人の戦闘力を合わせてもクラスSに届くかどうか。

果たして2人はガルの期待通り、『試練』を合格できるのか!?

#29 氷の試練

吹雪は止み、動くものは何一つ無い。

相対する2人と1匹は彫像のようにそこに佇んでいた。最初で全てが決まる。

そんなことは無い、とガルムは鼻で笑うだろう。

しかし2人はそうは思えずに相手の動きを待っていた。

ピクリと穿氷の大牙フエンリルの前脚が動く。

それと同時に2人は斜め前へと走る。

すぐに2人と1匹は一直線に並ぶこととなった。

両方狙っていたのであるう、目標が分散してたたらを踏む。

穿氷の大牙フエンリルがアシエルの方を向く。

どうやらアシエルから狙うことに決めたようだった。

穿氷の大牙フエンリルは伏せると、

圧倒的な速さで体当たりをしてくる。

アシエルは懷からピックを3本片手で取り出して顔に向けて投げた。ピックは2本が外れたものの、1本は狙い通りに当たった。・・・

しかし、

「凍った!？」

そう、ピックは刺さった瞬間に凍りついて砕け散った。

更に悪いことには、穿氷の大牙フエンリルの突進する速さが落ちなかったのだ。ただでさえ長くない距離の中でピックを放ったために、避けることは出来なくなった。

何とか被害を減らそうと、渾身の力で右に跳躍する。

しかし、穿氷の大牙はすぐさま方向転換しようと足に力を入れ、足に激痛が走った。

いつの間にか近付いていた琢磨が軸足となっていた左足を斬りつけたのだ。

穿氷の大牙はフエンリル転んだが、2人は体勢を立て直すために退いた。

「私を助けなくてもダメージ与えたらよかったんじゃないの？」

「そうかもしれないけど、良い収穫があった。奴は意識しないと凍らせることは出来ない」

「そっか！でもどうする？」

「実はもう1つ気になることがあるんだが、……………」

「わかったわ」

琢磨の提案にアシエルは頷くと、2人は5 m程の距離をとった。琢磨は正面から穿氷の大牙フエンリルへ走る。数秒遅れてアシエルも走り出した。

アシエルは再びピックを投げる。

ピックが凍ったその瞬間、琢磨は剣で穿氷の大牙フエンリルを斬り裂いた。穿氷の大牙は顔から血を流してうめき声を上げた。

「ギャウ！」

それを見て琢磨は歓声を上げる。

「やっぱり同時に防げないのか！アシエル連携で攻めるぞ！」

「わかったわ！」

二人は攻撃を受けながらも、じりじりと穿氷の大牙フエンリルを追い詰めていった。

「ほう、中々善戦してますねえ」

感嘆の言葉を呟いたのは、祠の前で2人と1匹の戦いを見ているルマチアだった。

「登山のときとは大違いだ。何が悪かったんでしょうか・・・」

「あ奴らの師匠に遠慮してたのじゃろう」

祠の後ろから現れた1人の少女がルマチアの疑問に答えた。

「もう少し詳しく聞かせてもらっても？氷の精霊王様」

「驚かんのじゃな」

「まあ、高位の精霊や魔物は人に化けることが出来ることは有名ですからね」

「成る程のう。それで先程のことだが、遠慮というには語弊があるう。あ奴らの師である男に匹敵する強さの者はこの大陸にもそうそうおらんじゃろう？」

「そうですね、ガルムさんが力を出し切ったところは見たことあり

ませんが・・・」

「強い師を持つ弟子は主に2通りに分かれる。1つは、師の様なろつと無茶な戦い方をする。これは師が出来るから自分も出来なければならぬと思つて無茶をするタイプじゃな」

「ふゝむ、早死にするタイプですね。もう1つは何でしょうか？」

「自分の実力を過小評価するタイプじゃ。これは現実を見すぎる。自分の限界を知るのは大事じゃが、自分の限界を超えた事をしないと人は成長せぬ。あ奴らは師が強すぎるために自分たちは弱いのだ、いつも思つておるのじゃろな。しかし今、奴はおらぬ。だから自分の限界を忘れ、あれだけ見事に戦えておるのじゃ」

「だからこそ俺が消えるためにアクアマリンの採掘に行ったんだ」

突然聞こえたこの声に、氷の精霊王は不機嫌そうに迎えた。

「ふん、このような事を我にいちいち説明するな。いたならさつさと出て来い」

この言葉にガルムは苦笑する。

「ははは、今帰ってきたんだから許してくれ。すまんなルマチア、理由を付けて残ってもらつて」

「構いませんよ。見ていて楽しかったですし」

ガルムは愛弟子の戦いを見ながら精霊王に話しかける。

「・・・なあ、精霊王さんよ」

「どうしたのじゃ？」

「あんたは他の精霊王と交流あるのか？」

「うむ、水の精霊王とは親しいぞ」

「そうか・・・。20年後のアレ（・・・）が早まるかもしれん」

「・・・そうか。いつ頃になりそうじゃ？」

「遅くても10年。早くて・・・・・・2年だ」

「馬鹿な！何故それほどまでに！？」

「もはや誰にも予測できない方向に動き出している」

「・・・このことは他の精霊王たちには？」

「大地・炎・雷へは伝えた」

「ならば水と樹は我が伝えよう」

「頼む・・・。お？もう終わりそうだな」

ガルム達3人（？）は戦いを見届けるために視線を同じくした。

「はあっ。はあっ。はあっ……これで、終わりだ！アシエル！」

「はっ、はっ、はっ、はっ。……分かったわ」

琢磨とアシエルの2人は体のあちこちから出血している。

しかし、出血以上に多いのは凍結である。

爪や牙がかかる度にその部分が凍結するのだ。

（間接部にガードがあってよかったな。無かつたら危なかったかもしれない）

琢磨の連激で、穿氷の大牙フエンリルの足が崩れ落ちた。

穿氷の大牙はすぐに立とうとするが、ダメージが大きすぎて立てない。

凍らせて防ごうとしても、今では凍らせるほどの余力も残っていない。

（きっと凍らせるのにも魔力が必要なんだわ。もう魔力が残ってないのね）

「終わってえええー！」

アシエルは必死の叫びとともにダガーを眉間に突き立てる。

すると、穿氷の大牙フエンリルは体がだんだんと透明になっていき、そのまま消滅した。

2人は緊張の糸が切れ、その場にへたり込んだ。

「うむ、よくやったぞ」

「はあ、はあ、はあ……誰だ？あんた」

「その少女が、氷の精霊王様の人間としてのお姿ですよ」

精霊王の後にガルムとルマチアが続いて来た。

「はあ、はあ・・・この人が・・・精霊王様なんですか？」

「そうだ、このちびの女が精霊王だ」

ガルムが茶々を入れるが精霊王は無視をする。

「それで加護だが、すでにお主らの護石の中に入れておいた。後は勝手に作動するじゃろう」

「ありがとうございます」「ありがとうございます」

「別に礼はいらんよ。見事試練を突破したのじゃからな」

そういうと精霊王の姿は消え、再び頭に声が響く。

『ついでじゃ。麓の小屋まで送ってやるう』

4人の視界が歪み、気が付くとルマチアの家の中であった。

「帰ってきましたね」。琢磨さんにアシエルさん、こっちにベッドがありますのでこちらへ」

ルマチアは2人を奥へ連れて行き、10分後ぐらいに戻ってきた。

「ぐっすりでしたよ」

「あいつらは寝すぎだよ、いつもいつも」

「ははは、それほどガルムさんの修行が厳しいんですよ。．．．１ついいですか？ガルムさん」

「あゝ？」

ガルムも疲れたのか、ソファーに軽く座って大きくもたれかかっている。

「先ほど言っていたアレ（．．）とは何なのですか？」

ルマチアは両手を組んでじっとガルムを見る。

「．．．．．」

ガルムは黙って答えない。

先に折れたのはガルムのほうだった。

「どこから説明したら良いものか。．．．簡単に言うなら」

ルマチアは何も言葉を発さずにガルムの言葉を待つ。

「何年後かに．．．戦争が始まる」

「戦争、ですか？３００年続いた平和にも流石にひびが。しかしそんな事で？」

ガルムは小さく首を横に振る。

「何かあるのですか？」

「そんな小さなものではない。最悪の場合、この大陸の民の半分が死ぬ」

#29 氷の試練（後書き）

前回到引き続き、

魔物紹介

穿氷の大牙^{フエンリル}：試練時（クラスS）・平常時（クラスSS）

氷の精霊王が使役する魔物の1匹。もともとは野生だったが、精霊王はこれを自らの魔法により氷の属性を付け加えて下僕^{しもべ}と化した。大きさは10m程であったが、これも試練時の大きさであり、本来は20mを超える。野生の名前は穿地^{フエンリル}の大牙であり、属性攻撃は無い。

試練について

各属性毎に試練があり、合格するとそれぞれの精霊王の守護を得る。試練と加護の内容は属性毎に異なっている。氷は基本の5属性では無いため、試練は一番楽。天空の試練・加護は今のところ確認されていない。

精霊王について

思念体・人間体・獣体の3つの体を持つ。精霊王は無から生まれたとも人や獣から昇格してなったとも言われているが真偽は不明。その属性に係のある所で祀られてはいるが、祀られている場所に必ずいるというわけではない。

戦争の話をこんなに早くするつもりは無かった。が、あまり伏線を入れても読み辛いだけなので少し公開しました。

#30 『ドレア・ナクス・ラタイ』 異世界の門

ガルムたち4人はルマチアの住む洞窟の最奥に向かっていた。

ルマチアの家は洞窟の半ばにあっただらしく、

その奥にもまだ空間があっただのだ。

そこは魔力のあふれるところらしく、儀式場として使うことにしたので。

洞窟の通路は、地面や天井から突き出ているエメラルド色の水晶がほのかに光りを放っているために視覚に不自由することは無い。

ガルムはそれを1つ地面から引き抜いて、琢磨とアシエルを呼ぶ。

「これは緑光石だ。見ての通り光を放っているな。これを割ると・・
」

そう言っただガルムは取り出したナイフの柄で石を割る。

すると石は強く輝き、そしてゆっくりと光は消えた。

「強く輝くのはせいぜい5秒が限界だろうな。一度光を失った石は二度と輝きを取り戻さない。光ってる原因は魔力だ。ま、せいぜい何かの役に立てる」

石を隅に放り投げたガルムは再び歩き出す。

「さて、儀式場に着きましたよ」

儀式場は中心がまるく盛り上がっており、その周りには水がたまっ

ている。

どうやらひび割れた岩の隙間から流れてきているようだ。
儀式上も明るいの、通路以上に緑光石が散乱しているからだ。
それは水の中でも例外ではなく、場を幻想的にかもし出していた。

ガルムとルマチアは先に中心に登っている。

「本の通り魔法陣は作っておきましたけれど、一応おかしいところ
が無いか見てもらえますか？」

「………。大丈夫だ、特に問題は見つからない。じゃあ触媒を置いていこう」

盛り土には正五芒星を2つ、180度回転させて描かれていた。

> i 1 6 4 1 9 — 2 0 1 3 <

2人は五芒星の各頂点に龍の角や宝玉を置いていく。

最後にルマチアは五芒星を囲むように魔法^{ルン}文字を書く。

「これで完成です」

「ルマチア、詠唱を任せていいか？俺は魔力の制御に当たるから」

「それが適役でしょうね。分かりました、本をください」

ガルムは異空間から魔法書を取り出してルマチアに渡す。

2人は近くのたいまつに立てかけてあつた杖を持ち、思考する。

（もしガルムさんの推測が間違っていれば・・・）

（二度とチャンスは来ない）

「タクマ、『門』の開け方を説明する。こっちへ上がって来い」

タクマとアシエルもまた、触媒と魔法人を踏まないように上がって来た。

「タクマ、お前はこの陣の中心になってお前の会いたい人物、お前のじいさんを想え。たとえ何が起ころうとも、必死で想え。アシエル、お前は俺の傍にいろ。でも絶対にくつつくな」

「分かった」「分かりました」

琢磨は陣の中心に、アシエルはガルムの傍に立った。

ガルムとルマチアは陣の左右に散って深呼吸した。
ガルムは琢磨を見遣り、

「タクマ、準備はいいか？」

「・・・ああ」

「ではこれから『門』を具現させる。ルマチア！」

魔法書が淡く光り、宙に漂う。

ルマチアは杖を地面にてコンコンと音を鳴らし落とす。

「『この世の理。彼方^{かなた}から彼方へと流れる万物の源。天地開闢^{かいびやく}より存在せし幾万^{とわ}を繋ぐ永遠^{えにし}の縁。始まりも終わりも誰が知る・・・』」

龍の角と宝玉から、それぞれの属性の色の柱が螺旋状に生まれ、暴走を始める。

（この量の魔力掌握は厳しいな・・・。しかし！やるしかない！）

「ぬうん！」

ガラムは杖を大きく掲げ、儀式場の全ての魔力を制御する。

暴走は次第に収まり、柱は次第に安定して微動だにしなくなった。

（・・・これでいい）

「『其は定むることのない門。神々が使いし世と世とを繋ぐ神器。

其はどこと繋ぐ場所は何処であるのか。夢は現に現は夢に・・・』」

緑光石は明滅を繰り返す。

触媒の魔力に共鳴しているのだ。

緑光石が次々と爆ぜ、魔力のみが残る。

その魔力は儀式場で激しく動き回っていく。

「『創世の頃より移ろわぬ魔の力よ、響け！響け！響け！彼の者の郷を繋ぐ門と成りて今ここに顕現せよ。その名はドレア・ナクス・ラタイ！』」

激しく動き回っていた魔力と触媒の魔力が一箇所に集中する。

魔力は融合し、とある形を作っていく。

高さ3 m、幅2 mの透明の門だ。

しかし門はぴたりと閉じている。

（意外と小さい・・・しかしこの消費魔力）

「タクマ！しっかりと想え。お前が想わないとあの門は開かんぞ！

琢磨は元の世界での祖父との思い出を思い出していた。

両親が2歳の時に死んだ琢磨は祖父に体術と剣術の教えを請いた。強くなつてからは喧嘩に走つたものの、

祖父はそれを正そうとひたすら琢磨に教えていた。

（じいちゃん・・・）

ゴ、ゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

琢磨の想いに反応したのか、門は重い音を立てて徐々に開いていく。そのときガルムはある自体に気付いていた。

「ルマチア！触媒の魔力がもう無くなってる！魔力を開放しろ！」

そう、龍の角と宝玉に込められた魔力は、全て門の顕現に費やされて残っていなかった。

すぐにガルムとルマチアは自身の魔力を解放した。

2人から出た魔力の奔流は門に流れ込む。

後数瞬遅ければ、門は四散していたであろう。

ゴゴゴゴゴゴ、ガタン

門が完全に開いて固定された。

しかし、門の向こう側は洞窟が移り、琢磨の祖父の姿は無かった。

アシエルは絶望の声を上げる。

「嘘・・・失敗？」

「いいや、違う。良く見る」

門の向こう側は陽炎の様に揺らめいていた。次第にはつきりとしていく。

琢磨は息を呑んだ。

門には琢磨の祖父が移っていたのだ。

祖父は和服を着て道場のまん中で正座し、黙想をしていた。

「じいちゃん!!」

琢磨は叫んだ。

祖父の目が開く。彼にも琢磨の姿が見えているにもかかわらず、全く動揺していない。

「・・・琢磨か。元気でやってるか？」

「ああ、じいちゃん。ごめん、勝手にいなくなつて」

「別に構わん。お前は5歳のときにも修行が嫌だとか言つて五日も家出したんだ。いまや高校生、1年近く家出してもおかしくは無いさ」

琢磨の顔が紅潮する。

「そんな昔の事をいつまでも。・・・あ、あのさ、じいちゃん！俺・・・」

「皆^{みな}まで言うな。儂はお前を赤ん坊の頃から育ててきたんじゃ。お前の考えなんぞ手に取るように分かるわい。やりたいことを、目標を見つけたんじやろう？儂の事なんぞ気にするな。お前はお前の道を進め。立ち止まつたつて振り返つたつてよいよい。大事なことは自分自身が決断することじゃ。誰かに意見を聞くのも大事じゃが、必ず自分のことは自分で決めよ、いいな」

「じいちゃん・・・ありがとう」

そっと、ガルムは後ろから琢磨の肩を持つ。

「あなたがタクマ君のおじい様ですね。私はこの子に『戦い』と『生き方』を教えている者です」

「そうですか、あなたが・・・。お名前をお聞きしてもよろしいでしょうか」

「ガルムⅡグランベルツと申します」

「ガルムさん。どうかわが不肖の孫をよろしくお願いします」

タクマの祖父はそういつて頭を地面に付くぐらい深く下げた。

「確かに、お預かりいたしました」

「ガルムさん、そろそろ私の魔力が尽きます!」

ガルムはルマチアを振り返り叫び返す

「後どれだけ持つ!？」

「10秒と持ちません!」

ルマチアの魔力の奔流はだんだんと細くなり、消えた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

門は徐々に閉まっていく。

その時！タクマの祖父が動いた！

突然片膝立ちになった彼は傍に置いてあった刀を門に投げたのだ。
門が閉まりきる直前、刀がこちらの世界へと渡った。

「餓別じゃ、生きろよ、琢磨！」

ゴゴゴゴゴ、ガダン

門は閉まりきった。

門は四散して魔力の塊となった。

これも暫くすると自然消滅することだろう。

「・・・じいちゃん」

琢磨は泣いていた。

それをアシエルはそっと抱きしめる。

ガラムは刀を持つとルマチアの元に向かう。

ルマチアは全魔力を使い切り、へたりこんでいた。

「立てるか？」

「は、はい・・・何とか」

ルマチアは杖で体を支え、何とか立ち上がる。

「無理をするな。ほら、俺の魔力を使いえ」

ガルの手から放たれた魔力がルマチアへと移る。

「……ありがとうございます」

ルマチアは杖なしでもしっかり立てるほどになった。
そんな彼にガルムは刀を渡す。

「これが機工剣『刀』ですか、はじめて見ました」

ルマチアは刃を鞘から抜いて眺める。

「きれいな紋様ですね。軽く曲がっていて片刃ですか。それでどうしたんですか？」

「これはタクマの世界から門を抜けてこの世界に来た。何らかの魔力が込められていると見て間違いないだろう。疲れているのに悪いが『視て』くれ」

ルマチアは神妙な顔になって頷く。

「確かに。そう言われればおかしいですね。普通の物質ならば分解されるか消滅する。しかしこの刀はどこもおかしくなっていない。……わかりました、少々お待ちを」

ルマチアは刀の刃をじっと見つめる。

「・・・ふう。分かりましたけど、正直すごい一言に尽きますね」

ガラムはルマチアから刀を受け取って尋ねる。

「どうだった？」

「内包魔力量が神聖武器のそれを上回ってます。神器までは及びませんけれども」

「・・・」

「刃の素材はオリハルコンに似た物質。オリハルコンの性質はご存知ですよ」

「ああ、魔力層が何層にも別れていて奥に行けば行くほど硬さや内包できる魔力量が増す」

「その通りです。今まで発見されたオリハルコン最高の層の数は10。これは全部で13層あります」

「馬鹿な！それじゃあ・・・」

「ええ。これは硬さだけならオリハルコンを越えています」

「・・・・・・・・。ルマチア、明日この刀に封印を施す。お前も付き合え」

「・・・分かりました」

ようやく泣き止んだのか琢磨とアシエルが来た。

「帰るぞ。俺も疲れたしルマチアは魔力が殆ど無くなって。だから明日一日は休ませろ」

そうガルムは言って、4人は一日休養を取ることにした。

次の日の朝、

ガルムとルマチアは早くに洞窟の外で刀に封印を施していた。複雑な魔法陣から刀を取り出した。

「どんな封印を？」

「13層から11層まで魔力封じと認知妨害魔法を施した」

「確認してみましよう。……………確かに、私でさえ注意深く見ても11層以降の存在が分かりません。流石ですね。」

タッタッタッタ……………

「師匠！俺の刀が……………」

手元に刀が無くて驚いた琢磨はガルムの元へやってきた。そして琢磨はルマチアの手の中にある刀を見てほっと息を吐く。

「すみません、タクマさん。刀をどうしても見たくてガルムさんにお願いしたんです」

はい、と琢磨に刀を返すと、

「それじゃあ朝ご飯にしましょうか」

「おー、そうだな。タクマも来いよ」

「俺は、少し刀振っていいか？」

「おう、早く来いよ」

そう言っただけでガルムとルマチアは先に家へと帰っていった。

琢磨は鞘を洞窟の壁に立てかけ、何度か振る。

ふと、なんとなくこの刀の銘を見なくなった。

琢磨は手際良く柄を外し、予想外の銘を目にした。

【琢磨】

なんと自分の名が記されてあったのだ。

この時、琢磨はある思い出が蘇っていた。

――13年前 琢磨4歳の時――

幼い琢磨とその祖父は、修行の後に楽しく話し合っていた。

「琢磨、将来この道場を継ぐ気はあるか？」

「うん！僕、おじいちゃんみたいに強くなっているんな人に教える

んだ」

その言葉を聞いて祖父は心底嬉しそうに笑った。

「はっはっはっは！そうかそうか！ならばもっともっと強くなりたいとな。それと、琢磨が僕の跡を継ぐならそれなりのプレゼントをやろう。何が良い？」

「それなら刀が良い！おじいちゃんの持つてる様な強くて格好良い刀！」

「ほう、刀か。良かろう、楽しみにしていなさい」

「わーい」

――――

琢磨の両頬は再び涙に濡れていた。

「じいちゃん……。ごめん、ごめん。……。俺は……。僕は……。」

琢磨は暫く泣き続けた後、こぶしで涙を拭いとり、柄をつけて鞘に入れた。

（じいちゃん。俺は強くなるよ。自他共に認める、最高最強の剣士になってやる！）

そう心に決め、3人の待つ洞窟へと走って戻った。

#30 『ドレア・ナクス・ラタイ』異世界の門（後書き）

今までで最も長いんじゃないでしょうか？（笑

こうやって目的をはっきりさせた琢磨、これからは純粹に強くなっていきます。

次話は再び番外編です。

主人公は今回も出てきた琢磨のおじいさん。

おじいさん視点で書いていく予定です。

蛇足：刀の紋様について

呼び方が色々あるそうですが、

作者は全く知りませんので書く予定はありません。

昔、某漫画で読んだ「乱れ刃」しか知りません（笑

番外編 #31 生き様（前書き）

今話は御都合主義な話となります。あらかじめご了承ください。

番外編 #31 生き様

秋も深まり、朝の風も冷たくなってくる今日この頃。

————日本国 都内 某所————

広々とした邸宅。

和がいまだ残る家の庭先で1人の老人が紫壇（国内では最も堅い木）で素振りをしていた。

老人の名は

【川崎^{かわさき} 厳真^{げんしん}】

川崎 琢磨^{とくま}の実祖父であり、^{よわい}齢99の古来から存在する武術の名家の宗主である。

川崎家は卓越した武術と決して揺らぐことのない精神から、政府から財政、警察、ヤクザやマフィアとも親交は深く、信頼も厚い。

どこかに属することはなく、求められて宗主が気に入りさえすれば指南してきた。

（全く、夏休みも終わったというのに！琢磨は一体どこをふらついておるのじゃ！）

朝陽が昇る前から素振りをしていた厳真は心の内で毒づいていた。普通は集中していないと型は崩れてしまうが、

型を学んで80年の厳真にはもはや心と体は分離している。

おそらくだが、気絶しても素振りをし続けるのかもしれない。

軽く汗をかいた厳真は、携帯電話を使って電話をかける。

ブルルルル　ブルルルル　ブルル、プチッ

3回目のコールで相手は出た。

『はい、私です。師範から掛けてくるなんて珍しいですね。今日はどうなさいました?』

「うむ・・・」

『?』

「実はお前に頼みがあるんじゃない。孫が3ヶ月前から行方不明での」

『ええっ!? 大事じゃないですか!』

「それでの。あやつはヤクザでもかまわず喧嘩を吹っ掛けるからの。ヤクザを束ね上げるお前なら調べられると思っの」

『わかりました! 鍋島組が総力を挙げて探し出して見せます!!・・・しかし、我々は西日本に傘下の組はいませんので日本全国と言うわけには・・・』

「それは心配いらん。他のつてがあるのでな。だからお前は東日本を頼む」

『分かりました。鍋島組総裁【鍋島^{なへしま}雪斗^{ゆきて}】。全力で探さして頂きます』

鍋島は興奮気味にそう言う。

「うむ、ではな」

鍋島雪斗。彼は厳真の弟子の一人である。

彼は元々総裁になるつもりはなかったが、抗争で命を狙われた際に厳真に命を救われた。

偶々逃げ込んだところが厳真の道場だったのだ。

事情の知らない厳真は快く彼を家に泊めてしまう。

それを知った相手側の幹部が拳銃や日本刀などを持った30人が夜襲を行った。

不穏な気配を感じ取った厳真は30人全てを素手で行動不能にする
と、

今では禁術になっている技で幹部を拷問して全てを話さした。

雪斗はこの時、厳真に惚れこみ、雪が降りしきる中で1週間門前で座り続けた。

その心意気を良しとした厳真は彼を弟子にすることを決め、抗争に介入した。

まず抗争の原因となっていた幹部同士の組を制圧して拘束した。

それを2人の総裁、雪斗の祖父と関西の組の総裁に手紙つきで送り返した。

『抗争をやめよ。さもなくば存在自体をつぶす』

幹部の組達は激怒し、道場に殴りこもうとしたが、総裁たちは止めた。

なぜなら分かっていたからだ。

厳真が一声かければ、全国の武術家の9割が敵に回るからであった。それほどまでに『川崎家宗主』の言は重い。

それ故に『雪斗は儂が預かって育てることにした』と言われてもどうしようもなかった。

雪斗は総裁が父に代わると、厳真のもとを發つて若頭となる。

そして現在、彼は総裁となり、東日本全てをまとめる総大将となったのだった。

彼は厳真に対する恩返しのため、今回の頼みを快く引き受けた。

続いて厳真は違う番号に電話をかけ始めた。

ブルルル、プチッ

一回目のコールで相手は出た。えらく早い。

『師範！お久しぶりです！ようやく警視庁の特別顧問を受けてくれる気になりましたか！？』

（うるさいな）

厳真は受話器の向こうから聞こえてきた大音声に眉をひそめる。

電話の相手は【太田おおた 泰嘉たいか】。

日本全国の警察のトップである警察庁長官を務めている男である。性格は温厚、しかし一度仕事に関われば情け容赦はなくなる。

警察の幹部以上は現場に出ることはまずなく、

上層部は現場を軽く見がちであった。

それに違和感を感じた太田は必要最低限のコネだけを使い、今の座

に登りついた。

その後、彼は現場を軽く見ないことを暗黙の了解とした。おそらく、今この時も彼の周りでは彼を蹴落とすべく裏工作が進んでいるのだろう。

しかし彼はそれを阻止すべく動いてはいるが、今の座に執着する気はないようだ。

なぜなら一度なってしまうえば影響力は計り知れないからである。

彼もまた、警察学校時代、特別講師をしていた巖真を師事していた。その際に巖真の精神を知り、今の考えを得たらしい。

「いや、何度も言っているが儂ももう歳じゃ。体の節々が痛うて痛うてな。今回掛けたのは別の要件じゃ。実はお主に頼みがあつての。実は……」

『成程……。わかりました。しかし西日本だけでよろしいのですか？東日本は……。』

「うむ、実は東日本は別の者に頼んでおつてな」

『誰です？』

「鍋島の坊主じゃ」

『鍋島？……。ああ、鍋島組ですか。それなら東日本は大丈夫ですね。しかし、大々的な捜査が無理ですからあまり役に立たないかも知れませんよ？』

「安心せえ。他にも当てがあるからの」

『そうですか。では失礼して「待て」・・・はい?』

「毎日の鍛練は怠ってはおらんじやろうな?」

『もちろんですとも。毎日執務室で型をして、秘書に睨まれてますよ』

「そうか、ならばよい」

厳真はその後、財政界、政治界、武術界、スポーツ界と様々なつてに電話をかける。

出た相手は誰もが快く琢磨搜索を引き受ける。

厳真は鍛練こそ厳しい物の受けは良い。

どんな者のどんな言葉も真剣に考えて答え、全力で言を返すからであつた。

それから2カ月、半年と時間が過ぎていく。

いまだに確かな情報は来ない。

厳真は珍しく早朝の鍛練を取りやめ、道場で黙想をしていた。

いつもなら愛刀【澄和】^{すわ}をそばに置いているが、

今はなぜか琢磨に渡すつもりだった【琢磨】を置いてある。

何やら虫の知らせのようなものを感じたのだ。

以前も何度かこのようなことがあった。

実はこの時、厳真はこの世の真理を体得していた。

80を超えた時、彼は自らの内に何かが流れるのを感じた。

90の時、彼は大気を漂うものを『気』と名付けて感じるようになった。

95の時、彼は大気の『気』すらも操ることを可能にした。

その『気』が今日は朝からひどく乱れていたのだ。

道場で黙想することで、より強く『気』を感じて異変を探る。

「じいちゃん!」

厳真はゆっくりと眼を開けた。

眼の前にはガラスのような門がそびえ立っていた。

存在感が他とは異なる。

おそらく『気』の塊なんだろう、と厳真は考えていた。

「・・・琢磨か。元気でやってるか？」

「ああ、じいちゃん。ごめん、勝手にいなくなっ

「別に構わん。お前は5歳のときにも修行が嫌だとか言って五日も

家出したんだ。いまや高校生、1年近く家出してもおかしくは無いさ」

琢磨の顔が紅潮していく。

（後ろにいるのは彼女か？全く鍛練をさぼりおってからに・・・）

「そんな昔の事をいつまでも。・・・あ、あのさ、じいちゃん！俺・・・」

「皆^{みな}まで言うな。儂はお前を赤ん坊の頃から育ててきたんじゃ。お前の考えなんぞ手に取るように分かるわい。やりたいことを、目標を見つけたんじやろう？儂の事なんぞ気にするな。お前はお前の道を進め。立ち止まったって振り返ったってよいよい。大事なことは自分自身が決断することじゃ。誰かに意見を聞くのも大事じゃが、必ず自分のことは自分で決めよ、いいな」

「じいちゃん・・・ありがとう」

そつと、ガルムは後ろから琢磨の肩を持つ。

「あなたがタクマ君のおじい様ですね。私はこの子に『戦い』と『生き方』を教えている者です」

「そうですか、あなたが・・・。お名前をお聞きしてもよろしいでしょうか」

「ガルムⅡグランベルツと申します」

（外国人か？まるで日本人のようだな・・・。いやそれよりも、何

という使い手だ。この人なら)

「ガラムさん。どうかわが不肖の孫をよろしくお願いします」

タクマの祖父はそういつて頭を地面に付くぐらい深く下げた。

「確かに、お預かりいたしました」

ガラムと名乗る男は苦しそうに言葉を返す。

責任の重さを感じ取っているであろう。

もしくは、敵真の琢磨への期待を感じ取ったのかもしれない。

しかし、彼も武人であるならこの気持ちも分かるのだろう。

弟子が成長してくれさえすれば師はそれ以上を望まないことを。

「ガラムさん、そろそろ私の魔力が尽きます！」

ガラムは後ろの男に言い返す。

あの男も不思議な『気』をもっておるな。

剣術ではないようだが武術はたしなんているのであろう。

「後どれだけ持つ!？」

「10秒と持ちません！」

どうやら、これで琢磨の顔は見納めとなるようだ。

門は徐々に閉まっていく。

(もう儂に未練は・・・ある！)

巖真は片膝を立ててそばに置いてあった刀【琢磨】を琢磨に向かつて投げる。

これは気をまとわせて作った特殊な刀だ。
あの異質な門も『氣』であるならば抜ける筈だ。

「餓別じゃ、生きろよ、琢磨！」

ゴゴゴゴゴ、ガダン

門は閉まりきった。

門は四散して『氣』の塊となった。

これも暫くすると自然消滅することだろう。

巖真は考えていた。

琢磨の声が聞こえた時は怒鳴り散らすつもりであった。
いままで何処に行っていたのかと。何をしていたのかと。
しかし琢磨の顔を見た瞬間、全ての考えは消し飛んだ。

『男子三日会わざれば刮目して見よ』

たった3日で変わるのであれば、1年でどれだけ変わるのか。
琢磨は立派に成長した。

それもこれもあのガラムという男の手腕なのであろう。

あの男は『生きる』ことが何なのかを知っている。

全てを任せても大丈夫だろう。

何も、そう。何も問題は存在しない。

これで弟子達は全員が儼の元を巣立っていった。

巖真は搜索に協力してくれた弟子達に電話が掛けようとして、やめた。

代わりに筆を取り、手紙を書くことにした。

『僕は孫に再会することが出来た。奴は武術家として、1人の男として立派に成長していた。

僕と同等、いや、僕以上の師にも出会ったことでさらなる成長を遂げるのであろう。

僕の本会は達成した。お主らのような武術家を未来に輩出することが出来たのだ。

この世に愛情こそあるものの、未練など微塵も存在しない。

僕は天に、お主らと出会ったことを感謝しに行くとする。川崎

厳真』

東京の夜

ネオンによって煌びやかに明るく照らされる中、

ある一帯もまた、明るく照らし出されていた。

しかしそれはネオンサイトなどではない。

真っ赤に燃えあがる炎である。

野次馬が集まる中に異質な2人の姿があった。鍋島と太田である。

彼等は川崎邸が火事であるという状況を聴き、部下の制止も振りはない、呆然と炎に見入っていた。

『川崎流本家道場全焼。川崎家宗主【川崎 厳真】死す』

その情報は翌朝には全国の川崎流を元にする武術家全てに広まっていた。

その一方で、琢磨については何一つ情報は回っていなかった。

警察と政治家が琢磨の存在自体を全てもみ消したのだ。
これは厳真の命令であった。息子の成長を妨げぬように、と。
意味など彼らには分からなかったが師の言葉である。
異論など有る筈がない。

【川崎^{かわさき} 厳真^{げんしん}】享年99

川崎流武道場宗主。

直接の弟子の数83人。指導人数1000人以上。

川崎流傘下（非公式）数5。

川崎流派生流派23。

52歳の時に妻【千絵^{ちえ}】を嫁に取るが出産後に死亡。

息子夫婦は旅行中に孫息子^{ひ孫}と供に事故死。

20XX年9月22日、突如焼身自殺。

彼自身は火事の後も、一步も動かずに1人黙想していたことから自殺と断定。

彼に親しかつた者達が何か事情を知っているという噂があるが、全員がこれを否定。

我々記者団は真相を知ることとは出来ないだろう。

番外編 #31 生き様（後書き）

というわけで、厳真さんがお亡くなりになりました。
ファンタジー戦記物は人が死にやすいとはいえ、
このような近しい人や真面目な人が亡くなるのは心が痛くなるもの
です。

ちなみに、厳真さんをギルドランクで表すとしたら
クラスSとなるでしょう。

理由はただ一つ、体力です。

これさえ全盛期のままであればSSSすら超えてしまうでしょう。

『
気』

気は魔法や何かと一緒にされそうですが、実は似て非なるものです。
魔法は言ってみれば大気（空気）のようなものです。

気は世界を構成するもの、いわゆる分子とか原子などを指します。

少しかじったことがあるならば分かると思いますが、

そう、魔法は気^キで出来ているのです！！

それを自在に操る厳真はいわば創造神と同じなんです。

創造の仕方が分かっていないだけです。

#32 聖都デイルティパレス

聖都デイルティパレス

竜人族を除くすべての部族が信仰するナバルディ教の総本山である。また、それと同時にクラリー聖王国の首都でもある。

都のあちらこちらには小さな教会が点在しており、中心には2つの大きな建物がある。

1つは『ナバルディ大神殿』

大賢者ナバルディの栄誉をたたえると同時に、神の御声の届く場所でもある。

神の御声を聞き、信望者に伝えるのが神官の役目である。

大神殿の内部に存在する『陽光の間』にて、

【姫巫女】は神の相手をするといわれている。

姫巫女とは神に寵愛された者であり、

出自は問われないが、女性が必ず選ばれる。

教皇は姫巫女ほど御声を聞くことは出来ないが、

それでも神と言葉を交わすことが出来る。

教皇は姫巫女と供に信者を神の意のままに動かすことが使命とされる。

つまりは、

教皇は指導者であり、姫巫女は象徴なのだ。

そして大神殿よりは小さいが、それでも他の建造物よりもはるかに大きい物が『皇立図書館』である。

皇立図書館とは、大陸上のほぼすべての本が収蔵されている場所だ。

図書館は代々、教皇もしくはそれに準ずるものが管理するという決まりがある。

現在の院長はファンダ「エマンスという翼人族の老人である。

彼は現教皇レオーニールの古い友らしい。

院長は教皇の御意見番とされ、実質的にNO・2に位置している。

また、図書館の蔵書は主に3種類に区分されている。

- ・ 一般図書

絵本から物語・詩・図鑑などで、子供から老人まで幅広い層が通う

- ・ 古代図書

古代に書かれた文献を主に蔵書されており、魔法書もここに分類されている

- ・ 禁文書

思想的・実的に読むことを禁止されている文献
隠されている場所は司書しか知らず、教えることを禁止している
中には司書すらも知らない隠し場所もあるとか・・・

今ここに、3人の旅人が足を踏み入れる。

流れは止まらない、速くは無くとも少しずつ、しかし確実に速さを増している。

気付くものは少ない。気付く事が幸運なのか、それとも・・・

#33 酒場の主

ナバルディ教徒は信条を3つ持つ。

『清』『聖』『静』である。

『いつでも清純であれ』

『心に聖を携えよ』

『静を乱さず、求めるな』

いくら敬虔な教徒といえども、人間『静』だけでは生きていくことは出来ない。

そのため、敬虔な教教程、騒がしい酒場へとやってくる。

~~~~~ 聖都 ギルド中央支部 1階 ミラの酒場 ~~~~~

ギルドが営む酒場は規模としては中級程度だが、信用や食べ物の美味しさから、町の人から重宝されていた。

「ミラさん！<sup>ラギー・グリアン</sup>赤果獣の煮込み3人前です！」

「ミラ料理長！カジキマンタの刺身2人前ですわ！」

「ミラ様！<sup>マゲマラー</sup>灼熱魚の地獄ステーキ7人前ですわ！」

従業員は次々と厨房に声をかける。  
それに対して厨房に立つのはただ1人のおばちゃんだった。

【ミラ＝アークネス】

クラリー 聖王国ギルド中央支部副支部長兼料理長

ギルドの副支部長と支部長は文官仕事の為、ほとんど仕事は無い。そのためミラは趣味の料理を追求し続け、ギルド内で酒場を開いたのだ。

「あいよ、ちょっと待ってな！・・・おいあんた達！15番卓のお客様が手を挙げてるよ。さっさと行って注文聞いてきな！」

「はい！私が行きます！」

厨房からは手の先しか見えない程混雑しているにもかかわらず、それを見つめるミラに従業員達は感心する。

「はい。お待たせしました。何にいたしましょうか？」

従業員は人の間を縫って目的の卓へと辿り着く。  
座っているのは3人の男女だ。

人のよさそうな男性、無口な少年と、はしゃいでいる少女だ。

「量の多そうな肉はあるか？」

「えーっと、ではデカトリスのステーキはいかがでしょう？」

「じゃあそれで」

「私はホ口ホ口鳥の手羽先とハルの実プリンをお願い」

「はい。分かりました。あなた様はどうしますか？」

従業員は青年を見る。

「俺は料理はいい、酒を貰いたい。ルツの果実酒は残ってるか？」

「はい！一昨日大量に入荷したんでいくらでも大丈夫ですよ！」

すると青年は微笑みを浮かべ、

「そうか、ならルツの果実酒を樽2個くれ」

「・・・え？」

「ん？騒がしいから聞こえなかったか？すまん。ルツの果実酒を樽2個くれ」

従業員は自らの聞き間違いではないと思い知り、声が自然と大きくなった。

「わ、わかりました。ルツの果実酒樽2個ですね！」

ざわ・・・

辺りは従業員の突然の大声にざわめいた。

「おい、まじかよ、今の言葉」



「間違いねえよ、俺今聞こえたもん」

ざわめきは収まらず、どうしたもんかと青年は考えていた。

（・・・抜くか？）

剣の柄を手を掛けた所で、

「喧嘩はよしてくれよ。ガルム」

ふと後ろを振り向けば、両肩に樽を担いだミラの姿があった。

「ほら、お望みの樽2個と料理だよ」

「おお、うまそうだな。師匠、もう食べて良いか？」

琢磨は待ちきれないといった様子で尋ねる。

「別にいいぞ。・・・それで何でお前が来たんだ？厨房はどうしたよ？」

ミラは椅子を他の卓から引つ張つてくるとガルムの対面に座った。

「私の聞き間違いじゃ無けりや、師匠って言ったかい？」

「そう言ったよ。なんだ？せうろく耄碌したか？その年で」

「馬鹿言ってんじゃないよ。私はまだ43だよ。ぴちぴちの乙女だよ」

「ぴちぴちってそんな範囲広かったか？どうでもいいがよ。．．．ん？」

ガルムは、ミラの後ろから近付く数人の男を見た。

「ようよう兄ちゃん。その酒俺たちにも分けてくれねえか？ま、断つても勝手に貰うがよ。げへへ」

「下衆な笑いをするなよ。耳が腐って落ちちまうだろ」

「な、なんだと！おい、てめえら！やつちまえ！」

ガルムの返しに男は赤面し、背中に担いだ斧を掴む。

「おい、いいのか？」

「なんだあ？今更謝ったって許しはしないぞ？」

ダアアン！

「許しはしないのはこっちだよ！誰に許可貰って喧嘩をおっぱじめる気だい！」

ミラは男以上にゴツゴツした手で思い切り机を打ちつけ、男達を睨みつける。

女性とは思えない気迫に、男たちは明らかにビビっているのが分かる。

しかし、今更引けないと思ったのか、男たちは武器を抜いた。  
抜いてしまった。

「手はいるか？」

ガラムはミラの背中に声をかけた。

ミラは振り返らずに落ち着いた声で聞き返す。

「本気で言ってるのかい？この私に？手をだつて？」

ガラムは深く座り直して弟子たちの食事風景を眺める。

（こいつらも手を止めない、か。でかくなつたもんだ）

「落ち着いてるんなら良いさ。激昂してたら危ないしな、相手の命が」

「ふん、私への心配はないのかい？」

「それこそ本気で言ってるのか？お前に？心配？」

「ごちゃごちゃ言ってるじゃねえよ！俺の斧を喰らいやがれ」

戦闘の男は身の丈もある戦斧をミラに振り降ろす。

それをにやついて見てるのは外から来た人間だけで、

それ以外は我関せずといった様子で食事を続けている。

男も口先だけではない様で振り降ろす斧もそれなりに速い。

（クラスはCの上位ってとこかな）

ガラムは頬杖を付きながら戦いを見ていた。

ミラは軽く鼻を鳴らし、軽々と斧を片手でつかむ。

まさか素手でつかまれるとは思っておらず、男の目は両目を見開いた。

しかし、男も冒険者。すぐに斧を引こうと力を込めるがピクリもしない。

ピシピシピシ　バキリ

ミラは気迫を闘気に変え、斧を素手で握り割った。

これには周りのよそ者も啞然とした様子でみつめる。

「てめえら誰の店で得物抜いてやがる！次この店で暴れるって言うなら問答無用で叩き潰すぞ！」

闘気は更には殺気になり、男達は戦意を喪失し逃げ帰った。

ミラは不愉快そうに椅子に座った。

「おいおい、現役の時よりも力上がってんじゃないか？」

「そりゃあね。私はギルド運営も任されてるんだよ。強いままなのは当たり前じゃねえか」

「なあ師匠。何で・・・モグモグ・・・運営してたら・・・むしゃむしゃ」

呆れた様子でガラムは琢磨に言う。

「食べるか喋るかどっちかにしろ」

「・・・ゴックン。何で運営してたら強いままなんだ？戦線から離れてるから徐々に弱くなるのが普通じゃないのか？」

「いいかい、坊や。ギルドってのはね、出張所や見習い以外は元々冒険者なんだ。これは偶々何かじゃなくて絶対的な決まりなんだ。現役時代Bクラス以上。勤めていてもCクラスを制圧するぐらいじゃないと受付にはなれないの。クレーマーも多いからね。そして私の役職は各国にあるギルドの頂点、ギルド中央支部の副支部長。流石に弱いと務まらない役職なのよ。そのために厨房にある調理器具は全て鋼鉄製、料理する度に鍛えられるのよ。どう？驚いた？」

「すごいな。案外ギルド職員って大変なんだな」

「そうよ、エリートなのよ」

「さて、お前ら食い終わつたな。ミラ、悪いが外してくれないか？ここから先は俺達の話だ」

ミラは口を尖らせて文句を言う。

「何よ、まだ全然話してないじゃない」

「しばらくはここに滞在する予定だ。話す時間は幾らでもある」

「分かったわよ、食器下げてもいい？」

「「お願いします」」

琢磨とアシエルは頷いた。

ミラは食器を両手両腕に持って立ち上がる。

「じゃ、ゆつくりしていつてね」

ガラムは軽く手を挙げてひらひらと振る。  
そして2人に向かい、真剣な目を向ける。

「さて、2人とも、これからについて少しばかり話そうか」

### #34 足りないもの

「タクマ、アシエル。お前たちは今、自分達に足りないものがある。何か分かるか？」

ガルムは酒を樽半分近くを、  
まるで水を飲むかのように飲みほしてから本題に入った。  
・・・酒を口に運ぶことは止めずに。

「何って、ギルドクラスですか？」

「お前らはもうAクラスだ。そうじゃない」

アシエルの答えをガルムは一蹴する。

「なら武具ですか？」

「今お前らが身につけている者以上の物となると、購入金額で国が傾くぞ」

「ええっ！？これってそんなに高い物なんですか？」

アシエルは服や武器をまじまじと眺める。

「武器はそこそこだがな。防具は超の付く一級品だ。王族でも手に入りにくい素材を使ってる」

「は、私達はそんなにいい物を着てたんですねえ」

ガラムはコトリとコップを置くと、  
片肘を付いて琢磨の方を向く。

「さつきから黙って俯いてるが、お前はどうか？タクマ」

「・・・・・・・・経験」

「・・・・ふう。タクマの言うとおりだ。お前たち2人は圧倒的に経験が無い」

そこまで聞いてアシエルは大きく手を挙げた。

「おもしろさまー、質問がありまーす！」

「ん、どした？」

「でもさつきも言いましたけど私たちはクラスAですよ？十分経験を積んだと思うんですけど？」

アシエルのその言葉を聞いたガラムは、眼光を鋭くした。

「アシエル、パレイナの薬草は日向と日陰のどっちに生える？」

「え・・・？ひ、日向？」

「日陰だ。中毒性のあるコア茸の禁断症状は？」

「・・・・・・・・」

「幻覚と平衡感覚の狂いだ」



アシエルの表情は暗い。

自分の失言に気付いたのだ。

ダァン！

ガルムは拳を思い切り机に打ち付けた。

アシエルは体を縮込ませる。

酒場は異変を感じたのか静まり返っていた。

しかしガルムは一切の気にも止めずに、

「アシエル、俺は修行中にも何回も言ったよな？『過ぎた自信は身を滅ぼす』と。お前は俺から何を学んだ？ああ？今のお前はな！アシエル！強さはクラスSにも並ぶさ、お前の思うようにな。だがな！経験から言うところクラスCの連中にも劣ってるんだよ！俺が今までお前らに教えたのはなあ。」

ガルムは座り直し、自分を落ち着かせるように酒をあおる。

「・・・ふう。俺が教えたのはな？中級以上の魔物との戦い方だけだ。ゴブリン達とも遭っても俺は何も言わなかった。あれは何もお前が正しい戦い方だったわけじゃない。あんな奴らはミスしても死にはしないからな。困るのはミスして死ぬ可能性のあるやつらだけだ。数をこなすためにお前達には様々な依頼をもってきてやった。でもな？それは所詮は修行の一環なんだよ。別にさっきの言葉だけで自分なりに何か学んだらかまわなかったさ。でもな？今言ったようなことは基礎の1つなんだよ。いいか？学ぶことに終わりにして無いんだ。俺だってそうさ。この世のどこにも全てを知る奴な

んていないのさ。もしいるというなら、それは神ぐらいなもんさ。  
分かったか？アシエル、タクマも」

「はい、ごめんなさいです」

アシエルは涙を流しながらもしつかりと返事をし、  
琢磨もガルムを正面から見返してしつかりと頷いた。

「そうか、分かってくれたか。それでこれからの事だけだな？お前  
達には俺のもとを巣立ってもらおう」

バツと2人は顔を上げる。

2人は驚愕と絶望を足して2で割ったような顔でガルムを見る。

「別に見捨てるわけじゃねえぞ、先に言っておくがよ」

その言葉を聞いてほっとする2人。

「今言ったようにお前らには経験を積んでもらう。この街は首都だ  
から何でもそろってる。特筆すべきは巨大な図書館だ。分からない  
ことは何でも調べたらいいさ。ちよつと興味の持ったことでも構わ  
んさ。存分に利用するといい。そしてあらゆる依頼を受ける。草む  
しりから宝探しまでな。もし受けるものがなくなったら街を移動し  
てもいい。一応このギルドには冒険者専用の部屋を2部屋取って  
やったから使え。ただ移動する際にはどこに移動するか受付に伝言  
を残しておいてくれ。来るべき時が来たら俺が迎えに行くからよ」

「師匠、来るべき時って具体的にいつなんだ？」

琢磨はガルムに疑問を投げかける。

「最低1年、長くて5年だ」

「そんなにですか!？」

アシエルは叫ぶ。

「これでも短い方だ。昔は短くて10年とかもあったんだぞ？俺はお前らには期待してるんだ。別に期待の応えろとは言わん。でも失望はさせんでくれよ？」

「が、頑張ります」

「おうおう、それじゃあ頑張れよ」

「師匠は俺達と離れている間は何をするんだ？」

「ん？俺？俺はギルドの要請依頼と放置依頼を受けて回るつもりだ」

「なんだ？それ」

「あゝ、要請依頼は『お前に合った仕事だからやってくれないか？』って物で、放置依頼は『難しすぎる、か、割に合わないから放置されてる』って物だ。ギルドの場所によっては回せる冒険者がいないことが多いんだ。だから無駄な死者を出すぐらいなら放置させて強い奴が来た時に回すことが決まりとなってるんだ。お前らの修行のために一切の要請依頼は放置してるからなあ。プラチナとしての仕事をこなさなきゃあなんのだ」

「要請依頼って放置してもいいのか？」

琢磨は眉をひそめてガルムを心配する。

「心配してくれんのか？ありがとな。まあ、放置したら本部の方から睨まれるよ、結論から言うとな。でもその程度気にすることはないさ。今回はお前達の修行のためだし代わりの依頼も多く受けてるしな。お前たちもAクラスだからこれからは要請依頼も増えてくるだろう。受ける受けないはお前達の自由だが、可能なら受けるといい。もしプラチナを目指すなら出来るだけ受ける。そっちの方が良いことがあるかもな」

「受けなかったら罰則はあるのか？」

「なあんにも。ただプラチナは勅命依頼つてのがあつてな。総裁から直々のありがたい依頼が回ってくるんだよ。それは『受けない』って選択肢が無いんだよ。面倒臭いことにな。もし断ったら・・・」

「断ったら？」

冷静に琢磨は聞き返す。

その様子にガルムは嘆息する。

「・・・はあ。もつと怖がれよ。変な所で可愛げのない奴だ。ま、その先はプラチナに昇進して総裁から直接聞きな」

ガルムは酒樽を直接つかむと一気にあおった。  
どうやらもう1個分飲み干したらしい。

「さて、と。お前ら聞いておきたいことはまだあるか？暫らくは聞けねえぞ」

「師匠、あと1つだけいいか？」

「おう、何だ？」

「図書館ってどうやって利用するんだ？」

「どうやって？・・・あー、図書館は基本貸し出し禁止だ。入るのに身分証明書はいらん。後の詳しいことは司書でもとっ捕まえて聞け」

ガルムは立ち上がり、誰の目も無いことを確認すると、素早く残った1樽を異次元へと保管した。

「じゃあな。愛する弟子達よ。どうか死ぬなよ。戦争じゃないから武運は祈らんからな」

そう言っただけでガルムは手を振ってギルドから出ていった。

残された2人はそれを無言で見送っていた。

## #35 ミラと・・・

これからの活動について話していた琢磨とアシエルの前に果実ジュースのコップが置かれた。

2人が腕を眼で辿ると、酒場の店主のミラが立っていた。

「頼んでませんよ？」

眉をひそめた琢磨はミラに申し訳なさそうに言った。

「サービスよ。宿の滞在費と暫くの最低限の食事代はガラムから貰ってるよ」

ミラは空になっていたコップを他の従業員に渡して、自らは椅子に座った。

「厨房のほうは良いんですか？」

今日は日をまたいでしまったが、酒場の活気はまだまだ衰えを知らない。

依頼に出ていた冒険者達が疲れを癒しに来るため、今の時間は酒場としては稼ぎ時であり、アシエルの疑問はもつともだった。

「いいいいの。私じゃなくても厨房は回るしね。それとも私と話をするのはいやかしら？」

「そ、そんなことはありません！」

首が千切れんばかりにアシエルは首を振る。

ミラはかわいいなあ、と呟いてアシエルをからかう。

琢磨の予想通りアシエルの頬に朱が差すのを見て苦笑した。

「ふふふ。それで君達はこれからの予定は決まったかい？」

「師匠の言ったとおり、さまざまな依頼を受けるつもりです。薬草摘みや鉱石掘りも含めて」

「それがいいわ。さて、それじゃあ本業のほうの仕事もこなしますか」

よいしょとミラは立ち上がると、

「付いて来な。あ、コップは持ってきていいよ、今回だけだけど」

2人はお互いに顔を合わせるも何の答えも出ないため、小走りでミラについていった。

副支部長はやはり偉いらしく、ミラを見咎めた職員達は、立ち止まって胸に手を当てて深く頭を下げる。

「お疲れ様です、副支部長」

「何かありましたら何なりとお申し付けください」

「ん」

ミラはそれらに軽く手を上げて通り過ぎる。

やがてミラに付き従った2人は4つの大きな掲示板にたどり着いた。

内3つはカラフルに装飾されており、それぞれ大量の紙が貼り付けてあった。

残る1つは少し離れた位置にあり、他よりもかなり小さかった。その掲示板には2、3の紙しか貼り付けてなかった。

「いいかい？ 右の茶色いのが採掘依頼、左の緑色のが採取依頼、そして中央の赤いのが討伐依頼よ」

そこに1組の冒険者一行が現れ、一枚の依頼書を手に取るとソレを破って受付に渡した。

「依頼書は今みたいに破りとってくれたらいいからね。そしてこれを受付にギルドカードと一緒に出してくれ。そうしたら依頼開始だ。ここまではいいかい？」

2人が頷くのを確認すると、ミラは受付の女性から何かを受け取って2人に見せた。

「これは兎王<sup>ラバン</sup>の角よ。ところでガラムは修行中戦利品をどうしてた？」

「戦利品ですか？ いつもは市場や薬師などに渡してましたけど・・・」

「あー、そうかい。じゃあ一応。まれに希少性な部位を持つ魔物がいるの。それを剥いでギルドに持ってくると定められた額で買い取るのよ。それで一定のギルドポイントを加算・・・する」

ミラの説明は尻すばみになり、宙を見つめて遠い眼をした。



「あー。だからギルドに譲らなかったのか。もし譲ったらクラス昇格を早めちゃうもんねえ。相も変わらずガラムは……。ってそれはいいや。まあ、そんな感じでギルドは買い取るからね。ちなみに買い取った部位は必要な薬師や商人ギルドに卸してるから安心してね」

「どんな魔物が希少品を持つんですか？」

「今見せた兎王ラバンの角・薔薇蟻ローズアントの胃酸・槍大茸マタンゴの笠、それから……。多すぎて言えないわね。ねえ……」

ミラが受付嬢を振り向くと既に机の上には2冊の手帳サイズの本が置いてあった。

「あら？仕事が早いわね、流石よ。はいこれ」

ミラは2人の手に本を置いた。

### 【魔物大全：第3版】

著者：ヴァール＝ワナー

シヤルベ王国元師団長の記した魔物の全てを記した書物。

故ヴァール氏は武術とともに絵描きとしても大成しており、4国の現王の肖像画も氏の作品である。

氏は齢60で大陸を旅し、10年掛けてこれを完成させる。

記載内容は全長・体重・攻撃の種類・対処法・亜種の有無等である。また、冒険者にも重宝されている。

他に、【薬草大全】【海漣大全】【作物大全】がある。

アシエルは恐る恐ると言った感じでミラに声をかけた。

「あの、ミラさん。私これ持ってます。私もお師匠様の下に来るまでは冒険者をやっていたので」

そう、アシエルも元をたどればいっぱしの冒険者なのである。

魔物大全は冒険者の必需品であるので、アシエルも当然ながら所持していた。

ガルムは、2人の修行の際には依頼を持ってきて2人にこなせるということしかしなかったため、

琢磨はコレを手に入れることはなかったのである。

その上、アシエルも個人的コレを使うことをガルムから言われているため、

琢磨は存在すら、今の今まで知らなかった。

「あら、そうなの？でもどうせボロボロでしょ？ここにはまだ何十冊もあるから貰ったときなさい。1冊が2冊になったところで大きな差はないもの。それから坊やに言っておくわ。その魔物大全は1番新しいけれど完璧なものではないわ。なぜならどんな魔物も環境によつて生態が変わるの。だから書いてある内容と違うことを発見したら書き込みなさい。それがコツよ」

「そうなのか、ならペンも用意しないとな」

琢磨はミラの助言を聞くと、用意するペンを売っている場所を町を散策していたときのことを思い出して、頭の中で探し始めた。

「そ・こ・で？このペンを使うといいわ」

ミラは懐から鮮やかな赤と青の2本のペンを取り出した。見た感じノック式のボールペンだ。

「これは私が今の地位に付いたときに友人から貰ったものよ。私が持っただけでも仕方ないからあなた達にあげるわ。使われなきゃこのペンたちも可哀相なものね」

アシエルは赤いほうのペンを受け取ると、待ちきれないとばかりに手の甲へ試し書きを試みる。

しかし、ペンを傾けたり力を込めたりしても、一向にインクが出てこない。

更には魔物大全に書こうとしても、結果は同じだった。

「ミラさん、これインクがないか壊れてますよ」

がっかりと肩を落としてアシエルはペンをミラに向ける。

ミラは無言でそれを受け取り、アシエルの手の甲にすらすらと書く。一瞬キョトンとしたアシエルは自分の手の甲に写る赤いインクと、ミラの手にあるペンを交互に見つめる。

確かにさっきアシエルが試したらインクは出なかった。しかし実際に手の甲には赤い字が。

ミラは無言で意味ありげな微笑を送るだけである。

「これは魔道具の一種よ。マジックアイテム使用する魔力は最下級の属性魔法の数十分の1、気にする程度ではないわ。使い方は簡単。ペンに魔力を通わせるだけ。今書いたように赤いペンは赤を、青いペンは青の字が書けるわ」

得意げに語るミラは、昔そう友達に言われたんだけどね、と付け加えて笑う。

そこで琢磨は、

「・・・俺は魔法が使えないんだけど」

ミラはその言葉を聞いて、えっ、と驚きの声を上げる。

「そうなの！？ゴールドクラスだから魔法を使えるかと思ってたわ。  
・・・そうねえ、いいわ！私の執務室に行きましょう。そこで魔法  
を教えてあげるわ」

ミラに連れられて2人は副支部長執務室へと足を向けた。

## #36 魔法の力（前書き）

遅くなりました事をお詫び申し上げます

### #36 魔法の力

~~~~~ギルド中央支部 副支部長執務室~~~~~

支部長の執務室は最上階に、副支部長ミラの執務室はその下にある。執務室は本棚と仕事机、来客用のソファ―とテーブルがある質素な部屋である。

執務机のさらに奥には大きな一面張りのガラスがあり、そこから大神殿、皇立図書館が見える。

支部は聖都では3番目の高さの立てもであるのだ。

このことから聖都ないにおけるギルドの重要性がうかがえる。執務室の隣の部屋はプライベートルームがあり、ミラはそこで寝泊りをしているらしい。

自らの執務机の中から1個の水晶を取りだしたミラはおもむろに話し始めた。

「これは魔結水晶。水晶の中に5属性の魔素が均等に含まれてるの。ちなみにレア度は上から2番目のAクラスよ」

琢磨は無色で透き通った水晶を見つめながら、疑問を口にする。

「魔素っていうのは？」

「魔力を構成するものよ。5属性の魔素に加えて光・闇・無属性の魔素もあるわ。魔法師は自らの内魔力で空気中の魔素に働きかけて魔法を作り出すの」

ミラはそつと水晶を来客用のテーブルに置くと、琢磨とアシエルを

ソファーに座らせ、
自らも反対側のソファーに腰を下ろした。

「いい？人には魔法には向き不向きがあるわ。ほとんどの人は魔法師が使える属性は2種類まで。得意魔法は中級から上級、もう1種類は出来て初級が良い所。中には3・4種類使える人もいるけど1つでも中級が使えるはその人は才のある人よ。また逆にほとんどないけど魔力を全く持たない人もいるわ。その人は当然魔法を使うこともできないし、魔具を使うこともできないわ。あれは内魔力を引き出して使用するものだからね」

「・・・」

ぼつりと琢磨が何かを呟いた。

その呟きはミラに、隣にいるアシエルにさえ聞こえないほど小さかった。

「ん？何だい？」

「師匠は・・・師匠はどのくらいなんだ」

その言葉に、ミラは眉をひそめ、腕を組んで何かを考える。

その姿は部屋の空気ととても合っており、1枚の絵になりそうなほどである。

暫らくしてミラはおもむろに口を開いて話し始める。

「トップクラスね。ガラムは剣術と体術を中心に戦って、魔法を使うところを見る人は殆どいないの。でも私はわかるわ。あの知識に
対魔術、その魔法の射程距離・攻撃範囲・持続時間を知っていないと出来ない芸当が多すぎるの。私はプラチナクラスとの交流は少な

いからギルド最高戦力者達の実力はあまり知らないけれど、知っている中ではガルムが1番魔法に関しては強いだろうね」

「師匠は1番強いのか・・・」

噛みしめるように琢磨は一語一語ゆつくりと紡ぎ出す。
その様子にミラは一抹の不安を感じて言葉を足す。

「あんたが今どんな気持ちなのかはわからないけれど、変な気は起こさないことだね。ガルムの強さははっきり言って異常よ。他のプラチナクラスと比べても、纏ってるオーラは劣っていても、その身に潜むオーラは全体が見えない。あれは『天才』や『鬼才』の類じゃないよ。もつと別の何かだ」

ミラはそこで一拍置いて、
虚空を、しかし誰かを睨みつける

「アレに追い付く必要も、追いつく必要もないよ。あんた達はあんた達の『強さ』を身に付けるんだ。それを今ここで約束しな。そうすればあんたに魔法を教えてあげる」

琢磨はゆつくりと頷きを返し、
それを見たミラはひとつため息をついて笑顔になる。

「それは良かった。じゃあアシエルが退屈してるみたいだから早速始めるよ、立ちな！」

「そ、そんなことはっ！」

必死にアシエルは違うと言い張るが2人はそれを無視して立ちあが

る。

それに気付いたアシエルはムスツとした表情で座ったまま2人を見守ることにした。

「いいかい？魔素は血液中を流れて体の隅から隅まで流れてる。まずはそれを自覚して貰う。自然体になって目を閉じなさい。そして体全体に意識を飛ばしなさい」

琢磨は言われたとおり自然体で目を閉じた。

人に見られていることもあり、しばらくの間は全身に力が入り、緊張させていた。

それを何度かミラに注意され、ようやく落ち着いて呼吸も緩やかになってきた。

そつと、琢磨は額に誰かの手が触れられるのを感じた。

しかし誰の物かは考えられないほどに集中していた。

アシエルも琢磨の邪魔にならないよう口を引き締めて、

決して声が出ないように心掛けた。

その行動は集中することのむずかしさを知っているが故だった

その時、琢磨は自らの体を駆け巡る何かに気がついた。

それは頭のとっぺんから足の先まで細かく駆け巡っていた。

さらに右手につるつるとした感触がある。

ミラは琢磨の右手に水晶を掴ませると、

もう片方の手でそつと琢磨の手の甲を包み込む。

すると琢磨の手と水晶が淡く光る。

次の瞬間、部屋に青の閃光が迸った！！

水晶は粉々に碎け散り、窓もまた割れて下に落ちる。
本棚からは多くの本が部屋に散乱した。

突然の爆風に顔を手で覆っていたミラとアシエルは、
我に返るとすぐに琢磨のもとへと走り寄った。

「大丈夫！？」「怪我はないかい！？」

煙が晴れると、そこには青いオーラを身にまとった琢磨の姿があった。

それを目にした2人は目をこれでもかと言わんばかりに見開く。

「なんて・・・魔力量よ」

アシエルは信じられない様に言った。

「ねえタクマ、あなたガルムの奴から何か貰ってないかい？」

琢磨は胸元から護石を取り出して見せると、
ミラは思い切り壁を叩いて激昂した。

「あんの馬鹿ガルム！！なんて物を持たしてるのよ！！！」

「えっ！？えっ！！！！？」

ミラの変容に琢磨は困惑する。

「その様子じゃ何も言われずに持ってたみたいね。それは通称『神護石』。不死の神酒『エリクサー』、不老の神酒『ネクトル』、生命の源『賢者の石』、神の剣『其処ゼアナードに立つ物』、神の盾『其処エテに在る物』。創世神話でそれぞれ神の所持する物のことだけれども、それらは全て実在すると言われているわ。『神護石』は神の持つ装飾品。言い伝えでは神の指輪のことだけど、ガラムは胸飾りとして持たせたようね。『神護石』の効果は魔力の無限化。これの恐ろしさ分かる？」

「あ、ああ……。こんな物を悪人が手にしたら大変なことに……」

予想以上の品物であることを知った琢磨は動揺を隠せない。
アシエルもまた同様だ。

ミラは小さく首を振る。彼女の顔は神妙だ。

「それだけじゃないわ。アシエルはともかくタクマ、あなたは魔法を使えないのよ。そんなあなたがもし魔力を暴走させていたら……」

「タクマは死んでしまっ」

その先をアシエルが引き継いだ。
しかしもう1度ミラは首を横に振る。

「もし魔力暴走を起こせば、この国は死滅するわ」

「「!!!!!!?」」

「神は独力でこの世界を作り上げた。その源は魔力。神自身の魔力も凄かったでしょうが、それを補助するこの魔具、いいえ『神具』もまた相当な魔力を持っている。それが一気に解放されればこの国は終わりよ。その上、他の国々も半壊ね」

琢磨は呆然として自らの護石を見つめる。

「何で・・・師匠は俺にこんな物を・・・」

ミラは通信水晶で、落ちた窓の回収と事態の收拾を下階の従業員に伝えると、

「それは分かるわ。神護石は体内魔力量を多くする効果があるの。きつとそのためなんでしょうけど、あんの馬鹿ガラム！魔法を教えてから渡せばいいものを！」

「神の持ち物なのに効果が分かってるんですか？」

アシエルの質問に琢磨も頷く。

「ええ、各族長たちの言い伝えがあるの。それに神護石は一番数が多くて研究もされたことがあるからね」

「へえ、何個あるんですか？」

「4個だった。それが今日認識が変わって6個になったわ。1個は教皇が、1個はジパングの先詠姫が、1個はギルド総裁イシュリド

が、1個は勇者の聖墓に。そして2個をあなたが持つてるわ。ギルド側はイシュリド様の持つ神護石を研究してるの。わかったことは多くはないけどね」

「そうだったんですか・・・」

「さて、と。それは置いて、タクマの属性は水、魔力量は不明。まあ、神護石が収まってもオーラ纏ってたから体内魔力量もかなりの量なんだろうね。じゃあ次は鍛練場行くよ。そこで実際に魔法を教えてやろう。アシエル、お前も付いておいで」

3人は執務室を出て鍛練場へ向かった。

・
・
・
・
・
・
それを遠くから眺める存在に気が付くことなく

#37 魔法指南（前書き）

約1月ぶりの更新にもかかわらず短いです・・・

#37 魔法指南

~~~~~中央支部 特別鍛練場~~~~~

『特別鍛練場』

それはクラスA以上の冒険者のみが利用できる鍛練場であり、本部と、4国に1つずつある中央支部のみがこの施設を所持している。

一般の鍛練場との違いと言えば、ギルドの誇る【守護神】と呼ばれる冒険者の結界が張られている事のみであるが。

ただしこの結界は、クラスS以上の者達でさえ容易に破ることは出来はしないのだ。

そういう訳で、この施設では誰であれ本気を出して存分に稽古することが出来る。

結界は地面・側壁・天井に張られており、結界の結合部には何重にもなっている。

また結界は対魔・対物両方と抜かりは無い。

「・・・とまあ、こんなわけで初心者の方でも安心して魔法の練習が出来るってわけさ。初心者はどうしても魔法の暴走が起きてしまうからね。それにクラスAの方の魔法の練習を他の冒険者に見せたくないしね」

ここまで特別鍛練場のことを教師のように饒舌に語ったミラは、くると振り返って琢磨を見た。



琢磨は不思議そうに考えた後、

「何で俺の練習を見せられないんだ？」

「タクマは東方の出身でしょ？童顔だもんね。でも東方の人間が童顔だって知る人間は決して多くないのよ。そしてタクマを見てこう思う。『あんなにも若いのにクラスAだと！？その上魔法を使えないで？よし、本当に強いのか俺が試してやろう！』ってね」

面倒くさそうに、やだやだ、と言ってため息をついたミラに続いて、

「いい？タクマ。冒険者っていうのは己の力のみで生き残った連中だから、上位に行けばいくほど上の人間には寛容になるの。でも下位で留まつてる人間や冒険者になりたての人間は、強者に対して理由のない嫉妬心を覚えるのよ。もちろん全員が、とは言わないけどかなり多いのは事実ね。だからそんな恨みを買ってたんじゃまともに鍛練なんてできないよ」

と、アシエルが補足をしたら琢磨は納得した顔で頷いた。

ミラは鍛練場の中心に立つと2人を近くに呼び寄せた。

「アシエルはもう必要ないだろうけど一応聞いておきな」

「はい」

その返事にミラは満足げな様子で大きく頷く。

「うむ、いい返事だ。いいかい？まず魔法と言うのは神様に対して『お願い』をして、その『お願い』に相応する魔法を授けてもらう

って言うものだ。『お願い』は『詠唱』と『魔力』の2つを捧げる事を指す。やってみるよ、よく見ときな」

ミラは斜めに立って右腕を地面に水平にかかげて目を瞑る。

「『我が求むるは小さき炎の弾丸、其れは彼を焦がし滅す物なり』」

古代語でミラが詠唱するのを2人は黙って聞いている。

琢磨もガラムが良く魔法を使うため詠唱を見慣れており、その言葉に宿る神秘性と魔力を確かに感じ取っていた。

ミラはそこまで呟くと目をカツと見開き、

「【ファイアー】」

瞬間、ミラの右手から直径1mばかりの炎の塊が打ち出され、ゴオオオという衝撃音を出しながら飛んで鍛練場の壁に激突して土煙が舞った。

ウオオン

そんな奇妙な音とともに土煙が晴れる。

そこに見える壁にはどこにも焦げた後はなかった。

ミラの放ったファイアーは、トロールやガーゴイルを一撃で屠れるだけの威力を持っていた。

しかしそれをもってしても焦げ目すらつかない。

2人はあまりの非常識さに目を見開いていた。

「おやおや、そんなに驚くことかい？さっきも説明したろ？ここに

は結界が張ってあるって。ま、もし結界がなくなったら居間ぐらいの攻撃じゃあの壁に焦げ目なんて付かないだろうけどね」

「え？何でだ？」

「あの壁にはここから南東にあるジェルレマ山の【退魔鉱】を練りこんで作ってあるからね」

#### 【退魔鉱】

大陸で唯一ジェルレマ山でのみ採掘可能な鉱石。採掘量は少ない。魔力を分解して空気中に分散させる効果がある。また、その性質から魔法を使う魔物はこの山には少ない。

「で、よ。古代語で話した部分は省略が可能なの。もう1回見てなさい」

再びミラは目を瞑って集中する。

「『我が手に小さき炎の弾丸を』【ファイアー】」

再びミラの手に炎が顕現した。

しかし今度の塊は80cmほどと少し小さい。

「このように短縮することによって魔法を放つことも出来る。しかし見ての通り魔法の規模は若干ながら小さくなる。次にやり方だ」

ミラは形だけ先ほど通りにして顔は2人のほうに向ける。

琢磨も真似をして右腕をかける。

「そうよ。次に右手に魔力を集めて詠唱する、繰り返しなさい」

「『我が求むるは小さき炎の弾丸・・・』」

「『我が求むるは小さき炎の弾丸・・・』」

ミラノ言葉に続いて琢磨も詠唱を紡ぎ出す。

琢磨は自らの周りが熱くなるのを感じる。

「『其れは彼を焦がし滅す物なり』」

「『其れは彼を焦がし滅す物なり』」

琢磨は額にうつすらと汗が浮かぶ。

「【ファイアー】」

「【ファイアー】」

琢磨の右手からは見ても分かるほどに不安定に揺れた炎塊が、琢磨の右手を離れてすぐに弾けとんだ。

その衝撃に琢磨は吹き飛ばされて尻餅をついた。

そこに右手が差し出される、アシエルが起こすために出したのだ。

琢磨はそれを掴んでゆっくりと立ち上がりミラを見た。

ミラは予想していたのか表情に何も浮かべずに淡々と言う。

「今のは魔力が纏まらずに放出したんだ。だからタクマの制御化を離れたその瞬間に暴発したんだ。それを防ぐための方法はただ1つ、集中だよ。魔力を一気に集め、一気に放つ集中力と制御力が魔法に

は必要なんだ。今日は暇だからどんどん教え込んでいくよ！」

琢磨は綿が水を吸収するかのようにどんどん知識と技術を覚えていった。

この1日で琢磨は、一般の魔道教導院の3年に相当するだけのことを学んだ。

それは天性の才能と言つべきものであろうか……。

それとも……………

### #38 ギルドの使い方（前書き）

貨幣を分かりやすく変更しました。

銅貨＝100円程度

銀貨＝1万円程度

金貨＝100万円程度

白金貨＝1億円程度

キーヴル記念硬貨＝10億円

白金貨は滅多に市場に出回らず、組織間・国家間に流通します

### #38 ギルドの使い方

琢磨が魔法をミラから教授された次の日の朝早く、琢磨とアシエルの2人はギルド受付ロビーにて、ミラから呼びだされていた。しかし、いくら待ってもミラは現れない。

「タクマ、ミラさんはまだ来ないの??」

アシエルは待ち疲れて、ロビーにおいてあるソファーにぐったりと寝転んで天井を見上げていた。

琢磨は、元の世界にあった時計に似た『何か』を見上げて答える。

「指定された時間は朝の5時で、今は10時だから、5時間待つてることになるな。あの人も副支部長だからな。何か緊急の仕事があったんだろうさ。しばらく待つてようぜ」

それから1時間ほどした後、事務員に肩を貸されながらミラがぐったりとしながら受付奥の扉から出て来た。それを確認した2人は慌ててミラの元へと駆け寄った。

「どうしたんですか!？」

琢磨のその問いに答えたのは、ミラではなく肩を貸していた事務員の方だった。

事務員は申し訳なさそうな表情で2人に言った。

「ごめんねえ。タクマさんにアシエルさん、実はミラさんは昨日からずっとお酒を飲んでいらしたの。まったく、ミラさん!翌朝に用がある時は飲まないでください、って前から言ってるじゃないです

か」

うっ、と呻きながらミラは顔を上げた。

「悪かったよ。ガルムから貰った酒がうまいもんだからさ。ついつい1本空けちまったのさ」

「それでミラさん。私たちに何の御用があつたんですか？」

「ん？ああ、そうだったね。・・・ジェーン！あいたたた」

ミラは二日酔いなのだろう、叫んですぐに頭を押さえた。

「はーい。ミラさん、何ですー？お水ですかー？」

何とも間延びした声だ。ギルドの制服に身を包み、頭にスカーフを巻いたおっとりとした女性が、受付カウンターから身を乗り出していた。

「H 832の依頼書を持って来て頂戴！あと水も！！」

すぐにジェーンと呼ばれた女性は、コップにそそがれた水と1枚の依頼書を持ってきた。

ミラはコップをひったくると、一気にあおった。

そしてコップを押しつけると、今度は依頼書を受け取った。

琢磨はそれをさらにミラから受け取って眺めてみる。

依頼書には、まん中に薬草の影絵が、その下には『銅貨×10』の文字が。

そして一番上には『クラビカ草 求む』



ミラは若干青くしながらようやく1人で立つ。

どうやらまだ二日酔いから完全には立ち直っていないようだ。

ミラは事務員とジェーンを戻して説明を始める。

「2人は依頼書を見るのは初めてだそうだね、ガラムから聞いたよ」

「え！そうなんですか！？お2人ともAクラス冒険者ですよね？？」

ミラに肩を貸していた事務員が驚いてミラと2人を見比べていた。  
それに失笑したのはアシエルである。

「実は私たちは、お師匠様の持ってきた依頼をやるだけでしたから。  
依頼の受け方とか、報酬の受け取り方とか、さっぱり知らないんですよ」

「らしいね。まあ、すぐに覚えるだろうさ。手続きは簡単だからね。  
まず、受付横の掲示板にこれと同じようなたくさん依頼書が貼ってあるでしょ？それを剥がして受付の『受注』にギルドカードと一緒に出して。そしたら依頼受注よ。今回ならクラビカ草の採取、数は・・・30ね。30本のクラビカ草を手に入れたら、受付の『達成』のところで、依頼数のクラビカ草とギルドカードを提出してくれ。採取依頼や採掘依頼は、品質によって受取不可の場合もあるから多めに採っておいた方がいいわ。そして、依頼が達成したと認められればギルドカードと一緒に報酬を渡すわ」

「ギルドカードは誰のを出せばいいんだ？」

「依頼受注者のだけでいいわ。他の誰かと一緒に依頼をする時は受注時に申請してくれるといいわ。ただし、依頼途中で随伴者が法を

犯すようなことがあれば、責任は全て受注者にかかるの。だから、急場でのチーム結成をする場合はチーム全員で受注をしてくればいいわ。その場合なら、法を犯した者だけが裁かれるわ」

「ならもし、お師匠様が持ってきた依頼で何かミスがあったら、裁かれるのは私たちじゃなく、お師匠様だったんですか？」

ミラはアシエルのその言葉に顔を曇らす。  
それに琢磨はいち早く気付いた。

「何か、師匠に実際にあったんですか？」

「・・・ガルム本人からじゃなく、人伝てに聞いた話だから断片的にしか聞いていない。だから私からは何も言えないよ」

「そんな・・・!!」

「話は最後まで聞きな！」

悲しみの声を上げたアシエルを一喝するミラ。

「ガルムについて、私よりずっとよく知る方に接触してみるわ。その方から何とか情報を聞きだして、あなた達に教えてあげる」

「その人って誰なんですか？」

「言っても知らないと思うわ。それにあなた達では会うことは出来ない」

「お願いしても・・・よろしいですか？」

「ええ、でも期待はしないでね」

「それじゃあ、薬草採取に行ってきます」

ガラムの事はミラに任せて、2人は薬草であるクラビカ草を探しに出発することにした。

「ちょっと待ちな。ほら、これを持って行きな」

そう言っミラが取り出したのは、手帳サイズの1冊の図鑑であった。

「これは薬草の名前・写真・特徴・効能・使い道が事細やかに記されている本よ。クラビカ草は、毒草のレーラ草と似ているからね、注意しなよ」

「はい、ありがとうございます。それじゃ、行ってきます」

「ああ、行ってきな」

ミラは2人を見送ると、伸びを1つして私室兼書斎へと戻る。

「さて、と。どうやってあの方と連絡を取ろうかしら。私の権限で行けるかしらね、まったく」

## #38 ギルドの使い方（後書き）

お待たせしました。

これからまた、この小説をよろしくお願いします。

### #39 裏方事情

琢磨とアシエルが、ガラムから半独立して1月。

表の人間を置いてけぼりにしながらも、ギルドの裏では大きく動いていた。

「それで、私に何か御用でしょうか？」

映像通信機には人の良さそうな、1人の老女を映し出していた。

映像通信機。20年ほど前にギルド科学技術部によって発掘された超古代技術である。

現在では、国家間・ギルド間でのみ使用されている。とは言っても、実際に稼働しているのは発掘された12基のみで、ギルドはそれを開発して再び使用することが可能になったのである。

その上で、数基を各国に譲る代わりに、様々な国家間条約を締結することに成功した。

それから20年、未だにギルドは過去の技術を復活させる事には成功していない。

（それは、かの新旧『智神』であっても・・・）

ミラはそんな事を考えながら、本来の自分の立場なら話す事の出来ない相手に酷く慄いていた。

「お初にお目に掛かります。クラスSS、ギルド副総裁『聖母』ア

「マリア＝ベールズール様」

そう言うミラは、深々と頭を下げる。

「アマーリア＝ベールズール。ギルドの副総裁。『聖母』『ギルドの魔女』他、様々な異名がある。異名の通り、魔法が得意なのは言うまでもなく、戦闘指揮・戦術指揮・戦略指揮の手腕も疑う余地はない。クラスはSSであるが副総裁という立場や人柄から、その影響力は計り知れない。純粋な人間族でありながらも年齢は100歳を超えている。しかし見た目は70歳程度で、美の秘訣は自らを危機の中に置く、というのが彼女の名言らしい。」

「聖王国中央支部副長ともいえど、副総裁であるアマーリアとコンタクトを取る術はない。」

「それほどまでに、アマーリアとは天と地ほどの差があるのだ。そんなアマーリアとコンタクトをとれるのは、総裁イシュリド・本部長・本部副長・中央支部長、それにクラスSS以上の者たちだけだろう。」

「それなのに何故、ミラがコンタクト出来たのか。」

「ミラは当初、上司である支部長を通そうと思っていた。しかし支部長は奔放な性格であるために、ミラでさえも行方はつかめていないのである。かといって本部長や本部副長は、多少の交流はあるものの、頼みごとが出来るような中でも無い。そこで、駄目元でアマーリアへ直接、伝令の為の使い魔を放ったのである。それが功を奏し、先程アマーリアから通信機による面会要請が入ったのだった。」

「マリアで良いわ。ミラさん。それで、私に何の御用なのかしら？」

「はっ。マリア様にお尋ねしたい事があります。クラスSS『絶対強者』ガルドⅡグランベルツのことです」

「あら、珍しい名前が出て来たわね。それで？」

「彼の弟子達、タクマⅡカワサキとアシエルⅡグリードの事で。今まで彼らの受注依頼はガルド殿の代理受理で行われていました。その折、2人の失敗は規定通りガルド殿の責任として処断されるはずです。これは人伝に聞いた話なのですが……。ガルド殿に『裏』が差し向けられたと聞いたのです。それは」

「事実無根です。もし『裏』、つまり暗殺部隊が送られているとしたら、彼はもうこの世に居ないはずです。例え彼等を追い払ったとしても、ギルドは彼を追放するでしょう」

その言葉にミラは安堵の息を吐く。

「そ、そうですね、やつぱり。ではやはり、討伐し損ねた魔物の大群のせいで街が2つ壊滅したという噂も」

「ミラさん」

マリアの目が細まった。通信機越しとはいえ、マリアの気迫がミラの背筋を凍らす。

「それは噂です。噂ですがそれ以上、……。それ以上彼と親しくするのはお止めなさい。さもなくば、有能なあなたを失いたくはありません。あなたの事を少し調べさせてもらいました。ミラⅡアークス。現役時代はクラスAでSクラスの誘いも受けていた。しかしその数日後に、大砂漠の『砂喰い』ワサンドワムとの交戦で利き手を負傷。現役を



引退してそちらの支部に受付嬢として就職。前は魔物のせいで利き手を負傷されたようですね。次は人のせいで利き手を失いたくはないでしょう？まあ、利き手だけで済めばいいでしょうが」

「それは・・・一体・・・あなたは・・・何、を？・・・彼は、ガルムは！？」

「私からは以上です。これからもあなたの働きに期待していますよ。ミラ中央支部副長」

それだけ言って通信は終了した。

ミラは呆然としながら真黒なスクリーンを見つめ続けていた。

「ガルム・・・。あんた一体、何なんだ・・・？」

### #39 裏方事情（後書き）

2か月ぶりの本編更新です><

毎回言ってる気がします、毎週更新を目指して頑張ります！

あと2・3話は裏の話になりそうです

#### #40 裏方事情？

少し時間軸がずれる。

琢磨とアシエルを半独立させてから2ヶ月、ガルムはS級依頼を次々にこなして行っていた。

通常、S級依頼は、地域や国に関わらず、どのギルドであっても受注する事が出来る。

なぜなら、依頼を受けられる人数は極端に少ないのに加え、目的を達成させる場所が広範囲に及ぶためである。

「ふーむ。これで5件目か。これで討伐系は全てこなしたな」

「それでは、依頼量はこれまで通り銀行に入れておきますが、よろしいですか？」

「ああ、頼むよ」

クラスB以上になると、依頼による死亡事故も多くなることから、銀行を利用する事が出来るようになる。もし預け主が死んでしまうと、特に指定が無い場合は全て銀行の財産となる。

ガルムは、ある程度の路銀以外は全て銀行に預けていた。しかしガルムは一度たりとも預金額を見ていないため、どれだけのお金が眠っているかはごく一部の銀行管理員しか知らない。

かしこまりましたと受付嬢が頭を下げるのに、軽く手を挙げてギルドを出ると、何となしに人のあふれる市場へと移動した。

人混みのため、結構な回数で往来する人達とぶつかって行く。

それがいつだったか、気が付けば彼の手には一枚のメモが握られていた。

その中身を見ると、彼は颯爽と身を翻して市場を出、聖王国をも出立していた。

~~~~~ハルナ商連 孤島~~~~~

さらに1月後、ガルムはハルナ商連にある、名もなき孤島に居た。その島はそれなりの大きさであったが、加工しづらい樹木で覆われた上に、Bクラスの冒険者に相当する強さの魔物が数多く住みついているため、どの商団も手を出せずにいた。

「これが、^{ヘカトンケイル}【百頭百足】か。でもあの形状、報告書とかなり異なっているようだが？そもそもこの報告書誰が書いたんだ？小等教導院の1年でも、もっとまともな文を書くぞ」

ガルムは隣に悠然と立つ老人、ギルド総裁イシュリドに尋ねた。

「【樹朋】だ。【白炎】のパートナーだな」

「樹・・・朋？ああ、最年少のプラチナクラスか。そいつは使えるのか？」

「センスは悪くないが、愉快犯な面もある。白炎と同様に使いづらい奴だ」

2人は崖上で、1体の魔物を見降ろしていた。

ヘカトンケイル
【百頭百足】

それは全長50m程と報告書に記載されていた。竜が闊歩するこの時代、50mは決して大きすぎる値ではない。しかし、見降ろした場所にいるこの魔物は、優に100mを超えていた。

「龍種とかゴーレム並の大きさだよなあ。そうそういねえよ、こんな奴。それに形状はスライム状なんじゃなかったのか？普通に脚とが出来あがってんじゃねえか。合ってる点と言えば・・・」

視点をヘカトンケイルから周りへと移す。

そこには死屍累々の世界だった。

魔物の種類は100を超え、数は3000にも及ぶ。

しかし、その半数近くが骨しか残っていないのはどうしてだろうか？

それを察したのか、イシユリドは口を開く。

「北に【腐食】^{エロード}、南に【暴食】^{フォイル}、東に【智神】^{ウイズ}を配置している。おかげで魔物の大半が原形を留めていない。まあ、この数だ。かさばらない分マシだろうよ」

SSクラス【腐食】^{エロード} 【暴食】^{フォイル}

共にギルド屈指の実力者たちである。

【腐食】はあらゆる物を腐らせ、【暴食】はあらゆる物をむさぼり食う。

2人の共通点は、無傷で骨を残らせる嗜好を持つ事だろう。

SSSクラス【ウイズ智神】

ギルド最高幹部。ギルドに5人しかいない。

あらゆる知識を内包しており、ギルド科学部の所長も兼任している。ちなみに、【総裁】イシュリド、【白炎】ガイラルド（愛称ガイル）もSSSである。

「SSが2人にSSSも連れてきているのかよ。それで、西には誰が？」

「・・・【黒風】だ」

その言葉にガラムはぎょつとしてイシュリドを見遣る。

「『裏』の隊長さんか！！」

【黒風】

ギルド暗部の隊長。

暗部は総裁直属の、密偵・諜報・暗殺部隊である。

本部長ですらも規模を把握できておらず、

副総裁でさえも暗部へのコネクションを持ち合わせていない。

「最初は黒い球体、その時はラビだとか、ゴブリンだとかの小物がスライム状で足や頭らしきものが表層から出てきてからはアンデッドやオークが。そして頭が出てくると、分裂して50体のヘカトンケイルになり、オーガやワイバーンが。そして、ひとつの頭に10数の手足、体の表層も硬く安定してから2ヶ月、さっぱり動きやしない」

「それで俺を呼んだってわけか」

「そうじゃ、不測の事態に備えてのお」

「それは別に構わねえがよ、後何ヶ月かかるんだ？」

「知らぬ！」

「威張って言ってんじゃねえよ！」

ゾクリ

2人は身を翻してヘカトンケイルに目を向ける。

「何だあ？この悪感はい？」

「殺気……では無いようじゃが」

ゴポリ

ヘカトンケイルの周囲の気が揺らめく。

そこから、何百もの竜が姿を表す。

「竜種がこんなにも！！？全員に通達する！1匹たりともこの島から出すな！！」

火竜・水竜・風竜・土竜・雷竜・氷竜・樹竜・腐竜・魚竜・虫竜が、あらゆる方向に逃げようとする。

それを阻止せんと、

北では腐食が、爪を、鱗を、肉を、髪を、プレスを腐らせ、
南では暴食が、爪を、鱗を、肉を、髪を、プレスを貪っていく。

東では智神が、竜に混乱や魅惑の魔法をかけ、他の竜を落としていく。

西では黒風が、どのような術を使っているのか、次々と絶命させて
いつている。

逃げ場を失った竜達は、空をさまよった拳句、イシュリドとガルム
に牙をむける。

コンマ数秒で、数100mの距離を詰めた竜は、イシュリドと目が
合うのが分かった。

イシュリドの眼を見た竜達は、本能的な恐怖……を超えて絶望し
た。

#40 裏方事情？（後書き）

ギルドのプラチナクラスの圧倒的な強さ

今回は総裁イシュリド無双

どうして総裁はイシュリドなのかと言うお話

魔物

ラビ：鋭い爪と角の生えたウサギのような魔物。クラスはF

ゴブリン：様々な武器を扱う。個体差の激しい魔物。クラスはE～B

アンデッド：不死者。スケルトンとゾンビの2種類。クラスはC～B

オーク：巨大な人型魔獣。知能は低いが力は強い。クラスはC

ワイバーン：皮と骨と筋肉だけの細い亜竜。鋭すぎる牙が特徴。クラスはA

オーガ：筋力が超発達した人型魔獣。全てが凝縮しているため、体が小さい。クラスはA

竜：属種は多種多様。龍種は竜種の上位互換である。クラスはA～S

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8212o/>

ガルディア大陸物語

2011年11月20日14時05分発行